

---

# Absolute Desire

天童翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A b s o l u t e   D e s i r e

### 【Nコード】

N 2 1 2 3 R

### 【作者名】

天童翼

### 【あらすじ】

魔法を使う絶対的な力を持つ『王』彼が望もうと望ままいと世界は動き出す。『王』である彼の意志は無視して。そして、彼は自分に優しいハーレムを作ることができるのか？（注意・本作はカンピオーネー魔眼と魔法と祝福と共にの続編です）

## Prologue (前書き)

初めましての方、これまでにお会いした方、皆さん、お久しぶりで  
す。

帰ってきました天童翼です。

未だ、リアルは大変な日々が続くため亀更新が続くと思われます。  
申し訳ありません。

ここで、一応ですが、本編に入る前に注意事項です。

この物語は、カンピオーネ！の世界をオリキャラ主人公が、暴れま  
わります。

キャラ崩壊などの恐れがございますので、そういったことが苦手な  
方は観覧をオススメできません。

原作同様に神様を殺す描写がございますので、そういうことが嫌い  
な人も読まないでください。

これは既に公開してします、カンピオーネ！〜魔眼と魔法と祝福と  
共に〜の続編にあたります。先にそちらを読んでいただいた方が分  
かりやすいと思います。前作からの引き継ぎにあたり、オリ主であ  
る才華は魔法（ネギま！の）とギアス（コードギアスの）を使えま  
す。

そして、原作とは違い、才華が殺した神は『ゼウス』となっており  
ます。

ちなみに、ゲスト出演で11eyesのキャラであるリーゼロッテ・  
ヴェルクマイスターが登場します。オリキャラ化進行中ですが。  
そのあたり、詳しくはカンピオーネ！〜魔眼と魔法と祝福と共に〜  
をご覧ください。

今回のこのAbsolute Desireは試験的にライトノベ  
ルと同じ書き方をしてみようと思いますので、パソコンのPDFフ  
ァイルあるいは、縦書き状態での観覧をオススメします。

まえがきとあとがきは、これまでと変わりませんが（笑

（今後、評判によって既に公開している作品も編集しようかと考えています）

では、最後になりましたが、これからよろしく願います。

## P r o l o g u e

欲望、それは人が持つ希望であり力であり罪

## 七つの大罪

暴食、色欲、強欲、憂鬱、怠惰、虚飾、傲慢

それらは人間の罪であり

希望

人はそれらをして得るがために知恵を使う

そして

人間の欲望から生まれた神

己の欲望を叶える象徴、神

信仰の対象、神

存在しているか分からない存在、神

彼らの偉大さを語るために作られた神話

いつしか、彼らの偉大さを認識するための神話には大いなる力が宿るようになった

最古のフィクションとまで呼ばれる神話に

その力が解き放たれる時

この世界に神が顕現する

彼らは正しく顕現される時もある

また人間の欲望に染まって顕現される時もある

欲望に染まり正しく顕現されず、神話の掟に抗う存在



それを人々はいっしか『まつろわぬ神』と呼ぶようになった

『まつろわぬ』存在は世界を壊す

顕現される時に得た人の欲望の力で

彼らは、もはや、『まつろわぬ』身、神ではない

それは人々の欲望を集めれば集められるだけ強くなる

彼らは人には殺せない

殺せない存在を殺す者達がいる

矛盾するが、確かに殺せない存在を殺す者達がいる

人々は彼らを『王』『勝者』『神殺し』と呼ぶ

そう、『カンピオーネ』と

人々は己が生み出した罪から生まれた『まつろわぬ』存在を殺すため彼らを頼る

しかし、人々の願いとは裏腹に『カンピオーネ』は己の欲望のため、それを殺す

それは定めか？

絶望か？

神の名を持つ者を殺した贖罪か？

分からない

これは一人の『カンピオーネ』の少年のお話

彼は『魔法』を扱う

彼の『魔法』はこの荒んだ世界に何をもたらし

何を奪うのだろうか？

それは誰にも分からない

しかし

時は着々と進む

終焉の時

ラグナロクへ向けて

M  
o  
v  
e

A  
b  
s  
o  
l  
u  
t  
e  
  
D  
e  
s  
i  
r  
e

## Episode 01 同好会設立と愛しの電話

「これはいったいどういうことだ？」

俺、草薙才華は現在、とても困惑している。正直言って何でもなったかまったく分からない。この黒髪で黒い瞳を持った典型的な真面目で健全な十五歳の日本人である、この俺が・・・この俺が・・・。

「私にも分かりません・・・才華様が・・・」

そう答えてくれたのは、俺の家族であるリーゼロッテ・V・草薙だ。名実ともに俺の嫁だ。

あ、はい、ごめんなさい。嘘です。

将来的には俺の嫁の一人として本当に草薙に入ってもらおうと思っているけど、現状は草薙家の養子という形で草薙家に入ってもらっています。

と、それはおいておいて、現状、どうなっているかと言うと、俺とリズは現在、高校の放課後の教室で二人でいる。

もちろん、リズは日本の高校の制服だ。リズの銀色の髪と翠色の瞳は日本の学校の制服には、お世辞にも合っているとは言えない。

しかし、彼女の髪と瞳はそんなマイナス要素があるにも関わらず妖艶で綺麗だ。

そして何より、今、ここで俺が強調したいことはリズにとっては日本の一般的な高校生の制服では胸の大きさが合うモノがなかったため、彼女のその優しく膨らむ二つの胸は極度に強調されていた。

はつきり言って、言いよってくる男は後を絶たない、しかし、俺

ははつきり言いたい。リズは俺の嫁だ！ 文句のある奴は私立城南学院の高等部まで来い、俺が直々に相手をしてやろう。

「才華様？」

「ああ、ごめん、ちょっと考え事をしていて」

「それならいいのですが、それで今回、才華様が職員室に呼び出された件ですが・・・フツそうだわ。才華様、ここの教師への対応は私にお任せください」

そう、実は真面目な生徒である俺が職員室に放課後來なさいと担任から呼び出しを受けたのだ。まったく訳が分からない。

そしてリズの言葉の意味を理解して俺は焦る。

「いや、待ってください、リズ」

「なんですか？ 才華様、無能な家畜の飼育は私にお任せください。夕飯の仕度は本日、一郎おじい様がなさってくださいますので問題ありません」

「いや、そういう問題じゃないから！ それにリズがお話したら教師が何人か確実にやめるって！」

それほどまでにリズのお話は厳しい。

「いえ、大丈夫です。そのような不始末はいたしません。彼らには才華様を崇拜する者になりま」

「俺が悪かったです。だから、リズは何もしないで家に帰ってください」

俺は男のプライドなど全て捨てて、リズに土下座する。

はつきり言つて、俺はまだ普通の高校生ライフを送りたいから・・・。

「・・・才華様がそこまでおっしゃるなら・・・仕方ありません。私はここで待たせていただいておりますので」

「いや、いつになるか分からない説教だぜ？ それより、先に帰って静花と話していた方がリズも楽しいだろ？」

「いえ、私は才華様といわれれば、それだけで」

一瞬、リズの言葉で泣きそうになる、なんて愛されているんだ、



俺。

待っていてもらう未来も想像したが、さすがに俺の都合でリズを毎回、縛り付けるのは悪いな、と思ったから俺はリズを説得する。

本当は一緒に帰りたいんだぞ！

「ほら、静花が何でも今日はリズに勉強を教えて欲しいって言うたろ？ だから俺としても先に帰ってくれた方が助かるな」

「・・・静花ちゃんの頼みは夜でしたが・・・分かりました。才華様がそう言われるなら」

「じゃあ、また後で」

「はい」

リズと静香の仲はリズが高校になったのを気に、どんどん良くなっているからな。正直、男の俺の目から見ても、そのあたりにいる姉妹とは比べ物にならない程、仲が良いからな。

俺はリズと共に、下足室付近まで一緒に行って、そこから、リズと別れて職員室に向かう。

リズと俺の仲を邪魔する程の要件、いったい、どんな内容なんだろうか。

「失礼します」

俺は堂々と職員室の中に入る。

すると、職員室に備え付けられて談笑スペースのような所に数人の先生が集まっている。その中にいる俺のクラスの担任が俺を呼んでいる。確か、今年で三十歳みそじになるおじさんの先生だ。この人は、なかなか話しが分かる担任が苦笑しながら

そんな話の分かる担任が苦笑しながら

「これは・・・なんだ？」

と、一枚のプリントを俺に見せながら聞いて来る。

あれ？

何か変なプリントを提出しただろうか？

「先生、それはただの同好会設立の申請書ですが、何か？」

一応、敬語は大切だ。まあ、嫌いな奴には使わないがな。

あきれたように申請書の同好会名の所を指差す、担任。

そこには『美少女研究会』と書かれていた。

「先生、俺は何も変なことは書いていないと思います！」

ちよつと、強めの口調で言ってみる。

担任はこめかみを押さえながら

「・・・先生は頭が痛いよ。なぜ、こんな部活を作ろうとするんだ？」

と聞いてくる。

そんなの決まっているじゃないか。

「美少女が好きだからです！」

俺は元氣いっぱいに答える。それを聞いた担任と周りにいた先生も頭をかかえる。

何だ？ この頃、片頭痛でも流行っているのか？

「草薙・・・先生も男だ・・・こい言っちゃなんだが、可愛い子は好きだよ？ でも、な。これはダメだ」

「なぜですか！？」

意味が分からない！ 美少女が好きならいいだろう！ 先生！

「なぜですか？・・・て、おまえ・・・」

「俺は校則を何も破っていませんよ！！」

そう、俺は校則を端から端まで読みこんで、校則の穴と言う穴について、まったく問題がないようにして同好会申請書を書いた。

それにこの城南学院は私立だ。

だから、生徒達のやる気だけで、ある程度、マイナーな部活も存在する。化学実験部や写真部のようなものが良い例えだろう。

「なぜ、科学部が良くて美少女研究会はダメなんですか！ 同じ研究をするじゃないですか！」

「草薙、まず、初めに科学部員と科学部の顧問の先生に謝ってきなさい」

「それなら、なぜ、漫画研究部は良くて、美少女研究部はダメなんですか！ あそこは部員数が十五人だったはず、それに対して我が

美少女研究部は部員数、三十六名ですよ！　それも、この部に参加できるなら本命の部活をやめても良い！　という部員さえもいるんですよ！」

「・・・おまえの言いたいことは良く分かる・・・だが・・・だがな、草薙、PTA委員会に何て言うんだ？」

「くっ！？　こんな所で諸悪の根源の名前が出るなんて！　今度こそ騙せると思ったのに！」

「この同好会の名前で騙せると思った、おまえの考えが分からないよ」

ちなみに、俺はこれまでに、『女の子を研究する会』や『ハーレムを作ろう会』を作ろうとしていた、だがPTA委員会に今まで一切許してもらえなかったのだ。

「しかし！　今回の俺は一味違います！」

『っ！？』

先生達に衝撃が走る。

俺が用意した切り札は！

「男共の親父さんのPTA委員を取り込むことに成功しています！　主に、不倫していた親父さんの証拠写真を奥さんに見せるぞ、と脅して！」

「いやいや、主に反対するの女の子の母親のPTA会長だから・・・後、後半は聞かなかったことにするぞ」

「くっ、またしても俺の野望を・・・邪魔するのか・・・いつか・・・いつか・・・おまえを倒してやるからな！　PTA委員会！」

俺の叫びを軽くスルーして我が担任は話題を変える。

なかなか、手ごわい！

「しかし・・・草薙も毎回毎回、良くこれだけの部員を集められるな・・・先生としては頭が痛いが」

「それは、俺の入学式の時の演説を聞いて俺のことを慕ってくれている連中ですよ」

「な！？　あの演説を、か？」

驚く担任。何だよ。俺、きちんと演説したぞ！

「あの演説とは失礼ですね！」

ちなみに内容は『俺の将来の夢はハーレムを作ることです』だ。

「確かにあの挨拶というより演説は確かに内容を除けば先生達も感心できるものだった・・・内容を除けばな」

「まあ、それについては後で話すとして、どうやってPTA委員会を納得させるか今は考えましょう」

「そうだな・・・て、上手いこと先生をのせてもダメなものはダメだ」

「くつ、こんな所にPTA委員会の回し者がいたとは・・・」

「そろそろ、真面目な話をしたいのだが？」

「分かりました」

「おまえのその変わり身の早さは評価するよ。草薙、率直に言うとおまえをどうにかしようか？ という案が出ているんだ。おまえの・

・演説から確実にこの城楠学院は騒がしくなったからな」

少し真剣な顔をする担任。

ここは少しでも真面目な話を俺はしないといけないかな？

「無理ですね」

「なぜだ？」

「俺は特に何もしていないからです」

「は？」

「俺がやったことと言えば入学式の演説のみ、それも反省文を書きました。それでその話は終わっている。ただ風紀を乱しただけで処分すれば、他の生徒の反感を買い、ネットなどに悪い噂がたてば、来年の受験者数に響く。だから俺を処分するのは不可能です」

「はっはっは、先生が一本とられたな。ほら、教頭先生、無理だったでしょ？ 草薙は言っていることは滅茶苦茶ですが、賢いんですよ」

すると、奥の方で教頭先生が苦虫を噛み潰したような顔をしている。

ふ、勝った。

「ほら、今日はもう帰っていいぞ。きちんと一線は越えないようにしろよ、草薙。まあ、おまえに限ってそんなことはないだろうが」

「分かりました、失礼します」

ちなみに、教頭先生の名誉のために言っておくが、あの人、メツチャ良い人だぞ。

朝の通学路のごみを毎日、一人で拾うくらい。

ただ、良くも悪くも真面目すぎるんだ。

さて、と。教室においた鞆を取りに行つて帰るか。

教室に着いた所で俺のポケットの中にある携帯電話が鳴っているのに気づいた。

携帯電話に表示されている名前を確認すると、俺はテンションを上げて電話に出る。

「もしもし」

『あら、才華、今回は早かったのね』

携帯のスピーカーから聞こえてきたのは女王様を思わせるほど、相変わらず、自身満々な声だった。

今、俺に電話をかけてきてくれた少女の名前はエリカ・ブランドッリ。

イタリアに行った時に会った少女の一人。

俺が知っている原作と同じで少し赤みのかかった金色の髪に海のように明るい蒼い瞳をもった少女だ。

しかし、最初は原作以上にツンで俺もエリカを俺のハーレムに迎えるのは諦めていたんだけど、てか、エリカをハーレムにいれること事態、考えなかった位だな。

護堂が神に思えたよ、マジで。

でも、今は本当に彼女のことを愛おしいと思える。

不思議なもんだな。

「いつも、エリカが電話をかけて来た時はマッハの速度で出ているつもりだけだな」

『前、電話をかけた時の話よ、ものすごく待たされたわ』

「それはエリカが授業中にかけてくるからだろ？ 俺だって、でたかったさ」

『嘘、ばっかり、本当に出たければ魔法を使えば簡単でしょ？』

「日常生活でそんな簡単に魔法を使ったら自分で、どうにかしようとする力が薄れるような気がしてな。嫌なんだよ」

嘘です。実は横の席のリズのお説教が怖かったから、でれなかっただけなんだけど、モノは言いようだ。

リズは俺が授業をサボると機嫌が悪くなるからな・・・。

『そういうことにしておいてあげる。でも、あんまり待たせると私、どこか別の人の所に行くかもよ？』

「その時は全力で取り戻しに行くさ」

『ふふ、ありがとう』

「なんで礼を言うんだよ」

『内緒よ』

「それで？ 本題は？ 俺としてはエリカの声が聞けるだけで満足なんだけど」

ちなみに、何で、エリカは日本におらず、未だにイタリアにいるかというと、春休みに、つまり、俺が『魔法の王』となった時に起こった『あの戦い』の後、パオロ卿が『赤胴黒十字』に戻って来て欲しいとエリカに頭を下げたらしい。

エリカ的にも、俺をバックアップする組織が欲しかったらしく、将来的に俺の傘下に入ることを条件に復興を手伝うことにしたらしい。

もちろん、俺が後ろについている、ということは俺は知らないが何かでアピールしているらしい。それで自国の王に恥をかかせた事で文句を言ってくる結社はいないらしい。

まあ、俺はエリカを信じているので、何も口出ししないつもりだ。それはさておき、今は本題だな。

俺は電話のスピーカーから流れてくるエリカの声を待つ。

『失礼ね。私があるで用事のない時には連絡してこないみたいな言い方じゃない？』

「それなら、毎日、電話で声を聞かせて欲しいな」

『っ！？ わ、分かったわ・・・それなら・・・ゴニョゴニョ』

最後の方は小さすぎて何を言っているか聞きとれない。

それにしても、やっぱり、エリカと話していると楽しいな。もちろん、リズと話していても楽しいけど。

「まあ、俺はエリカのこと好きだから、連絡が数日なくても我慢するんだがな」

『あ、あら、そこはあ、愛している、と言って欲しかったわ。減点十点』

「厳しいな」

『ええ、厳しいわ・・・と、ごめんなさい。本当なら、もっと、あなたと話をしていたいのだけど、今、あまり時間がないの。だから用件に移るわね』

本当に名残惜しそうに言うエリカ。

「分かった。それで」

『今回は才華がいると上手く運びそうな案件があるの、明日、イタリアに来てくれないかしら？』

「分かった」

『それじゃあ、切るわね。愛しの我が君、イタリアでお待ちしております』

「あ、ああ」

エリカが突然、愛しの我が君なんて言うから、少し声が高くなってしまった。

『ふふ、最後にやっと一回だけ主導権を握れたわ』

本当に嬉しそうな声で、そんなこと言われたら何も言い返せないじゃないか。ちくしょう。

電話を切ると俺は家に帰るために教室を後にする。

エリカがこの時期にイタリアに来て欲しいということ saying てるのは分かっていた。

原作の知識があるからな。

しかし、当面の問題は・・・

静香とリズの説得だな。

俺はと言いつつ、必死に頭を回転させながら家に帰るのだった。

こういう時、一切、俺の能力の一つである『幸運』は発動しないからな・・・いや、マジでどうしよう？



## Episode 01 同好会設立と愛しの電話（後書き）

次回の更新は3月4日頃を予定しています。

そして、3作更新停止状態でこれを言うのもなんですが・・・以前、つまり魔眼と魔法と祝福と共に書き始めたIS インフィニット・ストラトスの二次作を・・・投稿しようか悩んでいます（汗ある話以降が書けずに十数話で書くのをやめていますけどどうするべきか・・・

まあ、それはさておき、では、また次回、お会いしましょう

## Episode 2 女神との出会い

「はあ、やつと着いた」

才華は背伸びをしながら、イタリアの空港でそう言った。

彼は今さっきイタリアに着いたのばかりだった。

しかし、本日、彼は今までにない位、疲れている。それはなぜなら、彼のイタリア行きの前日の草薙家の食卓での話し。

「俺、明日イタリアに行ってくるわ」

「・・・はあ？ お兄ちゃん、また突然、変なことを言い出して。良い？ まだ、この間、イタリアに行ってから半年、うんうん、一カ月も経ってないよ」

現在、草薙家は夕食を家族四人でとっている最中だった。四人と言っても才華、リーゼロッテ、静花、一郎だ。彼らの母は仕事先に泊まり込んで働いているため、滅多に家に帰って来ない。父親は母

親と離婚して、家を出ているので、草薙家では基本的にこのメンツで食事をとる。

「そうだったか？」

「うん、そうだよ。今はいつ？」

「え　　と、五月の終わりだが」

「春休みは三月だね？　それで先月の四月にもイタリア行ったよね？　普通はこんな頻度で外国に行かないよ！」

少し顔を赤くして怒る静花、そして彼女はその可愛い顔を突然、曇らせて。

「浮気なの！？　リズお姉ちゃんというものがあひながら浮気なの！」

「し、静花ちゃん！？」

それを聞いて狼狽したのは、今まで会話には参加せず黙って才華と静花のやりとりを聞いていたリーゼロッテだった。

「わ、私は才華様のか、彼女ではありません・・・ゴニョゴニョゴニョ」

「リズお姉ちゃんは甘いよ！　お兄ちゃんは、ただでさえもハーレム、ハーレム言っている浮気癖があるのに！　そんな甘いこと言ったらどっかの目狐にとられるよ！」

「で、ですが・・・」

「おい、静花！　浮気癖って！　ハーレムと浮気は違うんだよ！」

「一緒だよ！」

「違う！」

このやりとりは草薙兄妹きょうだいの中では三日に一度は起こる行事だった。才華はハーレムを浮気ではないと言い張り、対称的に静香はハーレムを浮気だ、とずっと主張し続ける。かれこれ、このやりとりは既に三年程されているが、どちらも折れることはなかった。

「はは、ところで才華、いつまでイタリアにいる予定なんだい？」

才華と静香の言い合いで話題が脱線している中、一郎はその長年の手腕で二人の言い争いを止め、さらに本題へと話を戻す。

「あ、ああ、じいちゃん。一応、日曜日の夜には帰って来る予定だけど・・・もしかしたら月曜日になるかも」

これは嘘である。

本当はエリカに帰るのは月曜日にして欲しいと頼まれているのだが、ここで学校を休むと言うと静花が、また文句を言い出すので才華は逃げたのだ。

「そうかい。じゃあ、才華もいないことだし、商店町の徳永さんの所に寿司でも食べに行こうか」

「え！？ 良いの！」

それに反応したのは静花だ。

もちろん、才華も寿司は食べたい、しかし、これは才華のイタリア行きを許可してやろうという一郎の意思表示でもあったため、ここで何も言う訳にはいかなかった。

ちなみに静香にイタリア行きを反対されたくない才華は夕食後、何も言わずに一人で食器洗いをするほかなかった。才華が食器洗いをしている間に静香がリーゼロッテに昔、一郎から教えられた『浮気した夫を追いつめる方法』の授業をしていたのは才華にとっては知らない方が良い話だろう。

そんなことがあったために才華はイタリア行きの飛行機に乗った時点ですでに、体力をほぼ使い切っていたのだ。

そんな疲れきっている才華が、預けていた荷物を受け取ってすることは自分を待っていてくれるであろう、少女を探すことだった。

（確か・・・今回の出迎えはエリカが来てくれるんじゃないかな？ 何かの会議に出ていたような気がする）

既に、この世界に来て十六年程、過ごしているため、どうしても、

前世の知識が薄れてきていた。それでも、残ったはずかな記憶を元にエリカのメイドらしき人物を探す。

才華が周りをキョロキョロ見回している時だった。

「え」と、草薙才華さんですか？」

後ろから、声をかけられた。

それに才華は首を傾げる。

（あれ？ 確か、今日、迎えに来てくれる女の子は一人じゃなかったっけ？）

自身の記憶と違うことに戸惑いながらも声をかけてくれた『三人』の少女を観察しながら、返事をする。

「はい、そうですよ」

「良かった、見つかった」

才華の言葉を聞いて、才華に話しかけた一番歳が上であろうメイド服を着た少女は手を胸の前で組んで安堵した様子だった。

そして、彼女は

「エリカ様にハーレム、ハーレムって、言っているバカな男の人を迎えに行つて欲しいと言われた時には驚きましたよ。まさか、カンピオーネの愛人であるエリカ様に会いにそんなバカな男の人が来るなんて思わなかったですから」

彼女の顔は笑顔でとても無邪気に笑っている。

（この子は・・・俺に嫌みを言っているのか？ いや、待て待て・・・こんな無邪気そうな顔の人が腹黒いはずがない・・・とりあえず、落ち着け俺）

才華が難しい顔をしたのを見ると、少女は

「どうしました？」

と、聞いてくる。

そこで才華は気づいた。

（後ろのメイドさん、二人の顔が滅茶苦茶、ひきつってる・・・少なくとも後ろの二人はまともみたいだ・・・まあ、仕方ないから後ろの二人のメイドさんに案内してもらおう）

「ところで、エリカは？」

一応、この場になぜ、エリカがいなかったについての理由は知っているが、なぜ知っているのか？ と聞かれるとまずいので、一応、聞いて見る才華。

すると

「草薙さん！」

才華は突然、怒鳴られた。

「はい！？」

「エリカ様です！」

メイドの少女の顔には先ほどの笑顔はなく真剣な表情でそう言うメイドの少女。

（なぜに！？）

もちろん、まったく意味が分からない才華。

「あの・・・」

「なんですか？」

「何で呼び捨てはいけないのでしょうか？」

この若干変なメイドさんの方が才華よりも年上のようなので、一応、敬語を使つて聞く才華。

すると、少女は『まあ！？』と驚き、それから自慢げに語りだす。  
「今、イタリアの魔術師の間ではエリカ様は、憧れの的存在なんです！」

それに便乗するように彼女の後ろに控えている（真面目そうな）メイドさん、二人も（ちよつと変な）メイドさんの言葉に頷いているので才華は少し焦る。

（なんだ！？ イタリアの女の子の間でエリカはいいたい、どんな存在なんだ！？）

「聞いていますか！！」

「は、はい」

「それならいいです！ エリカ様はそう、ロミオとジュリエットのジュリエットなのです！」

そう言った後にメイドの少女は自身の妄想の空間にトリップしてしまっただけで一人で体をクネクネさせている。

「あ、あの・・・」

そう才華が話しかけても・・・反応はなかった。

（結局、この子は何が言いたかったんだ？）

その悲惨な光景に見かねた後ろに控えていたメイドが才華に話しかける。

「草薙様、申し訳ありません。彼女は私達よりも歳は上なのですが、メイドとなつての日が浅いのです」

「そうなんですか」

才華に話しかけて来たメイドはエリカと同じような赤色が少し混じった綺麗な金色の髪に緑色の瞳をした少女だった。

「彼女は・・・一応、エリカ様の専属メイド、名をアリアンナ・ハヤマ・アリアルディです。本来は彼女だけが草薙様のお迎えに上げるはずだったので・・・彼女は・・・」

メイドさんは言いずらそうになる。

「まあ、理由はだいたい・・・」

「ありがとうございます。私の名前はリリシア・サーチエス、この子がエリナ・エンゲージです」

リリシアと名のつたメイドの少女は自分と同じように先ほどまでアリアンナの後ろで控えていた眼鏡をかけ、金髪のショートカットのメイドの方を指さす。

紹介を受けたエリナは何も言わずに礼だけする。

「それで・・・あの・・・彼女も今、イタリアでもっとも有名なお話、『魔法の王』と『紅の姫』、の話にさえならなければ・・・それなりに普通なのですか・・・」

アリアンナの方を向いてそう言う、リリシア。

「そうなんですか？」

「ええ」

（それにしても、『魔法の王』って俺のことじゃないか？）

才華の考えは間違っていないイタリアで今、彼以外に『魔法の王』と名乗る者は唯一人でさえもないだろう。

「気になりますか？ 『魔法の王』と『紅の姫』？」

そう控えめに聞いてくれる、メイドさん。

その言葉にYESと答えると、彼女は嬉しそうに話した。アリアンナ程ではないが、彼女もその話しが好きなのだろう。

話しはこうだった。

一人の健気な少女<sup>エリカ</sup>は魔術結社の政略結婚のせいで愛し合う人と別れて他の権力者と結婚しろ、と命令されたのだ。<sup>サルバトレ・ドニ</sup>

そのことに反発する少女<sup>エリカ</sup>。

しかし、現実は無情で彼女の思いとは裏腹に魔術結社に誘拐されてしまう。

そして無理矢理に結婚させられそうになった時、颯爽と現れたのは少女と愛し合っていた少年<sup>サイカ</sup>だった。<sup>エリカ</sup>

少年は少女のために禁忌である『神』殺しまでして力を得て来ていたのだ。<sup>エリカ</sup>

彼はボロボロになりながらも、権力者<sup>サルバトレ・ドニ</sup>と戦い、勝利を手にした。

と、言う、今時では珍しい王道のラブロマンスだった。

それを話した後、リリシアはこのお話、本にもなっていて本年度一番のベストセラーになっていると話した。



もちろん、一般向けに販売されているものはフィクションと書かれているが、と。

しかし、魔術関係者には、エリカが実話だ、と振れ回ったため、皆、信じてしまっている、と。

ちなみに、その本の作者はエリカだと。

「草薙さんにも、私の三冊持っているうちの一冊、布教用をお貸しいたしましょうか？」

リリシアは純真無垢な瞳で才華を見る。

しかし、才華は今、それどころではなかった。

（・・・まさか、エリカの奴・・・あの話を本にしていたなんて・・・俺は聞いていないぞ・・・これで、この子達に俺が『魔法の王』だとバレでもしたら・・・質問攻めになる・・・長時間のフライトで疲れているのに・・・そんな目にあつたら軽く死ねる）

ちなみに、第二巻『愛しき人と』の発売日は一ヶ月後なのだが、それを今の才華が知る由もない。

「な、なあ、エリカは？」

才華は必死に話題を変えようとする。

「エリカ様は今、大事な会議に出られておりますのでもう少し時間が経てば電話がかかって来ると思います」

「わ、分かった。じゃあ、とりあえず、町に行きたいんだけど・・・」

「はい、町案内をするようにエリカ様より言付かっております」

才華とメイドがそう話した時、手の空いているエリナが

「アリアンナさん、そろそろ、草薙様に町案内をします、戻って来てください」

と言いながら、冷静にチョップしたのだった。

「ふお、ふお、ふお、赤銅黒十字の今をときめく『姫』と話しがで  
きようとは。サインでも、もらおうかの」

ホテルの一室に老人の笑い声が木霊する。

今、私はある案件の会議のために、まだ昼間なのに、カーテンを  
閉め外に一切中の状況が分からないようにした部屋で三人のイタリ  
アを代表する結社の代表者と話をしている。

この場にいるのは、『老貴婦人』と『雌狼』と『百合の都』の代  
表者。

ちなみに、『老貴婦人』と『雌狼』の代表は歳老いた結社の総帥。  
『百合の都』に関しては私と同じ大騎士だけど。そう言っても、私  
より遥かに歳上の30歳位なのよ。もう少し、年の近い話の分かる  
子が同席して欲しかったわ。

「あら、私でよろしいのかしら？　我が『王』との会話の方がした  
いのでは？」

「お二方とも、そろそろ、本題の結論を出したいのでお戯れは程々  
に」

あら、『百合の都』の代表である『紫の騎士』も先ほどまで、私  
と『雌狼』の老人の話を興味心身に聞いていたのに。

私の愛する人と違って素直じゃないのね。

まあ、あの人も初めは素直ではなかったけど。

「何を笑っておられるのですか？」

『紫の騎士』が私に聞いてきた。

「あら、先ほどまで、私の愛しの君の話しをしていたのですよ？」

誰のことを考えていたか？ など簡単ではありませんか？」

「ふお、ふお、ふお、これはエリ力嬢の勝ちじゃな」

『雌狼』の総帥が笑いながらそう言ってくれる。

「・・・そろそろ、話を始めませんか？」

「と、申されましたも、答えは決まりきっているんですけどね」

そう言う私に『雌狼』の総帥以外の二人が驚いた様子だわ。分かってきているとばかり思っていたけど。

「あら？ では、『百合の都』の大騎士『紫の騎士』殿はヴァルカンの『王』をイタリアに召喚するのですか？」

「それは・・・」

当たり前でしょう？ あんな何をしでかすか分からない爆弾を抱え込むなんて嫌だわ。

「では、サルバトーレ・ドニ様、『剣の王』が不在の今、江南の羅濠教主？ それともコーンウォールの黒王子ですか？ 彼らは自分の治める結社の総帥です。傘下に入らずに助力を得られるはずはありませんが？」

これでチェックメイトかしら？

他の王の方々も、タダで助力してくれることはないから。だから、彼を頼らざるを得ない。

「ふお、ふお、ふお、これはやられたわい。これでは『紅の姫』の愛しの『魔法の王』に頼らざるを得ない」

私の言いたいことを『雌狼』の総帥が先に言ってくれた。まあ、これも交渉術の一つだろうけど。少しでも、他の結社よりも私に近づいて才華に取り入るつもりだろう。私がそんなことはさせないけれど。

まあ、そんなことも分からない他の二人は万倍マシかしら？

「しかし・・・彼は・・・未だに・・・本当に・・・」

『紫の騎士』は未だに状況を理解していないわね。チェックメイトの状態から、反論するなんて・・・もう少し賢いと思っていただけ。では、『紫の騎士』殿は彼、草薙才華が『王』つまり、カンピオ

「ネである証拠があれば、彼に『まつろわぬ神』の遺産を預けると？」

「・・・ああ」

煮え切らない男ね。まあ、仕方ないのかもしれないけど、ことがことだけに。

「では、『紫の騎士』殿の前で力をご覧にお見せしましょう。実は彼、『魔法の王』をこのイタリアの地にご参上していただいております」

さすがに、それはないと思っていたのかしら？ 三人共、驚いていた。

「ま、まさか・・・我々の会話を・・・」

聞いていたのか？ と聞きたいんでしょうね。でも、聞いているかもしれない状況でそれは言えないわね。

「クスツ、大丈夫ですよ。彼が今、ローマ市内にいるのは本当ですが彼はこの場にはいません」

「・・・そうか」

突然、落ち着きを取り戻す『紫の騎士』。現金なものね。『王』は怖いけど、偉そうにはしていたいなんて。

「では、今晚、彼の力をお見せいたしましょう」

「・・・それは楽しみだ」

『紫の騎士』は、そう言いつつもどこか、不安げだったわ。でも、分かってくれたようね。この中で誰が主導権を持っているか、を。さてと、こんな無駄な会話はもう切りあげて才華に会いに行きましようか。

アリアンナが上手い具合に才華を引っかき回してくれているといっただけ。

早く、彼の困った顔がみたいわ。

「では、これで私は失礼します」

才華にもらった紅い色のドレスをひるがえしながら。

「・・・もう無理」

才華は現在、とあるカフェテリアのテーブルの上に突っ伏していた。

「何で君たちは平気なんだ・・・？」

才華が見たのは彼の目の前に優雅に座っているのはリリシアとエリナだった。

エリカ専属メイドであるアリアンナは現在、紅茶とサンドイッチを注文しに行っていた。

『メイドですから』

二人のメイドさんは満面の笑みで答えた。

なぜ、才華がこんなに疲れているかと言うと。

あの後、才華達が市内に向かうのに使ったのはメイド達が用意した家庭用の車だった。

才華としては、リムジンとかでもいいんだけどな　と、思っ

ていたのだがお客の身なので何も言えなかった。

ちなみに、エリカが迎えに来た時は常にリムジンだった。

そして、事件は・・・車の中で起こった。

車の後部座席に才華が座つたのを確認すると、アリアンナは絶対として、他のメイド二人がいそいそと体にびったり、とシートベルトを締めたのだ。

当然、胸が強調される。

男の才華としては、ラッキー！　と思ってシートベルトを締め忘れたのが仇となった。妄想少女だったアリアナがハンドルを握った瞬間。

キイイイイ！　と車のタイヤが急激に回転する音が聞こえてきた。

もちろん、そんな不自然な様子に才華が首を傾げた瞬間。家庭用の車が・・・ローマ市内を爆走しだした。

「いやああああ！！」という才華の悲鳴を余所に涼しい顔でアリアナは鼻歌を歌いながら運転を続けた結果。

才華は・・・家族への奉仕活動と長時間のフライトで消耗していた体力を殆ど使いきるようになってしまった。

「はあ、さつさと来いよ、エリカ」

才華がそう軽く愚痴った時だった。後ろから普通ではない気配を感じた。

「っ！？」

才華は後ろを向くと同時に自身の魔力を高めていく。いつでも戦えるように。

「そう慌てるな。神殺し、まだ妾に戦う意思は・・・てつきり、この地にいる魔剣を持つ神殺しかと思っただが・・・そなたからは最も懐かしく、最も親しく、最も憎い男の気配がする」

そこに立っていたのは未だに十にも満たないであろう銀色の髪の少女だった。

彼女はセーターに短いスカート、キャップをかぶったという普通の少女だったのだが・・・才華にとっては違った。

才華はそれを聞いて何か確信めいたモノを得た。

（この子は・・・きつと・・・奴に関係する・・・確か原作では・・・くつ、名前が思いだせない）

「まあ、今はそなたのことはどうでも良い。妾の目的はこの地に眠る『蛇』を手に入れることだ。それにそなたも我と同じ異邦人だろ

う？」

「・・・いくら可愛い女の子だからって一方的に話すのはやめて欲しいな。俺は女の子に口説かれるよりも口説く方が好きなんだ」

言葉は優しいものの才華の目は鋭い。

「ほう、そなたと口説き合いをするのも悪くないが・・・今は時間が惜しい失礼するぞ」

そう言っただけ彼女は人ごみに消えていった。

「ふう」

ため息をつきながら

（この子達を守りながら戦ったら勝てたか分からなかったな）

そう考えていた。才華は基本的に他人がどうなろうと知ったことではない。それを非難されれば彼は笑いながら『おまえは正しい、正義の味方だ。だけど俺はそれでも考え方を変えないよ』と言うだろう。

才華は正義の味方ではないので全ての人を救えるとは思っていない。

しかし、自分の知り合い、つまり、彼の身内だけは救おうと全力を尽くす。

それが、この場では目の前のメイド二人だった。

ほんの二時間程前に知り合った子だが、エリカの知り合いである以上、見捨てるつもりはなかったのだ。

「草薙様・・・」

先ほどの会話を聞いていたメイドは・・・何かを読みとったようで・・・小さく弱くだが、才華の名前を呼んだ。

そんな時だった。

「お待たせしました！」

空気を読まず紅茶とサンドイッチをトレイにのせたアリアナが戻って来た。

アリアナが戻って来たにも関わらず、まだ縮こまってしまっている様子のメイド二人に才華はニコツと笑って指を口にあてて。

『黙っていてね』という意思表示をした。

すると二人のメイドであるリリシアとエリナは『ボスッ』という音が聞こえそうな程の速度で顔を真っ赤にしたのだった。

（ん？ どうしたんだ？ この子達・・・さっき吹いた風がのせいかな？）

「はい、草薙さん、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

見ると、アリアンナが笑顔で才華のぶんの紅茶とサンドイッチをのせたトレイを差し出してきた。

ちなみに、なぜ、一番年長のアリアンナが二人の歳下のメイドを差し置いて仕事をしているのかと言うと本人曰く『私・・・時々、失敗してしまうんです・・・エリカ様の専属になるまでに二人にはとても助けてもらったので・・・こういう一緒に仕事をする時は基本的に私が動くようにしているんです』だ、そうだ。

「それから、お願いがあるんですけど」

「なんでしょうか？ やっぱ、観光をしますか？」

「いえ、携帯電話を貸してもらえませんか？ エリカに電話をかけます。今すぐ、あいつと話さないといけない案件ができましたので」

「はい？」

物語はゆっくりと、違う方向に進みだすのだった。





## Episode 02 女神との出会い（後書き）

Episode 02はいかがだったでしょうか？ それなりに自信があります（笑）

特にエリカ様が作家になっていたくだりとか。

正直に言いまして前作から二次作であっても、原作ブレイクを行い過ぎて、かなり原作から離れてしまっているのが、悩みの種です（汗

一応、原作と同じ流れで、もう少しいきたいと思っているのですが・・・。

そのあたりについて、皆様のご意見を聞かせていただきたいので、お忙しい中、大変だと思いますが、少しでも構いませんので、感想の方を書き込んでいただけると、助かります。

今後の話を書くときの参考にもなりますし、よろしくお願いします。

それと、前回、感想をくださった、コタロウさん、Tさん、いも犬さん、本当にありがとうございます。

今回の更新は、3月11日になる予定です。

では、失礼します。

### Episode 3 絶対的な交渉

「久しぶりだな、エリカ」

「ええ、久しぶり」

初めに声をかけたのは言うまでもなく才華だった。

彼女、エリカがレストランの前にいるのを見つけるとすぐに声をかけたのだ。

そして、あきらかに高校生が入るのには不相応な高級そうなレストランに足を進める二人。

その後ろには才華をここまで案内して来たアリアナが静かに歩いていた。

他のメイド二人はエリカ専属ではなく、赤銅黒十字から『王』である草薙才華をイタリアに迎えるにあたって貸し出されたメイドであるので、一度、結社の本部に戻った。メイドと言っても彼女らは赤銅黒十字の魔術師見習いだ。

「それにしても、まさか、先に向こうの方から才華に接触してくるなんて私も予想外だったわ」

「ああ、俺もイタリアに入った時点ではまるで気配を感じなかったから・・・顕現、いや、顕現する時には周りに大量の呪力が集中するから分かるか・・・」

「なら、イタリアに現れてすぐに才華の元を訪れた、と考えるのが妥当かしら」

係の者が才華とエリカを案内する中、二人は先ほどの電話の続きの会話をしていた。

もちろん、前世の記憶で今回のイタリア訪問で『まつろわぬ』存在との接触は覚悟していた才華だったが、いかせん、早すぎた。

（この世界は、俺と言う存在のせいでだいぶ、変わってきているみたいだからな・・・相手に俺の存在が知られる前にエリカと会って対策をたてたかったんだけどな。アリアンナさんの車の運転や、俺の知識にはない二人のメイドさんの存在で・・・気が抜けていたか・・・はあ、ただ、ハーレム作りたいだけなのに、なんでこんな苦勞してんだろ？）

今、才華とエリカが入ったレストランはエリカが予め予約していた赤銅黒十字にゆかりのある、レストランである。

店員に寄って案内されたのは外の景色が見える洒落た席だった。

そこから見える景色は、幻想的で若いカップルに人気の場所だろう。その席にあった椅子の数は二つだった。このレストランに入ったのは才華、エリカ、アリアンナである。

「エリカ」

「ええ、あなたの言いたいことは分かるわ。アリアンナのことでしよう？」

エリカは才華に名前を呼ばただけで才華の言いたいことを把握してしまう。

「アリアンナは一応、メイドで仕事中のの。仮にも主である私と同じ席には『仕事』中はつけないわ。それに、今日のディナーの間はアリアンナにも給仕をやってもらうから、あなたが気にすることではないわ」

「そうです、草薙さん、私はメイドですから！」

少々、胸を張って偉そうに言うアリアンナだが、童顔なせいにか子供が大人の真似をしているようにしか見えない。

「分かったよ」

才華も別にエリカの雇用事情にまで口出しする、つもりは毛頭ない。

「それで、アリアンナ」

「はい、なんですか？ エリカ様」

自然と自分より下の女性を呼び捨てにして自分は『様』をつけられても堂々としているあたり、やはりエリカはお嬢様体質なのだろうな、と勝手に思う才華、未だにリズに『様』と呼ばれるたびにドキツとしてしまう才華はそう思わずにはいられなかった。

「彼、草薙才華を丁重におもてなししたかしら？ 彼は将来の夫で本物の『魔法の王』なのだから」

エリカはほほ笑みながらアリアンナにそう言った。

才華は知っているエリカが、このような笑みをする場合のほとんどが才華に悪戯をしようとした時だ。

（かんべんしてくれよ・・・エリカ）

それを聞いた瞬間、アリアンナは顔を青くして赤くして才華を見てエリカを見て百面相をしていた。

そして、アリアンナがやっとの思いで才華に言った言葉は

「草薙才華さん！」

「なに？」

「サインください！」

困った顔をする才華を見てエリカは隠れて笑っていたのを知っている才華からすれば、苦笑するしかなかった出来事だった。

「えへへ」

現在、食事はメインの料理である肉料理まで進んでいた。

本来なら静かに後ろで控えていないといけないはずのメイドであるアリアンナは上機嫌で少し声を弾ませて給仕をせずに、本を抱えていた。

先ほど、才華は初めてサインというものをアリアンナの持っていたエリカの書いた小説にしたのだ。

もちろん、そのサインは芸能人がファンにするような整ったものではなかったが、アリアンナが気にいってくれたようなので、

（まあ、いつか）

と流してしまう才華だった。

「それにしても、なんで、小説なんて書いたんだ？」

「あら？ 才華なら、だいたい事情は把握してくれていると思うんだけど」

エリカは意外そうに才華の言葉に返事をする。

それに才華は悪戯好きな子供のような顔で笑って

「予想はついているんだが、俺はエリカの口から聞きたいんだ」

と言った。

「ふふ、そうね。私と才華の仲をイタリア全土の魔術結社に伝えるため、と言えば納得してくれるかしら？」

「半分は」

そんな才華の言葉に困った顔をするエリカ。

「いけずね。分かっている癖に女の口から言わせるなんて」

「さつきは俺が困らされたんだ。今度はエリカが困る番だろ？」

「・・・分かったわ。私が才華との仲を小説にした本当の理由は『赤銅黒十字』を他の魔術結社から守るためよ。守るために・・・あなたを利用したわ」

好きな男を利用した、さすがにエリカも自分の口から言えば多少の罪悪感が生まれるのか、居心地の悪そうな顔になる。

「やっぱり、そうか」

自分を利用されたというのに、気にせず、肉を口に運ぶ才華。別に才華も初めからエリカを虐めるつもりなんて毛頭ない。ただ、いじりたかっただけだ。

あの後、つまり、サルバトーレ・ドニとエリカの結婚事件を経て『赤銅黒十字』は窮地に立たされた。

何を隠そう『王』であるサルバトーレに粗相を働いたのだ。

『赤銅黒十字』を潰したい他の有力結社からすれば、またとない機会だ。本来、結社を抜けたエリカだが、パオロから頼まれ復帰したのである。

ただし、才華に赤銅黒十字が絶対に逆らわないことを条件として。未だに配下の結社がない才華はどうしても情報戦などでは不利になってしまう。才華の結社が完成するまでの代用品としてエリカは才華のため赤銅黒十字を利用することに決めたのだ。

それで簡単に才華の存在をイタリアの結社に知らしめる方法に思いついたのは小説であった。利益をほとんど考えず、安価で大量に印刷してイタリア全土にばらまいた、さらに後ろ立てに決闘以降才華のことが気にいったサルバトーレに依頼したのだ。

才華のためと言えば、サルバトーレは二つ返事でOKしてくれた。まあ、エリカとしては不本意だったのだが。

サルバトーレの後ろ立てのある小説をイタリアの結社の人間が読まない訳にはいかず、才華の存在は瞬く間に知られて行った。

そう、イタリアの結社は赤銅黒十字の後ろには才華、つまり『魔法の王』がいると認識したのだ。

それによって、彼らはもはや、赤銅黒十字を敵に回すことができなくなったのだ。

「さて、とエリカの困った顔も見れた所だし本題に入ろうか」

「・・・私としては才華に、少しだけ困ってもらったためのネタを使いたいんだけど？」

「それはまた今度だ」

「分かったわ。我が君の言葉なものね。ふふ、私もなんだかリリイ

に似てきたような気がするわ」

後半の言葉は才華には聞こえない程小さな言葉でエリカは言った。  
「で？　今回俺をイタリアまで呼んだのはあのまつろわぬ神と戦わせるためか？」

「ええ、そうよ。厳密には違うけれど」

「違うのか？」

「正確にはまつろわぬ神が欲しがっているで、あろう品を才華に預かってもらいたい」

「それを受け取ったら間違はなく、あの神様と戦わないといけないだろう？」

「だから、厳密には違うけれど大まかには合っているわ」

エリカは苦笑しながら料理を口に運ぶ。

「それにしても、ワインは飲まないのか？」

エリカと食事する時には常に料理にお酒がついてきていたため、エリカが水を飲んでるのに違和感を覚える才華だった。

「いくら私でも決闘の前に飲酒はしないわ」

「そうなのか」

才華はそう言って、自分の料理を口に運ぶ。

そして、

「じゃあ、俺はワインをもらおうかな？」

と、言ってウェイトレスを呼ぶ。才華に呼ばれて近寄って来たウェイトレスをエリカが

「彼が間違えて呼んでしまったの、ごめんなさいね」

と、ニコリと笑って返してしまった。

「エリカ、どういっつもりだよ」

「あら、才華は女の子が禁酒しているのに、自分だけで飲むというの？」

「うっ」

才華としてもそれを言われてしまったては飲むわけにはいかなかった。



才華はハーレムを作ろうと頑張っている訳だから女の子を邪険に扱えない。

「それに才華も決闘する訳だから飲んだらダメよ」

エリカが上目づかいで才華にそう言う。

少し、胸を腕で寄せて強調しての上目づかいで才華を見る。

すると、どうだろう？ エリカ・ブランデッリのスタイルはそのあたりにいるモデル顔負けのスタイルである。それも彼女が今、着ているのは胸の部分が扇状に開いた赤いドレスだった。彼女のその白く透き通るような白い肌の胸の部分が・・・。

そんな彼女に・・・そんな風に見つめられてしまったら。

「分かった。飲まないよ」

才華はそう言うしかない。

エリカのそんな仕草に才華はエリカの言葉を聞き落としてしまった。

彼女が言った『それに才華も決闘する訳だから飲んだらダメよ』という言葉を。

二人が食事している間にアリアンナが仕事をした回数は結局ゼロ回だった。

夜の静寂が支配するイタリアの市街地を二人の男女が歩いていた。

先ほどまで、高級レストランで食事をとっていた、才華とエリカだ。  
「おい、エリカ・・・俺は食べた後はできるだけ動かない主義なんだけど・・・」

「ダメよ。来て」

現在、才華はエリカに腕を組まれて胸を押しつけられている状態だ。

才華も男の子である。それも、人よりも少しエッチな。

女の子に腕を組まれて、なおかつ、胸を押しつけられていたら・・・

（どこでも・・・着いて行っちゃまうよな・・・俺は悪くない・・・俺は悪くない・・・欲望に忠実なだけだ。うん、そうだ。きっと同じ状況に他の男がなってもついて行くだろう。なあ、世間の男子連中、ちなみに、今は援助交際なんかはダメだから、健全な男子高校生は絶対にするなよ）

とか、考えながらエリカに言われるがまま歩くのだった。

市街地を歩き始めてから十分程経った頃だろうか。

エリカの目指している場所が見えて来た。

（・・・あ、思いだした。確か・・・ここで俺とエリカは決闘しないといけないんだったよな？ やばいな さすがに、こんな所で魔法なんか使ったら、昼間会った奴が来るかもしれないな・・・）

「なあ・・・エリカ」

「なにかしら？」

「これから俺の宿泊しているホテルに行かないか？」

「・・・才華、あなた・・・私がどこに行こうとしているか分かった途端に・・・そんな魅力的な誘いをしてくれるのね」

エリカの頬が心なしに紅い。

彼女のそれは赤銅黒十字の大騎士の顔ではなく、間違いなく恋する乙女のものであった。

「でも、今はダメ・・・しないといけないことがあるから」

「ベッドの上でなら、いくらでも構わないぞ」

「さ、才華」

「いや、だって」

「才華！」

エリカは少し下を向いて目を瞑って叫んだ。

「分かったよ……でも、何をするか知らないけど、さっさと終わらせるぞ」

「分かったわ、後、ベッドの件は快くお受けするわ」

「嘘、ばっかり、何かとつけて、一緒に寝ない癖に」

その才華の言葉を聞いた瞬間、まるで完熟トマトのように顔を真っ赤にするエリカ。

「だ、だ、だって……そういうのは……大切だし……私だって才華となら……ごによごによ……でも、やっぱり、そういのは結婚式の後にしたいし……ごによごによ」

それから、エリカは、自分の想像の世界にトリップしてしまつて、才華はエリカを引きずりながらエリカの目的地であろう建物の目の前に来ていた。

それは

「コロッセオか……俺、生で見るのは初めてだ」

才華のその眩きにやって平常心を取り戻したエリカは意外そうな顔で聞く。

「そうなの？」

「エリカは俺をどこへ、でも行っている暇人という認識を変えた方がいいぞ。俺は日本人だからあまり外国には行つたことがないんだ」  
「嘘ばかり、イギリスとか色々行つたことがある癖に」

その言葉を聞いて少し才華の心臓の音が早くなる。

（リズのことかばれた？……いや、公式な記録ではリズは……リゼロツテ・ヴェルクマイスターは死亡したことになっているはず……だから、大丈夫なはず……まあ、リズのことは、リズを交えてエリカに話すけど……今はまだ時期じゃない）

「何か私に隠しごとをしているみたいなの顔だけど……まあ、いい

わ。今は追求しないであげる。私のお願いを聞いてもらっている訳だから」

「それは助かる」

こういう時、エリカは才華に何かを無理に聞こうとしない。

いや、才華が自らの口で自分に教えてくれるのを待っているふしがある。

二人で静寂が包むコロッセオの中に歩いて入る。

エリカは才華の腕を掴む力を多少強める。

いくら、エリカが政治もできるとはいえ、彼女も未だに十六歳の少女だ。

自分の何倍も長く生きている人間と交渉する時は不安にならないはずがない。

しかし、普段の彼女は誰にもこの弱みを見せない。才華と出会う前の『赤銅黒十字』にいた間も、彼女の叔父であるパオロ・ブランデッリの前でも。

それは周りが望む完璧な自分を演じるためであり、自分の才覚を周りに認めさせるためである。まさしく騎士。

しかし、才華の隣にいる時ばかりは、安心して彼女はエリカ・ブランデッリという少女に戻ることができる。

才華のことを信頼しているから。

ちようど、コロッセオの中心部についた時だった。

「さて、ここそ隠れているんじゃない、出てきたらどうだ？ いるのは分かっているんだ」

才華の言葉に反応して、才華とエリカの前にスーツを着た一人の男性と、いかにも魔術師です、というような服装を纏った老人、二人が現れる。彼らこそ、エリカと昼間、会議を開いていた『老貴婦人』と『雌狼』と『百合の都』の代表者だ。

「お初にお目にかかります私は魔術結社『雌狼』の代表を務めます」

「挨拶はいい。俺はエリカとの蜜月を少しでも長い時間、楽しみた

いんだ。こちらの要件はすぐに終わらせたい」

淡々と、冷めた瞳で『老貴婦人』と『雌狼』と『百合の都』の代表を見る才華。

才華の視線を受けて、三人の中で一番若い『百合の都』の代表の『紫の騎士』は身震いしてしまう。二人の老人も表には出していないものの、確かに平常心ではなかった。そんな『紫の騎士』とは対象的に才華の言葉を聞いたエリカは、また少し、顔を赤くして俯いてしまう。

「分かりました。私は『雌狼』の代表としてあなた様をカンピオーネと認めます、他のお二方はどうか？」

少々、声を震わせながら、そう言う『雌狼』の代表。

「な！？ 我々は自身の目で『王』の力を確かめるということ得意していたはずですよ！」

それに異を唱えたのは『百合の都』の代表である『紫の騎士』だった。

もちろん、彼が『百合の都』の代表である『紫の騎士』ということとを才華は認識していないが。

「まだまだ若いのに、紫の騎士殿は。私は言葉を交わしただけで気づいたぞ。のう、老貴婦人の」

「うむ。かの『王』が使っておられるのは『千の言語』、魔術師の中でも一部の選ばれた者が何年も修行して身につける技法じゃ。いや、それよりも遥かに高度な魔術かもしれん。そんなモノを易々と使ってみせるのじゃぞ？ 我々が草薙の王のお力を測るなどおこがましい」

もちろん、『老貴婦人』の代表も、才華の力を確認しようと思っていた。しかし、思いのほか、才華が堂々していた点と『雌狼』が才華に取り入ろうとしている所を目の当たりにしたため、急遽、『百合の都』の代表である『紫の騎士』のみが才華の力を疑っているという構図を作りだしたのだ。

もちろん、そうなるように仕向けたのは才華だが、才華、本人も

ここまで、上手くいくとは思っていなかったため拍子ぬけだ。

「くっ」

『百合の都』の代表である『紫の騎士』も自分の結社である『百合の都』が才華に悪い印象を持たれるのは避けたいため、否定を撤回しようとした時だった。

「構わない。俺の力の一端を見せよう」

高圧的に才華は呟いた。

「よろしいのですかな？」

「ただし、俺の相手はエリカ以外の三人の内の誰かにしてもらおう。もちろん、『権能』の力は『剣の王』をボロボロにする程の力を有しているので命の保証はできないが」

それを聞いた瞬間に顔を青くしたのは『百合の都』の代表である『紫の騎士』だ。

確かに会議では誰が才華の相手をするか決めていなかった。しかし、エリカ・ブランデッリが彼の相手を務めるとばかり思っていたのだ。

だが、現に今、才華はエリカ以外の人間を指名して来た。『王』の命令は絶対だ。逆らうことなどできない。

「それとも、あなた達はエリカに俺の相手をさせようと思っていたのか？ 愛し合う二人を争わせようなどと・・・もし、そうなら、俺はあなた達と敵対しなければいけないかもしれない。エリカを取り戻すために『剣の王』に決闘を挑んだのも、あなた達は知っているだろう？」

その言葉で決まった。

『老貴婦人』、『雌狼』、『百合の都』は別にこの場に才華の敵になるために集まった訳ではない、むしろ助力を得るためだ。

「いえ、私の未熟さゆえに、あなた様程の方がカンピオーネであることに気づけませんでした。非才な私の発言をお許しください」

「構わないさ。俺もエリカの故郷の人間を虐殺する趣味はない。それで？ 俺に『まつろわぬ神』が狙っていると思われる品を預ける、

それでいいんだな？」

その才華の言葉に三人の代表は頷く。

「じゃあ、俺は帰らせてもらう。では、また機会があれば会おう」  
才華はそう言い残して、コロッセオを後にする。もちろん、エリカと腕を組んだまま。

その場に残された『老貴婦人』、『雌狼』、『百合の都』は新たな『王』に対する評価を改める必要があった。

彼は江南の羅濠教主、コーンウォールの黒王子、いや、あのバルカンで自分勝手に魔王をしている侯爵以上に『王』と言う立場を良く理解している、ということ。

### Episode 3 絶対的な交渉（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました。

前話のあとがきの予定を変更した理由については活動報告に書かせていただいたので省かせていただきます。

ただ一つ言えるのが『萌えは不可能を可能にする』

そして、今回も、戦闘なし。ある意味、オリ主、無双タイム。

こんな話でいいんだろうか？ という疑問はおいておいて、というより考えないようにします（汗

前回に引き続き、感想をくださったコタロウさん、Tさん、いも犬さん、本当にありがとうございます。

次回更新は3月11日頃になります。今回はあの姫巫女が次回、再登場予定です。



## Episode 04 姫と巫女

「もう、私がワインを我慢する必要がなかったじゃない」

先ほどまでいたコロッセオから再び、市街地に戻った才華とエリカはまた、二人でゆつくりと市街地を歩いていった。

「俺も我慢したんだから、いいだろ？」

「そういうことを言っているんじゃないの！」

エリカは才華の腕を捕まえている腕に力を込める、魔術で強化していない本来の彼女の力で。エリカは普通の女の子と比べれば、いや、比べ物にならない程の運動能力を有しているので、それなりに痛いはずなのだが、才華は、それを気にしたそぶりもなく、普通に歩く。

「もう、少しは痛いとか、文句を言いなさいよ、才華」

「言って欲しいのか？ 俺に文句を」

「そういう訳じゃないけど・・・」

「そんなにエリカが言って欲しいなら一言」

「え？」

少しエリカは後ずさりしてしまう。自分のすることを弄ることはあっても、滅多に否定しない才華が何か自分に言ってくるのだ。

どうしても緊張してしまう。

エリカでも自分が好意を寄せている人物から、何かキツイことを言われれば、枕を涙で濡らすことになるかもしれない。

息をのむエリカを余所に、才華は軽い口調で

「エリカの胸の感触が楽しめてラッキーだよ」

そう言った。

「もう！」

先ほどまで感じていた緊張は何だったのか？ と馬鹿らしくなったエリカは才華の頬をつねって一度、才華の腕を放す。

それに才華は『ああ』と少し情けない声を出してしまう。

それにエリカは少し罪悪感で胸を痛めてしまう。

（つて、何で私が胸を痛めないといけないの？ 才華がデリカシーのないことを言うから悪いんじゃない）

しかし、捨てられた子犬のように瞳をうるうるさせたとさえた才華を見ると、どうしても自分が才華に悪いことをしてしまったように感じてしまう。

（もう、これじゃあ、リリイのことをからかえないわ。私が恋する初<sup>うぶ</sup>な乙女じゃない。このエリカ・ブランデッリともあるう女が……しつかりしなさい。私は、私は……）

何か決意しようとしたエリカだったが、結局は才華の泣きそうな顔を見てしまい、再び腕を組むのだった。

（今日は……仕方ないわ……そうよ、そう。才華は交渉を頑張ったのだから、これはそれに対する報酬よ。働かせて何も報酬を与えないなんて、そんなことをすれば、エリカ・ブランデッリの名折れよ。そう、そうよ。決して才華を甘やかしているんじゃないわ）

「どうしたんだ？ エリカ」

再び、エリカに腕を組んでもらって上機嫌な才華は嬉しそうにエリカに聞く。

そこには、先ほど、イタリアを代表する二人の魔術師と一人の騎士を手玉にとった『王』は存在しなかった。

そこにはいたのは、エリカ・ブランデッリが愛する一人の少年がいた。

「もう、何でもないわ」

「そっか」

エリカの言葉に才華は嬉しそうに返事をする。

才華の笑みを見ていると自然と自分も微笑んでしまっていることに気づいたエリカは急いで頬を引き締める。しかし、ほんの数秒後

には、また頬が緩んでしまう。

「それで・・・なんで、才華が交渉したの？ イタリアでの交渉は私に任せてくれているんじゃないの？」

「え？ 何の話？」

満面の笑みでそう帰して来る才華にエリカは一瞬、思考をやめてしまうが、すぐに我に帰る。

「さっきのコロッセオのことよ。本当なら今頃、私は才華と決闘している時間よ」

「いや、なに、そんなに大それた理由はないよ」

「でも、聞かせて」

「簡単だよ。エリカと戦うのは、契約した時から、ベッドの上だけって決めていたから」

「っ!？」

その言葉を聞いて顔を真っ赤にして俯いてしまう。

今日、何度目のことが分からない。

（おかしいわ。こんなのエリカ・ブランデッリじゃないわ。男を手玉にとめることはあっても、男に良いようにあしらわれるなんて・・・それに普段の私なら・・・こんなこと言われたら・・・すぐに反論するか、愛剣を使って才華を脅すか・・・なんでこんなに胸があつたかいの？ いつも、そうだ才華の前だと本来の私が出せない・・・これじゃあ、本当に・・・）

「ん？ どうしたんだ？ エリカ」

「何でもないわ」

「そっか」

そして二人は、才華の宿泊するホテルに向かうためゆっくりと、歩いて行く。

時間など気にせずに。

才華の宿泊するホテルの才華の部屋の前まで。

才華に自分の部屋に寄って行くか？ と聞かれたエリカは顔を真っ赤にして、どこかに走り去るのだった。

「才華さん！　ぜひ、ぜひ、またイタリアに来てくださいね！　私待ってますから！」

知らない人が聞けば、愛の囁きに聞こえるであろう、この言葉を聞いても俺は一切ときめかなかった。

サインをした後からアリアンナさんが俺を見る目は恋する乙女とかじゃなく、俺を観察してキャツキヤと騒ぐ、女子高生みただか  
らな。いや、本来なら、まだ女子高生なのかな？　俺より年上ということは知っているけど、何歳かまでは知らないからな。

「ええ、また、ぜひ来たいです。今度はもっとゆっくりできる時に来ます」

「きゃああ。エリカ様！　お聞きになりましたか！？　才華さんが今度の休みに来てくれるそうですよ！」

やばい、このハーレムを王を目指しているはずの俺が・・・若干、アリアンナさんの相手をするのがウザクなってきた。エリカは空港に着いてから、何も言わなくなったからな。

「も、もう少し、ゆっくりしていけばいいのに、私達に必要なのは・・・いえ、足りないのは、ふたりきりで過ごす甘い時間なのよ」  
『は？』

俺とアリアンナさんは同時に首を傾げてしまう。

いや、俺はともかくアリアンナさん、あんた一応、エリカが雇い主なんだから、そんな態度とったらダメでしょ。

「私が何か、変なことを言ったかしら？」

余裕ぶっているのは分かるが、言葉の最後が若干、震えている。

そんなに、俺と一緒にいたいって言うのに緊張したのか？

いや、あのエリカに限って・・・俺の知っている原作では・・・ダメだ。今、俺の目の前にいるエリカは生きているんだ。

人は変わる。それにエリカが相手にしているのは護堂じゃなくて俺なんだ。

原作と違うのは当然だ。

それに、もし、原作のエリカと今、俺の目の前にいるエリカ、どちらが良いか？ と聞かれれば俺は間違いなく、今、目の前にいるエリカを選ぶ。

俺が惚れたエリカは、今、目の前にいるエリカなのだから。

「いや、何も変なことは言っていないよ、ね、アリアンナさん」

「そ、そうですね。エ、エリカ様は普通です」

「・・・まるで、私が変なことを言ったから二人でフォローしているように見えるわ」

「何のことかな？」

さすがに、アリアンナさんの下手な演技じゃ、隠しきれないか。

まあ、話を聞いていなかったのはスルーするとして、エリカが俺を誘ってくれるなんてな。

呼ばれることはあっても、もっと一緒にいたいと言われたことは初めてだ。

「まあ、いいわ」

「そっか。それで、さっきエリカが言ってくれたことだけど」

俺はエリカの傍まで、トンと床を蹴って移動すると、エリカを抱きしめる。

「にゃあ！？ にゃ、にゃ、にゃにを」

何か、エリカが猫かしたぞ。

てか、メツチャ可愛いぞ。

癖になりそうだ。もちろん、抱きしめることだぞ。

「もう少し、イタリアにいようかな？ もっとこうしていたいし」

「きゃああああああああああ」

横で鼻息を荒くして奇怪な叫びを上げつつ、ビデオカメラ（日本製の最新型）を構えているアリアンさんがいるが、それはスルーだ。

「どうしようかな？」

エリカの耳元に息をかけながら、そう語りかける。

それはともかく、その・・・なんだ。昨日、散々、堪能したつもりだったけど、エリカの胸の柔らかな感触は・・・うん、何度、味わっても最高だな。

「エリカ？ 何か言ってくれよ？」

そう、囁いた所で気づいた。

「おい、エリカ、しっかりしろ！」

エリカは、幸せそうに口をだらしく開けたまま、目を虚ろにして・・・立ったまま気絶していた。

・・・これは俺がいけなかったんだろうか？

まあ、帰る便を遅らせなければいけないのは確実だろう。

それと、おい、そこでビデオ撮影しながら、携帯をいじっているメイド。主が気絶してんだぞ？ 介抱を手伝えよ。

今度、マジでエリカの雇用事情に文句を言おうかと本気で考え始める俺だった。

ちなみに、アリアンさんはあまりに行動が奇怪だったため、空港の警備員さんに連行されたことを言っておこう。

今更だけど、空港では静かにしろよ。

この頃、テロ対策とかで警備が厳しくなっているんだからな。

「はあ」

私は今日、何度目になるか分からないため息をついていた。

今、私は私が任されている神社である七雄神社ななおの拝殿から少し離れた場所に平屋造りの社務所の中にある控室で身支度を整えています。私が任されていると言っても、配属されている姫巫女というだけであって、神職事態を任されている訳ではありません。

身支度を整えると言っても、いつもと同じように白衣びやくやと緋袴ひばかまを着て髪を櫛くしでといているだけです。

私が今日、何度目になるか分からないため息をついたのには理由があります。

それは、この部屋のテーブルの上に無造作におかれた、綺麗な本にあります。

これは世間で言う所のお見合い用の本です。ここに書かれている人物の中の一人と私はお見合いをします。日本の姫巫女として覚悟はしていましたが、まさか、このような時期から話が来るとは思ってもいませんでした。

姫巫女は血を薄めないために、世史編纂委員会により結婚相手を斡旋されます。もちろん、斡旋された方以外の方とも結婚できますが、それはほんの一握りの方だけです。なぜなら、その方が委員会に斡旋される方と同等の呪力を有していないといけないのですから。「初めから分かっていたことです・・・」

私は諦めたようにそう、言葉を紡ぐ。

幼い時に出会った不思議な少年。名前は草薙才華。誘拐されそうになっている私を助けてくれた恩人・・・そして、私の初恋の相手・・・東京に戻ってきて、何度、彼を探したことが分からない。でも、結局、見つからなかった。

そして、つい先日、彼と再開を果たした。

再開・・・再開とは呼べない。

一方的に私が見つけたのだから。彼を再び見つけたのは入学式の時だった。

新人生代表で挨拶をしている時の彼は幼さがなくなっていて、とてもカッコ良かった。挨拶の内容は私のような者には分からない程度で難解なものでした。『ハーレム』？ と呼ばれる単語を何度也使っていました。が、おそらく、立派な職業なのでしょう。

私は藁にもすがるような気持ちで彼を霊視しました。もし、彼に呪術の才能があるのなら・・・と。

しかし、結果は、彼には呪術の才能は一切ありませんでした。

もちろん、彼が悪い訳ではありません。私が勝手に彼に期待して勝手に落ちているだけです。

彼には、もう一度、会いたい。ですが・・・もし、彼以外の人と結ばれると分かっているにも会いたいか？ と聞かれれば・・・何とも言えません。だから、未だに隣のクラスなのに、会いに行かないのでしよう、私は。

あ、そろそろ、境内を掃除する時間です・・・こんな気持ちで掃除しては周りの方々に失礼ですね。

私は自分を振るい立たせます。

これは決まっていたこと。

初めから。

だから、あきらめなさい万里谷祐理。

そう言い聞かせながら立った時だった。

私がいつも使っている櫛くしが折れてしまいました。

「・・・不吉だね。何かよくないことでも起きなければいいけど」



そう呟いた後に気づいた。

既に不吉なことは起こっていると。

もはや、私には選択の余地はないと櫛もいつているのだろう。

境内を掃除するために外に出て行く最中に会った、この七雄神社の神職の方々が丁寧に私に頭を下げてくれる。この事が私に私の立場を良く分かせてくれます。

掃除を始めて少し経った頃に不意に

「やあ姫巫女、お初にお目にかかります。少しお話をさせていただきますか？」

と声をかけられました。

声の主はゆつくりと私に近づいて来ます。革靴で境内を歩いてくるのに、踏みつける玉砂利はかすかな音もたてないなんて……この人は……。

「はじめまして。あなたは？」

「や、これは失敬。申し遅れましたが私、甘粕と申します。麗しき姫巫女にお会いできて、光栄の至りですよ。以後お見知りおきを」

そう言いながら、甘粕さんは私に名刺をくださる。私はそれを急いで受け取ります。

その名刺を見て私の胸は締め付けられる思いだった。

「まだ、お見合いのお返事をする期日までには時間があると記憶しています……」

彼が私にくれた名刺には確かに世史編纂委員会、日本の呪術協会を取り仕切る組織の名前が書かれていた。

「いえ、その件は存じておりません。無関係です」

「では……何故？」

「いえね、我が国に未曾有の災厄となるかもしれない火種がありまして、少々手を焼いているのです。そこで、姫巫女のお力をお貸しいただきたく思い、ぶしつけにもお邪魔いたしました。お許し下さい」

甘粕さんがそうおっしゃった時に私は自分がホツとしてしまった

ことに驚きました。

「・・・覚悟ができていないということでしょうか。」

「私ごときでお手伝いできることなど、大してないと思いますが」  
「また、ご謙遜を。武蔵野の姫巫女は幾人もいらっしやいますが、あなたほど霊視の呪力に長けた方は稀だ。それ以外にも二つ理由がありますけどね。あなたには武蔵野の姫巫女として、我ら正史編纂委員会に協力する義務がある。おわかりですね？ この際、疑問は横に置いて、話を聞いていただきましょう」

「・・・もちろんです。では、私に何をしろと？」

「実はですね。とある少年と会ってその正体を見極めていただきました。少年には真正正銘のカンピオーネではないかと疑惑がかけられていますね」

「・・・カンピオーネ？」

私はその単語を聞いて、思いたす・・・あの恐ろしい・・・光景を・・・あの恐ろしい殿方と共に・・・。

「あなたを選んだ理由の一つが、もうおわかりですね？ あなたは昔、カンピオーネと接触されていますね。そんなあなたが、霊視を使えば鑑定もたやすいはずです」

「・・・分かりました・・・しかし、カンピオーネとは、日本と言う荒ぶる鬼神の顕現、忌むべき羅刹王の化身です。ただの人間が『王』となるためには、神を殺める必要があるのですよ？ そんな奇跡を起こせる人物が日本にいるなんて・・・」

「同感です。だから私たちも、少年が本物だと信じてこなかった。いや、信じたくなかった。しかし、さまざまな状況証拠が積み重なりまして、そうも言ってられなくなってきたのです」

甘粕さんが大げさに方をすくめます。

「グリニツジ賢人議会によれば、彼は何らかの神を殺め、最強に近い力を手に入れているということは確認できているが・・・その・・・どんな神を殺め<sup>あや</sup>・・・どのような能力なのかはまったく分かりません」

「え？ あのグリニッジ賢人議会が調べられないのですか？」

グリニッジ賢人議会と言えば、カンピオーネの能力を調べることに関しては右に出る組織はないと教えられていたのですが・・・それほど、その新たにカンピオーネとなられた少年は賢いのでしょうか？

「ええ・・・そのようです。そのことをあつて世界中の魔術結社は彼の権能を他の結社よりも早く知るために色々と動きだしています」  
それで日本も遅れる訳にはいかないですね。もし、私が少年が殺めた神を霊視で知ることができれば、他国の魔術結社に差をつけますし。

「今、現在、彼の能力について知っておられるのは、少年と決闘をしたことのある『サルバトーレ・ドニ』と彼の愛人である『エリカ・ブランドッリ』だけとされています。そして、さらに状況が悪いことに彼は愛人である『エリカ・ブランドッリ』と先日、会った際に・・・曰くありげな神具を渡されたようで・・・」

私の中で私の勘がこれを無視してはいけない、とてつもない災厄を呼び込む物だと、と私に告げます。

それに私はこのまま、何もしないでいても、彼と結ばれることはないのです。

それなら、私、一人の命で何万人もの人を救えるのなら安いものです。

「その件くだんの少年について詳しくお教え下さい。私たち同様、何らかの呪術を修めた方なのですか？ それとも武芸の心得がおりとか？」

「呪術や魔術に関しては、素人のはずです。武術に関しては剣道をやっておられたようです。一時期、神童とまで呼ばれていたようですが、肩を壊して以来、やめられています。本来なら、神と戦うどころか関わることさえない家の出なんですがね」

そのような方が・・・。

甘粕さんは何やら、書類の束を取り出されました。

おそらく、その少年のことが書かれた書類なのでしょう。

「これをお渡しします」

「はい」

その書類を見る前に私は少々、先ほど、気になった単語がありましたので、甘粕さんに尋ねることにします。

「甘粕さん」

「何でしょうか？」

「先程、あなたは愛人と思われる女性がいる、と仰りましたが、どういう意味ですか？」

「ああ、その件ですか。おそらく重要性にいち早く気づいた『赤銅黒十字』が彼女をあてがったのですな。結社の切り札である天才児を使つてでも、彼との絆を深める。妥当な策と言えるでしょう。まあ、目下、調査中ですが」

「そ、そんな理由で愛人に！？ ふ、不潔です！ 不道德です！ そんなのまちがってます！ 魔王の力をいいことに、女性を自由にするなんて！ なんて最低な殿方ですか！ 許せません！」

「あ、あの万里谷さん？ その話は後で、それよりも・・・少年の話を」

「そうですね。そう言えば、私に事を委ねる理由が二つあるとおっしゃいましたよね。もうひとつを教えていただけませんか」

「ああ、もちろん。こちらは完全に偶然だったのですがね」

## Episode 4 姫と巫女（後書き）

翼「ふう、なんとか、書けた・・・」

エリカ「・・・今回のあれは何かしら？」

翼「え？」

エ「だから！ あれじゃあ！ まるで、私がリリイみたいじゃない！」

翼「いや、だって・・・もう・・・あれがこの話の中のエリカさんの素じゃないですか？」

エ「っ！？ 問答無用よ！！」

リズ「作者が重症のため、私が引き継がせていただきます。感想をくださった White Sealさん、Tさん、いも犬さん、本当にありがとうございます。次回の更新は3月の17日を予定しているそうです。」

これで失礼します」

## Episode 05 魔女と巫女の決意

「才華様、何を持ちかえられたのですか？」

「え？」

先ほど、俺は日本に帰国した。はつきり言って疲れている。

だが、リズが家に入るなり飛んで来て、俺にそう聞いてきたんだ。一応、エリカから渡された物には認識阻害魔法をかけてあるんだが・・・やっぱり、高位の存在には、ばれちまうのかな？

まあ、この世界の魔術とは根本的な部分で違うから過信しすぎたかな？ これからは気をつけよう。

「それも・・・かなりの呪力を溜めこんでいるような危ない品物を・・・いったい誰に渡されたのかは知りませんが・・・才華様も自重なさってください。この家には私だけではなく静香ちゃんと一郎おじい様もいらつしやるのですよ？」

「・・・ごめんなさい」

「それに・・・言いたくはありませんが・・・才華様・・・才華様から他の女の匂いがします。この匂いは・・・明日香ちゃんのものではありませんね？」

リズが物凄く、良い笑顔で俺を見つめてくれる・・・やばい、何か顔は笑っているけど目は笑っていないって、どんな顔だよ！と前にエロゲエをやつてツツコミをいれたことがある俺だけど、まさか現実でおがむことになるなんて・・・。

「才華様は私では満足できないのですね？」

え？ リズは涙目でそう言うその後ろをむいてしまった。

やばい、罪悪感がやばい。

後ろから、もげるコールが聞こえてくる程やばい。

「え、えっと・・・その、な・・・リス」

「グスッ・・・なんですか？ 才華様」

後ろを向いたままのリス・・・やばい。俺のガラスのハートが・・・。

「一応、俺の夢はハーレムを作ることであって・・・」

「・・・分かっています・・・私は才華様にとって、都合の良い女で構いません・・・キスの一つもしてもらえない・・・そんな女で構いません・・・グスッ」

「っ!？」

いや、待て・・・俺、俺の目の前にいる女の子は誰だ？ リスはこんなことを以前から言ったことはない・・・いや、今まで溜めこんでいて・・・俺からエリカの匂いがしたから爆発したという可能性も・・・。

くっそ。ここで、じいちゃんなら洒落た言葉でリスを慰められるんだろうけど・・・生憎、俺にそのような技術はない・・・俺にできることと言えば。

俺はそつとリスを背後から抱きしめた。

「グスッ・・・他の女の匂いがします・・・」

やばい、不謹慎だけど、メツチャ可愛い。お持ち帰りしたい。

もう、半分、お持ち帰り状態だけ。

「でも、抱きしめるだけで・・・キスは本命の女の子だけにするんですよ・・・才華様は・・・大丈夫です・・・才華様、私は才華様に家族と言っていたただけで十分です」

「いや、リス！ 俺は!」

「大丈夫です」

「何が大丈夫なんだ!」

俺はリスをこちらに無理矢理、向ける。

「俺は確かに・・・ハーレム作るとか言っている軽い男だけど・・・

俺は・・・俺は・・・本当にリズのことを愛しているよ」

「っ！？ ほ、本当ですか？」

俺の腕の中で下を向いたまま、瞳に涙を溜めた状態でその透き通るように綺麗な翠色の瞳をこちらに向けてくる。

「ああ。俺が神に誓うのも変だけど、神に誓うよ。俺はリーゼロツテを愛している」

「嬉しいです。才華様」

そのまま、俺は・・・リズの唇に俺の唇をそつと重ねるのだった。しかし・・・どうしてこうなった？

俺としては嬉しいけど。

「リズお姉ちゃんは甘いよ！」

「何がですか？ 静香ちゃん」

才華が帰宅する、ほんの三時間程前。リーゼロツトは静香の部屋に呼び出されていた。

「お兄ちゃんは、おじいちゃんの唯一の直系の男の子の孫で、なおかつ、若い時からおじいちゃん思想に共鳴して今の超がつく程、堂々と浮気するような男に育っているんだよ？ このまま自由にさせてたら、一昨日、電話がかかってきたエリカさん以外にも絶対に手を出すよ！-」



「しかし・・・私が才華様の邪魔をするなど・・・」

「じゃあ、リズお姉ちゃんはお兄ちゃんが他の女にとられてもいいの？」

「それは・・・」

口ごもってしまうリーゼロッテ。

「あたしは本当にリズお姉ちゃんが好きだよ。本当のお姉ちゃんになつて欲しいとも思つてる。今だから言うけど、お兄ちゃんにはリズさん以外の女の子と結婚なんかさせない！ させるもんですか！

もし、あたしがお兄ちゃんを縛りつければ、お兄ちゃんの方から他の女の子の所に行くのはやめさせれるよ！ でも・・・でも、自分から、お兄ちゃんによつて来る女の子は、あたしじゃ払えないよ」  
そこで一拍おく静香。

「だから、もし、リズお姉ちゃんが本当にお兄ちゃんを好きなら、お兄ちゃんをきちんと落として、それで他の女を寄せ付けられないようにして欲しいの！」

「でも・・・」

「それとも、リズお姉ちゃんはお兄ちゃんの事、嫌いななの？」

静香は不安そうにリズを見つめる。

（私は・・・才華様の・・・初めは家族つて言ってもらえて本当に嬉しかった・・・あの日から誰も受け入れてくれなかった私を・・・家族と・・・でも・・・私は本当にそれで良いいの？ 私は）

「・・・リズお姉ちゃん？」

「私は・・・私は・・・才華様が好きです。いえ、愛しています・・・だから、他の女に才華様の一番を取られたくありません・・・才華様がもし、一人では満足できないのなら、妾めかけは作っても構いませんが・・・私が才華様の一番になりたいです！」

「お姉ちゃん！」

リズの胸に抱きつく静香。

「あたし、お姉ちゃんを応援するね。絶対、他の雌狐めぎつねに絶対に負けないでね！」

「はい、私、絶対静香ちゃんの本当のお姉ちゃんになりますから！」  
「それじゃあ、昔、おじいちゃんに教えてもらった、『浮気してき  
た夫を追い詰める』授業の中でも『禁忌』指定されている最狂の技<sup>わざ</sup>  
を伝授するね」

「はい、お願いします！」

「まずはね、他の女の匂いがするって

」

「ふふ、作戦成功ね。お姉ちゃん」

才華がちょうど帰って来た時、静香は少し離れた所から二人を見  
守っていた。もちろん、扉の影に隠れて才華には見つからないよう  
にして。

「それにしても・・・まさか、ここまでプラン通りになるなんて・・・  
・お姉ちゃんにお兄ちゃんがベタ惚れなのもあるんだろうけど・・・

」

「ん？　どうかしたのかい？　静香？」

（あたしの横で涼しい顔をして夕食の準備をしているおじいちゃん  
のプランが凄すぎるんだよね・・・昔は何とも思わなかったけど・・・  
・ここまで上手くいく方法を熟知しているおじいちゃんを追い詰め  
るなんて・・・本当におばあちゃんは凄いな・・・もしかしたら、  
わざとおじいちゃんが追い詰められていたかもしれないけど）

「何でもないよ。おじいちゃんと私達じゃ、役者が違うなって再認  
識しただけ」

「それはそうだよ。静香達とは生きている年月が違うからね」

そう言って一郎は静香にウィンクする。

（はあ、普通はおじいちゃんの年齢の人がウィンクなんかしたら、  
気持ち悪いんだろうけど・・・おじいちゃんがすると絵になっちゃ

うんだよね・・・本当に、もう)

「そうだ。もう少ししたら才華とリスさんと呼んで来てくれるかい？ 夕食の準備は手伝わなくていいから」

「・・・分かった。ありがとう。おじいちゃん」

それから一郎は鼻歌を歌いながら夕食の準備をするのだった。

草薙家の夕食は、今までにない位、幸せのオーラに包まれていた。

「才華様・・・あの・・・その・・・あ　　ん」

リスはその容姿とは似合わないが箸を上手に使い箸で肉じゃがのジャガイモを掴み、それに手を添えて才華の口にジャガイモを運ぶ。

「あ、えっと、その、ありがとう」

それに才華は顔を真っ赤にさせつつも満更でもないような顔で口を開ける。

「あ　　ん」

「私が味付けしたんですよ？　どうですか？」

「美味しいよ」

「嬉しいです」

リーゼロッテを奮い立たせた静香も、まさか、ここまで凄い事態になるとは思ってはおらず、さすがに・・・少し青い顔をしている。ここまで自分の前で実の兄が女の子とイチャついているのをみせ

つけられると、さすがに思春期の女の子からすれば、精神衛生上よろしくない。しかし、先ほど、リーゼロッテのことを応援と言った手前、何も言えない静香だった。

そして、この家の家主とも言える一郎はというと、ニコニコ顔で二人を見守っている。

こういう所も役者が違うとしか思えない静香だった。

そんな夕食が終わりに近づいた時、ベルが鳴り響く。もちろん、うんざりしていた静香にとってはこれに飛びつかない手はない。

「あたしが出る！」

今日、一番に元気な声を出して立ち上がる静香。

そして電話の受話器を取り、『もしもし』と言った後に少々、静香は焦った様子だった。

「ま、万里谷先輩ですか？ 一体どうなさったんですか、あたしの家にお電話をくださるなんて・・・」

才華はその名前が出た時点で少し焦ったが、再び、リズが『あん』をしてくれたので思考をやめて、リズとイチャつくのに専念する。

「は、はい。たしかにいますけど・・・どうして先輩がうちの兄に？ たしか、クラス違いましたよね？ あ、いえ、そんな。気になさらないで下さい！ わ、わかりました。たしかに伝えておきます。は、はい。ご、ごきげんよう」

なぜか、静香が変な挨拶『ごきげんよう』と言っているのを才華はスルーしつつ、リズとイチャつき続けていると、静香が血相を変えて才華の元に戻って来る。

「お兄ちゃん、そこに座りなさい！」

「はい？ もう座っているけど」

「正座しなさいって言っているの！」

静香の言葉に何か危機迫るものを感じた才華は素直に従うことにする。若干、自分の方を向いていた才華が静香の方を向いたことでリーゼロッテは頬を膨らませる。

しかし、この場でそれに気づいていたのは一郎だけだった。

「正直に答えなさい！　どこで、万里谷先輩と知り合ったの！？」

「え？　万里谷？　もしかして祐理のことか？」

「祐理！？　もう、名前で呼ぶような間柄なの！？　今までお姉ちゃんといちゃついてた癖に！　万里谷先輩とはどういう関係！？」

「う　ん、一回、遊んだ関係？」

「あ、あ、遊んだ！？　見損なつたよ！」

「いや、あの時は祐理の親御さんにもお礼を言われたよ」

「はあ！？　親、公認で遊んだの！？　最低！　鬼畜！　女泣かせ  
！」

「才華様・・・その女は・・・」

少し俯いて、表情が読みとれないリズに対して才華は特に何も考えずに

「ああ、リズと出会う前に外国で俺が迷子になった時に祐理も迷子でさ、二人で遊びながら俺はじいちゃんと静香を祐理は両親を探したんだよ」

ありのままのことを放した。

「え？　そうなの？　お兄ちゃん？」

「ああ、あの時だ。ほら、海外旅行で静香が俺を探して泣いてた時「っ！？」　分かったから、その話はしないで！」

顔を真っ赤にして才華の言葉を消し去るようにして声をだす静香。  
「そうか。それで祐理はなんて？」

「お兄ちゃんが最近、東京に持ち帰ってきた物を見せて欲しいって何のこと？」

「そうか。分かった。リズ、明日、祐理に会ってくるよ。一応、リズは・・・」

才華はリズに目配せする。

「分かっています。私は先に家に帰って来ています」  
「ありがとう」

あまりの聞きわけの良いリズに静香は唖然としてしまい。

その一言でこの話は終わったのだった。

「師匠！ 今日、発売のゲーム、『お兄ちゃん！ のことなんて、全然、好きだからね』の入手に成功しました！」

放課後の教室でそんな馬鹿なことを叫んでいるのは、何でも二次元に大量の妹がいるらしい反町だ。

まあ、俺もいるから人のことは言えないがな！ しかし、馬鹿が・  
・俺達を見る女子の目が死んだ魚を見るみたいだな目だぞ・・反町、もう少し、恥じらいをもって欲しいものだ。

「なに！？ それは本当か、名波！？」

俺に名波が話しかけて来たにも関わらず、俺よりも先に返事をしたのは、名波という馬鹿だ。何でも、巫女さんが好きらしい。

この二人に、後、一人身長百八十五センチを超える大柄な男、高木を加えた三人が、このクラスのいわゆる『三バカ』だった。

もちろん、こんな奴らと関わっていたら間違いないく、女子の好感度が下がるため、話したくないんだが、入学して間もない頃にリズとイチヤイチヤしてたら、

泣きながら

『草薙さんは、俺達のクラスの共同財産だ！ おまえだけが独占していいはずがないだろ！ 俺達、恋愛共産主義者の敵め！』と絡ん

できたから、俺のリズに対する思いをほんの、三時間程語り、さらに、俺の『ハーレム道』を徹夜で語ってやったら、なぜか俺のことを師匠と呼ぶようになり、それから、何かと俺と話したがる。

「師匠！ ぜび、今日、徹夜でプレイしましょう！」

「そうですよ、師匠！」

さっきまで帰る準備をしていた高木まで来やがった。

「ええい！ 俺はおまえ達の師匠じゃねえ！ おまえ達といると女の子の好感度が下がるから寄って来るな！ もちろん、『お兄ちゃん！ のことなんて、全然、好きだからね』は借りるがな！」

「くっそ！ リアルに可愛い彼女と可愛すぎる妹がいる師匠が、これをプレイするって言うことに痺れる！ 師匠から奪いたい！」

「し、師匠！ 俺と巫女さんの話を語りましょう！」

「反町！ 俺のリズと静香に手を出してみる！ 社会的に抹殺してやる！ 名波！ それはまた今度だ。今日、俺には用事がある！」

こいつらは・・・本当に頭がいかれてやがる。

絶対にリズと静香には近づけないぞ。

てか、名波に今から巫女さんに会いに行きます！ なんて言っ

たら絶対に着いてくるだろうな。絶対に言うものか！

「師匠の用事とは！？」

本当にテンションが高いなコイツ等は。

「そんなものもちろん！ 女の子に会うに決まっているだろう！」

「な！？」

俺の言葉に三馬鹿以外の奴らも声をあげる。

おい、なぜに！？

「草薙君が誰かと会ったって・・・リーゼロッテさん以外の女の子には話してもらえないのに・・・」

「こら、由美、そんなこと言ったら可哀そうだよ」

「そういう真由だつて付き合うなら絶対に草薙君は嫌だつて前に言っただじゃない」

おい、こら、おまえら聞こえてるぞ！

俺だって人間なんだぞ！ そんなこと言われたら傷つくじゃないか！

いや、マジで。

「師匠、今からゲームするってことですよ！ それならお供します！」

「おい、こら、高木！ 俺は現実の女の子に会った！ 変なことを言うな！」

「そんな謙遜しなくても俺達は師匠のことは分かっていますよ！」

「だ・か・らマジで時間がないんだ！ おまえ達との、この無駄な会話を続ける時間もない程だ！ だから、俺は行く！ ただし、明日、『お兄ちゃん！ のことなんて、全然、好きだからね』の感想は聞かせろよ！」

『はい』

そこ敬礼するな。

周りの女子が若干、顔を引きつらせているだろが！

俺はとりあえず、祐里に来て欲しいと言われている場所である七雄神社を目指すべく携帯を取り出す。そして、七雄神社への行き方を調べる。

さて、行くとするか。



「ふう」

私はホームルームが終わるとすぐに、教室を後にして七雄神社に向かいました。

本当は廊下掃除を任されていたのですが、今日だけはクラスの人に無理を言って休ませていただきました。お勤めをおろそかにするなど、本来はあってはいけないことなのですが・・・今日ばかりは・・・。

私は鏡に写った自分を一度、確認します。

髪はきちんとけていますし、顔にも何もついていません。

でも、前髪が、どうしても気になってしまいます。

こんなことは・・・初めての経験です。

クルクル巻いてみたり、引っ張ってみたり。

私はどうしてしまったのでしょうか。いつもと同じように来た巫女の服もきちんとして着ているか不安でたまりません。

どこか変な所はないでしょうか？

しかし、今、この七雄神社には私以外の人がいないため、誰にも聞くことができません。

こんなことになるのなら、お母さんに化粧のやり方を教えていただいていたれば良かったです。クラスの皆さんは自分を少しでも良く見せようと努力してらっしゃるのに。私は今までそういうのに興味がなくて・・・でも、今は少しでも、自分を綺麗に見せたいです。

私などが自分のことを綺麗など言っていると他の方に笑われてしまいそうです。

ふと、時計を見ると、そろそろ、『王』が来られる時間です。

もう一度、きちんと身だしなみができているかを確認してお迎えに上がります。

よし、前髪はおかしくありません。

そうしている間に、私の時間は過ぎていくのでした。



## Episode 5 魔女と巫女の決意（後書き）

感想をくださった、Tさん、コタロウさん、| s a k i |さん、いも犬さん、リョウタさん、ありがとうございました。

次回更新は3月24日を予定しています。

## Episode 6 姫巫女の絶望（前書き）

このEpisodeを読まれる前に、これだけは先に言っておきたいのですが、このEpisodeを書いたのには理由があります。

あとがきに書かせていただきますので、内容に不満がありましたも途中で、読むのをやめずに、あとがきまで読んでいただきたいと思います。

## Episode 6 姫巫女の絶望

地下鉄から降りた才華は若干焦っていた。

「くっそ、なんてこった、地下鉄で携帯が使えなくなるなんて……」

そう、彼は現代ハイテク機器である携帯を使って待ち合わせ場所の七雄神社に調べて向かっていたのだが、彼は失念していたのだ。地下では携帯電話は使えなくなってしまうことを。

それにより、ただで、さえも『三馬鹿』のせいで遅くなっていたのに関わらず電車を間違えてさらに遅れてしまったのだ。

唯一の幸運だったことは、途中で電波が入り逆方向に向かっていると気づけたことだろう。

「……さすがに、やっぱり怒っているだろうな」

現在の時刻は午後五時を少し回った頃。

祐理がホームルームの後、すぐに七雄神社に向かっていると仮定すると彼女は午後四時に神社に着く計算である。

「うん、急ぐか」

そう思った矢先である、携帯が目的地についたことを音楽で知らせてくれる。

この曲は才華の好きな声優さんの曲なのだが、軽くオタクぽいのである。

そんな曲を躊躇いもせずに設定している、あたり、才華の図太さがうかがえる。

「何なんだよ……この石段は……」

彼の目の前に広がっているのは明らかに昇るのには時間がかかりますよ、とでも言っているかのような、石段だった。

「普通に上がったんじゃ……………時間がかかるもんね……………これは女の子を待たせないためだ。うん。だから魔法を使っても問題ないな……………うん、きっとそうだ。俺がめんどくさいからじゃない、うん」  
そう、言っと、才華は自分に対して認識障害魔法を発動させる。  
一般人は才華のことを認識できなくなってしまう。  
もちろん、一般人とは、つまり、魔術の心得のない者のみが対象である。

普段は、この認識障害魔法を自身の呪力やら魔力やらに使い、誰にも自分が『王』であることを分らないようにしている。

それは才華が権能を掌握していない現在の状況で、できる限り、『まつろわぬ』存在との戦闘を避けるためである。

この認識障害魔法の凄い所はそこに『いる』のに気づけないことである。

なくなる訳ではないので不自然ではない。ただ、そこにあるのに気づいていないだけなのだから。

まつろわぬ神に直接確認したことはないので、確かではないが。  
現にイタリアでは少女のまつろわぬ神に才華が『王』だと気づかれた。

このことに多少、危機感を覚えた才華が認識障害魔法を強化したのは言うまでもないが。

今回は祐理に気づいてもらうために『王』であることを隠している認識障害魔法だけはオフにする。

その後、才華は

『我、覇道を進む者なり、我は、我の道を進むための力を求める』

その言葉を呟く、その姿を真剣そのものだった。

『精霊の歌が響く、その音色は優しき加護を、命の息吹が我を包み込む』

そこまで言葉を紡いで一息おく才華。

そして彼は口にする自分の魔法の『名』を。

『精霊の旋律』

その言葉を周りの精霊が認識した時には才華の体の周りには魔力の奔流が纏われていた。

彼の肉体を強化するための魔力の奔流が。

「さて、と」

才華がトンと小さな音をたてて、地面を蹴った次の瞬間に、才華は、既に神社へと続く階段の半分まで移動していた、彼の脚力は『精霊の旋律』により極限まで強化されていたためにできる芸当だった。

「ほらよつと」

一度、石段に降りて、もう一度、石段を蹴ると、才華は石段を登りきれたのだった。

そこで待つてくれていたのは、才華が幼い時に出会った少女だった。

「よくいらして下さいました、草薙才華さま。カンピオーネである御身をお呼び立てした無礼、お許し下さいませ」

少女、万里谷祐理まりあ ゆりから発せられた言葉に目を見開かせて驚いた才華だった。

そんな才華に対して祐理は未だに、深々と頭を垂れたままだった。  
「あ、ああ」

まさか、知り合いである祐理に深々と頭を下げられるとは思っていなかった才華は戸惑いの声を出してしまう。

そこにいつもの軽いノリの才華いなかった。

その言葉を祐理は何を勘違いしたのか祐理は

「現在、この七雄神社には、私一人しかおりません。ですから、御身の逆鱗に触れる様な失態がありまして、罪は私一人のものとなります。どうぞ、お怒りは我が身にのみ下されるよう、ご寛恕かんじょを請いとうございます」

まるで、暴君をいさめる家臣のような言葉を発した。

一瞬、自分のことを忘れているのか？ と思った才華だが、それはないと願いたかった。

それでも、やはり不安だった才華は小さく呟いた。

「祐理？」

と。

才華のその呟きをよそに祐理は……

「荒ぶる魔王たる御身のお怒りは、私ごときを殺めたところで収まるものではないと承知の上で申し上げます。何卒、関わりのなき無辜<sup>むこ</sup>の民を戯れに踏み潰すような真似は、お慎み下さいませ。慈悲と共に寛容を示すお振る舞いは王者の人徳でございます。全ての咎は、どうか、わたし一人にのみ帰するものとご容赦ください」

と、言った。

それを聞いて

「……………え？」

才華は驚く、もはや、ここに来るまでの上機嫌は微塵もなくなっていた。

祐理と会うことを楽しみにしていた気持ちと共に。

「っ！？ な、何か問題がありましたでしょうか？」

そのため息を聞いて、祐理は慌てる。

そして、

「申し訳ございません、申し訳ございません」

祐理は何度も頭を下げる。

才華は言葉を失う、その様は自分を大切にするよりも、まるで他人を守るために頭を下げているようだったから。

「祐理……………」

「どうか……………無辜の民をお殺めになるのは……………」

「祐理！」

才華は祐理の言葉を遮るようにして彼女の名前を呼ぶ。

「はい！？」

「俺と会ったことは覚えている？」

「……………はい」

その言葉を聞いて才華はほっと胸をなでおろす。



「それなら俺が祐理を殺すとも思う？」

「いえ……………思っていません」

「良かった。改めて久しぶり祐理」

「……………お久しぶりです……………草薙さん」

その言葉を聞いて、驚く才華。

「昔、みたいに名前で呼んでくれよ。俺は今でも祐理のことを友達だと思ってるよ」

「……………友達……………いえ、私と草薙さんとは、もはや、立場が違いますので」

「どうしてもダメ？」

才華の言葉には少しだけ、弱々しかった。

「……………はい」

そこまで言いきつてしまわれては才華としても、これ以上、強要できずに話しを進めることにした。

「祐理はあれから、元気にしてた？」

「……………はい、私は大丈夫です」

「何か、祐理を見ていると何かを我慢しているような……………気がする」

才華のその言葉にビクンと驚く祐理。

「……………いえ、そのようなことはございません」

「そっか」

「さっそく、本題に移らせていただきたいのですが」

「え、あ、うん。分かった」

祐理のその言葉に才華はポケットに入っているメダルを取り出す。それを見た祐理は、まるで一人ごとのように呟きだす。

「古い、ひどく古い神格にまつわる聖印です。蛇神、オロチの印…

……………いえ、もつと根本的な、母なる大地と巡る螺旋の刻印……………」

「霊視……………」

才華も祐理が霊視できることは知っていたものの、ここまで簡単にできるものとは思っていなかったため、多少、驚いてしまう。

「これは、間違いなく……『まつろわぬ神』が関わる代物です。どうして、このような物を日本に……」

「エリカに頼まれたから」

祐理の言葉に才華は何でもないように言う。

「……愛人の女性に頼まれたからと言って『まつろわぬ神』の危険に東京の民をさらすのですか!？」

祐理は寂しそうにそう叫ぶ。そう、叫んでいるのに祐理の声はどこか寂しそうだった。

「別に態々（わざわざ）、危険にさらそうとは思っていないけど、それほど、気にもしていないよ。俺は俺の知らない人なんて、どうでもいいから。いや、言葉のあやかな……特に守ろうとは思わないし、殺そうとも思わない。あくまで知らない人、他人だから」  
その言葉を聞いて祐理は目を見開く。

そして、祐理は暴君に嘆願するかのような声で……

「あなたは『王』なのですよ！ なぜ、そのようなことが言えるのですか!？」

「俺は……まったく知らない他人よりも親しい人の方が大切だから」

「え？」

「俺は知らない人を百人救うか、静香一人を救うか？ と尋ねられたら俺は迷いなく知らない百人を殺しても静香を救う」

「そのような、お考え……『王』である恩身がされてはなりません……恩身は力を有しておられるのですから」

祐理は顔を青くする。

「もし、仮にこれがイタリアにあれば、間違いなくエリカが持つことになると思う。そんなことになれば間違いなくエリカは傷つく。それを俺は見過ごせない」

「……」

才華のその言葉に何も答えない祐理。

二人の間に少しばかりの静寂が訪れた後に才華は先ほどから、ず

つと気になっていたことを祐理に質問する。

「なあ、祐理……祐理はさっきから、まるで、自分の命なんて、どうも思っていない風に話しているよな？ ……もしかして自分の命よりも東京に住んでいる、知らない人の方が大事だと思っているのか？」

「……そんなことはありませんが、私、一人の命で東京の民が救われるなら、私の命など」

それを聞いて才華は眉をひそめる。

「それは、祐理の考え？ それとも、日本の呪術協会にそう言えて教育されたの？」

「……私の考えです。力ある者として、それは当然ではないのですか？」

「……確かに、俺の考え方は道徳的には間違っているかもしれない。けど、祐理も良く考えて欲しい。巫女としての祐理ではなく俺が昔あった少女の祐理として一人の人間として自分の気持ちを……自分よりも他人を優先していたら、いつか……祐理、自身に待っているのは破滅だから」

「恩身が間違っておられます！ 私が正しいのです！ 私が、私が！」

祐理は才華の手に握られた、メダルを奪い取ると、どこかに走り去って行ってしまった。

祐理が走り去った方向を祐理が見えなくなっただけから、少しの間、見続けた後、才華は

「趣味が悪いぞ。エリカ」

後ろに向かって言葉を発する。  
すると

「あら？ 気づいていたの？」

ゆつくりと、日本ではなくイタリアにいるはずの少女、エリカ・ブランドリが石段を上って来た。

「まあ、いいわ。それにしても、才華。あなた、あの子のことを相

当気にいつているのね」

少し不機嫌そうにそう言う、エリカ。

「ああ、気にいつているよ。エリカと同じ位。いや、言葉のあやだな。『今』のエリカは愛している。どう？ 百点？」

「六十点、先に他の女の名前を出さなかったら、百点ね」

「厳しいな。空港で、せつかく、介抱してやったのに」

途端に顔を真っ赤にするエリカ。

「あ、あれは……才華がいきなり、ギョってするから……」

「俺が悪いつてことにしておくよ」

「そ、そうよ」

「それで、エリカから見て、俺は間違っていると思うか？」

才華のその真面目な質問にエリカは深呼吸して落ち着いてから、

「ええ、間違っているわ。百より一なんてバカにする考えよ。でも、私はその意見、嫌いじゃないわ。いえ、人間ならそれが普通よ。百を取るという子の先に待っているのは、才華の言った通り破滅よ。他人を救うために自分が犠牲になるわ。そう言った子を私は何人か見て来たわ。私達の生きている魔術の世界は、そこまで」

甘くないわ、と答えたのだった。

「はあ、はあ、はあ」

私は必死に階段を駆け下ります。

七雄神社には参拝する人のために作られた石段の他に神職が町へ出るための階段が備え付けられています。

この階段を下りたなら、彼に会わずに済むから。  
胸が苦しい。

走っているからでは、ありません。

彼と今日、会った時、初めて会った時に私は、彼から紛れもなく、『王』の力を感じました。それはあのお方と同じ圧倒的な感覚。

まるで、自分の全てを支配されているような感覚を引き起こされた。

だから、反射的に私は彼に、あのお方にすると同じような態度をとってしまった。

そんな私の態度に彼は不満があったようで、彼はため息をついた。それに私は必死に謝った。

その行動がさらに、彼を不快にさせたと思います。

昔のままのような彼だったなら。

いえ、あの時はそう思いました。

彼は昔のままだと、優しく、暖かな彼のままだと。

だから、私の胸の中に小さな幸せが広がりました。

本当に綺麗な幸せが。

しかし、もはや、私と彼とは身分が違う。

今までのように話す訳にはいかない。だから私は彼を草薙さんと言った。それに彼は寂しそうだっただ。

それから、彼と話しを進めていると、彼は自分の大切な人のためなら、東京の民を犠牲にしてもいいと言った。

それに私は絶望した。  
彼が何を言っているか分からなかった。いえ、分かりたくなかった。

私の知っている昔の優しくて、暖かな彼ではなくなっているような気がして……本当に目の前が真っ暗になりました  
でも、彼は言った

私にも分かって欲しいと  
でも、私は彼から逃げた

彼から『まつろわぬ』存在の遺物を奪って  
でも、私は間違っているとは思えない

いえ、思いたくない  
でも、彼は私を追ってこない

捕まえようと思えば、いつでも捕まえられるのに  
でも、それでも、私を彼を分かりたくない

分かってしまったら、私は恐怖に支配されてしまうから  
でも、分かりたい

彼を思っているから

「はあ、はあ、はあ」  
だんだん、と辺りが薄暗くなっていく中、私は走る。  
街の中を。

ドンと誰かにぶつかって、尻持ちをついてしまいました。  
「すいません」

咄嗟に謝り、相手の顔を見る。

彼女は銀の髪を持ち全てを見透かすような翠色の瞳をしています。  
私は一瞬、彼女の顔に見とれてしまいました。

「大丈夫？」

そう聞いてくれて、手を差し出してくれます。

「あ、はい」

そこで、彼女の服装に驚きます。

彼女が外国の使用人のような格好をしていたからです。

「クスッ、あなた、どうしてそんな格好で走っているの？」

そう言われて、自分も未だに巫女服を着ていることに気づきました。

私は顔を真っ赤にしてしまった。

「あら、あなたの持っているそれ」

「え？」

「才華様の

」



## Episode 6 姫巫女の絶望（後書き）

このEpisodeを読まれた祐理ファンの方、言われるまでもなく、言いたいことは分かります。

あれほど、才華との再会を心待ちにしていた無垢な少女に対して、どのような仕打ちをしているんだ！ 作者は鬼か！？ 鬼畜か！？  
こんな話、読みたくねえよ！

と、思われたことでしょう。

ですが、ここで、少し原作を思い返していただきたいのです。

彼女（祐理）は原作二巻で、皆が恐怖する中、バカ伯爵が『まつろわぬ神』を呼びだす儀式に一番初めに向かったとリリアナさんが言っています。

本編でも、才華は言っていました。他人のために自分を犠牲にする。

これは、素晴らしい考えです。

人間として完成されている。

おそらく、原作では、そんな祐理を護堂君は円卓に囲って、良い関係を築くでしょう。これは、原作の祐理さんにとって、ハッピーエンドでしょう。

ですが、考えて欲しいのです。

この話の主人公の才華の隣には誰がいますか？  
リーゼロッテがいます。

彼女は、世間一般で言われる『悪』の魔女です。

例え、才華の隣にいてもリーゼロッテは『悪』の魔女です。

そんな彼女が世間に知れ渡った時、はたして、原作同様の祐理さんだった場合、どうなりますか？

バカ伯爵にも、自分の命を差し出すような子です。

彼女は才華に言うでしょう。

「なぜ、罪人であるリーゼロッテさんを、あなたは守るのですか！？」

仮に、これがなかったとしても、彼女は世間一般で罪人とされているリーゼロッテと共存ができる可能性は極めて低い。

なし崩しに、その話を無視することもできたのですが、あえて、スルーせずに、Absolute Desireでは、追求したい。

矛盾のあるハーレムではなく、本当に心から才華達が笑えるハーレムを作るために。

ですから、少しの間、祐理さんのファンの方には辛いお話が続きますが、断言します。

祐理のことも、きちんと幸せにします。

リズやエリカもそうですが、きちんと、デンプレの通り、幸せにします。

今回の話はそのための布石です。

ですから、例え、批判の声が多数ありましても、一切、削除するつもりはありません。

ですが、批判の声もきちんと受け入れるつもりです。

最後になりましたが、感想をくださった、Tさん、環境さん、コタロウさん、いも犬さん、ありがとうございました。

では、今日はこれで失礼します。

次回の更新は3月27日を予定しています。

## Episode 07 王の準備

「エリカ、緊急事態だ」

「え？ どういうこと？」

「事態は俺達が考えていたよりも厄介なようなんだ」

七雄神社の石段を下りている最中に俺の張った探索魔法にひっかかった『まつろわぬ』存在がいた。

「私が追って来た『まつろわぬ神』なのかしら？」

「分からない。俺が使ったのは詳細を調べるよりも隠密性に優れた魔法なんだ。詳しい詳細を調べると俺の魔法が気づかれる可能性があるから」

「分かったわ。でも……それなら……するのね」

「ああ、頼む」

俺は満面の笑みを浮かべてしまう。

俺の権能を使うための条件は色々あるんだが、権能を使うための最低条件は『自分を好いてくれている女の子とキスすること』だ。だから、いつも、エリカにキスしてもらっている。

「……あの子……祐理って言ったかしら？ あの子は大丈夫なの？」

「ああ、あっちの方に『まつろわぬ神』の気配はないし、もし、向かったとしても、向こうにはリズが近くににいるから、リズなら上手く祐理と逃げてくれるだろう」

「リズ？」

一瞬にしてエリカの顔が歪む。

やばい……女の子と二人でいる時に他の女の子の話は禁句だった

！ じいちゃんなら、こんなイージーミスしないんだろうな……とほほ。

「俺の家族でエリカと同じ位に愛している人。この一件が終わったら紹介するよ」

「ふん。分かったわ、それまで待っていてあげる。とりあえず……その今はするわよ」

「ああ、俺はしたい」

俺の迷いの言葉にエリカは頬を若干、赤く染める。

「才華……あなた、今、日本語おかしくなかったかしら？ それとも私の日本語が間違っているのかしら？」

「両方かな」

まさか、俺がベッドの上でいたい、を略していたことを見抜かれるなんて……さすがはエリカだ。

だてに、恋愛小説を書いている訳ではないな。

「それについても、今後、話し合いましょう……今は」

「ああ、いただきます」

俺はエリカをそっと抱きしめる。

石段の上なので、若干、エリカは態勢を崩すが俺が強引に抱きとめる。

本来なら、抱きとめた態勢のままにいるのは普通の高校生には不可能だが俺はまだ『精霊の旋律』を使い続けているから、可能だった。

エリカの顔がみるみる、赤くなっていく。

「ちょ、ちよつと、待って……才華……私、まだ心の準備が……」

「愛しているよ。エリカ」

「ずるいわ……才華……こんな時に……」

エリカは、そっと目を閉じる。

エリカの白く透きとおった肌が夕日に照らされて紅く綺麗に光っている。

「愛している」

そう言ってエリカの唇に俺の唇を重ねる。

「んっ」

エリカの声が漏れる。

でも、俺はエリカの声を無視して、自身の舌をエリカの舌に絡ませる。

「あん」

エリカの甘い声とともに俺の頬にエリカの暖かい息がかかる。

それが心地良くて、舌をさらに絡める。

「そこっ……は、ああ」

何度がエリカとキスしたことがある俺にとって、エリカが喜ぶポイントは知りつくしていると言っても過言ではない。そして、エリカから、俺に『愛』が伝わってきて、さらに興が乗って来た時だった。

「きゃあああああああ」

この場の雰囲気壊す、まるで、アイドルを追いかける時に出すような声で叫ぶメイドさんがいなければ、このまま、かなり長い時間、キスしていたことだろう。

今は緊急事態なので結果的には良かったんだが……アリアンナさん……マジで、今度、邪魔したら、怒りますよ。

「才華様の」

彼女の言葉を聞いて私は息をのみ込んだ。

そうだ、彼女は……学校で常に才華君と一緒にいる女の子……確か名前がリーゼロッテ・V・草薙さんだったと思います。

「あなたが、なぜ、『それ』を持っているの？」

彼女、リーゼロッテさんは私の手の中にあるメダルを睨みながら、私に聞いてくる。

「え、あ、その……」

彼女が放つ、高圧的な雰囲気には少し恐怖してしまう。先ほど、才華君に感じたモノなんて比ではありません。

……この方も魔術を……それも私などでは到底、届かない領域まで。

「才華様が何を考えているのか私には分からないわ。でも、あなた、程度の人間が才華様からそれを奪えるとは思えない。もしかしたら、私がいるのも考えて、あなたに託したのかもしれないわね。いいわ、ついて来なさい。話を聞いてあげる」

そう言う彼女はスーパのロゴの入った袋を持ったまま、歩き出す。

私はというと……彼女に言われた通り……彼女の後を歩くしかありませんでした。

なぜなら、私の直感が『彼女に逆らうな』と言っていますので。

それから、彼女と共に歩いていると、少し大きめの公園が見えてきました。おそらく、彼女の目的地はあそこなのでしょう。

案の定、公園の中に入ると、彼女が一番近くのベンチまで行って腰かけます。

「あなたも座りなさい」

「……はい」

私は言われた通りベンチに座ると、彼女は手に持っていたスーパの袋を私と彼女の間に置き私を見据えます。

「それで、何があったのかしら？ 私は基本的に、あなたのような

人間とは話さないのだけど、才華様が関わっているなら話は別よ」  
それを聞いても私は何も言わずに俯いたまいました。

すると、彼女は

「あなた……馬鹿なの？ 私ならあなたの命を一瞬で奪えるわ。魔術を少しでも扱えるのなら、私とあなたの実力者の差が分からない訳ではないでしょ？ 話さないのなら、殺すわよ？」

につこりと彼女はほえんどくれますが……私はその笑顔を見て脅えることしかできませんでした。

「そうそう、初めに言っておくけど、私に嘘をついたりしたら、その瞬間にあなたを殺すわよ。さあ、話さない」

「……はい」

私は彼女に支配されているような感覚でした……私には……何も言わないという選択肢は初めからなかったのですから。

私は彼女の瞳を真っ直ぐに見つめて先ほどの出来事を話、始めます。

私が言葉を話し始めると彼女は頷くでもなく、何か答えるのでもなく、ただ、私の瞳を見続けた。

そして、私が話し終わると、彼女は

「それで？ あなたは私に殺されたいの？」

「っ！？ 私は嘘など……」

「分かるわ。でもね。あなたは才華様にそこまで思ってもらっているのに、才華様を裏切って『それ』を奪って逃げて来たのでしょうか？ 才華様に仇なすのなら、私は容赦しないわ」

「あなたは、間違っています！」

私の言葉に彼女は薄く笑って

「何が間違っているの？」

と聞いてくる。

私はその言葉の意味が分からずに何も言えなくなってしまう。  
「私はただ、自分の欲望に忠実に生きているだけよ？ それは間違っているの？」



「そんな、自分勝手に」

私の言葉を遮る形で彼女は冷淡に言う。

「人間風情が、何をうぬぼれているの？ あなたは生きているだけで生きとし生けるモノを殺しているのよ？ あなたは夏に蚊を殺したことはないの？ いえ、もつと具体的に言えば、殺虫剤を使ったことはないの？ 毎日食べる食料に生きている動物を食べたことはないの？ 日本人なら、寿司を食べた時に魚を一切食べないの？」

「え？」

「人間以外は勝手に殺しても構わないけど、虫や他の生物は殺しても構わないの？」

「そ、そんなことは・・・」

「あのね、あなたは」

「エリカ、すぐに、まつろわぬ神の所に向かう、捕まってくれ」

「ええ、分かったわ」

未だにエリカの頬を赤いがそれを言っていられない状況のため素直に才華の体に捕まる。

「アリアンナ、あなたは一度、ホテルに戻りなさい。あそこなら、他の所よりは安全だわ」

「はい、分かりました、エリカ様……………ご武運を」

「ええ」

「じゃあ、エリカ、転移魔法を使う」

『転移』

才華がそう呟くと、才華とエリカの足元に魔法陣が展開される。そして、その場から才華とエリカの姿は忽然と消える。

戦地に赴く少年と少女

しかし、少年はまだ、知らない

そこに待ち受けているのは

少年が知りえない存在であることを

動き出している鍵<sup>やみ</sup>の存在を

少年のことを『パンドラ』が『最強の神を殺した者。そして、最も過酷な運命を持った魔王』と言った意味<sup>わけ</sup>を

少年の物語はすでに、少年のモノになっているのだから

## Episode 7 王の準備（後書き）

今回のEpisodeは、つなぎです。

次回から、ついに？ 対まつろわぬ神戦が始まります。

感想をくださった、絡操人形さん、murasasaさん、  
タロウさん、Tさん、ありがとうございました。      コ

次回更新は4月1日を予定しています。

## Episode 08 王の瞳（前書き）

ここから先、皆様をお願いなのですが、感想の方に今回、現れたのまつろわぬ神は『 』ですか？ という質問を書かないでいただきたいのです。

これからオリジナルのまつろわぬ神を多数出演させるつもりですが、神の名前はなかなか本編では明かしません。

ですが、特徴（力）を書いてしまいますので神話に詳しい方などは分かってしまうと思います。

もし、謎が解き明かされていくのが楽しみだ。という方がいらした場合、その方に不快な思いをさせてしまうことがあるかもしれませんので。

どうしても確認したい、という方はメッセージで送って質問していただければ本編で、未だに名前を出していない状態でもお答えします。

その場合、ネットに書きこまないことが約束になりますが、では、本編をどうぞ。

## Episode 08 王の瞳

「ねえ、馨さん<sup>かおる</sup>」

「なんだい？ 甘粕さん<sup>あまかす</sup>」

一人のヨレヨレのスーツを着た中年の男と一人の美少年風の女の子がそれなりに広い執務室で話をしている。

「これって……今、日本は今までにない、ピンチが到来していませんか？」

「そうだね。確かにピンチだ。世界を救ってくれる程の英雄か、はたまた神様でもない限り、日本は滅ぶんじゃないかな？」

「そんな、他人事な……」

「だって、他人事だよ。上層部は今、必死に恵那を経由して、あの人達に救援を要請しているけど、結果は非を見るより明らかだからねえ」

「これで『神』に頼ると言う選択肢が消えましたね」

「そうだね」

そこで愉快そうに笑う、馨と呼ばれた少女。

「はあ、何がおかしいんですか？ 馨さん」

「いや、今の君の顔が」

「何気に酷いですね……」

「いつものことだろ？」

「はあ……もつと良い条件の職探そうかな……」

「いやいや、甘粕さん、忍者なんだから、耐え忍んでよ」

「……私は忍者じゃなくて隠密なんですけどね……」

「一緒じゃない？」

そこで『クスッ』と笑う馨。

「はあ、違いますよ……それで、何をさせるんですか？」

「その言い方は好きじゃないな。まるで僕が君に無理難題を押し付けているみたいじゃないか？」

「……少しは自覚してくださいよ……明らかに給料以上の仕事ですよ」

「世間一般ではそれをサービス残業って言っんじゃないかな？」

「……神様の動向を窺う残業がサービス残業って……本当に転職しますよ？」

「ふふつ、冗談だよ。君ほど優秀な部下を失う訳にはいかないからね」

「……そう思うなら、少しは休ませてくださいよ」

「い・や」

「はあ……それで、どうしますか？ 神様に頼れないなら……『魔王』様でも頼りますか？」

「何を聞いていたんだい？ 僕は神様と英雄と言ったんだよ。まあ、世間一般では魔王様と呼ばれているかもしれないけどね」

「……それで、何をすれば？」

「簡単だよ。もし、彼がまつろわぬ神と戦わなければ、戦ってくれるようにお願いして、戦うようなら、そのまま、彼を観察して、彼の権能の観察を」

「……それって死亡フラグじゃないですか？」

「これが成功したら、僕たちは世界中の魔術結社よりも有利な立場ができるよ。頑張って」

「……はあ、できる限り、頑張りますよ。ボーナスは期待しても？」

「甘粕さんが戦死した時だけ」

「……それを聞いて安心しましたよ。死ねませんね」

「頑張って、応援しているよ」

「……応援するなら、ボーナスください」

広場は静まり返っていた。

本来、ありえない光景だった。例え、土日、祝日ではなかったとしても、それなりに有名なデートスポットである、この広場には、必ず、人がいるものである。

静まり返るなど、奇怪以外に言いあらわせる言葉がない。

「才華……」

「ああ」

そんな静まり返った広場に唯一いる人間、それが才華とエリカだった。

二人が見据えているのは広場の中心のただ一点だけ。そこには。

『待ちわびたよ、神殺し、本当に』

一人の男性が立っていた。

男は金色の髪を、まるでクロワッサンのようにクルクルとさせて胸元まで伸ばしていた。体格は、まるでボディビルダーのように鍛えられており、並みのモノなら戦う前に戦意を喪失しような程だった。

そんな体を持ちつつも容姿は美少年のそれだった。

はつきり、言って本来なら、気持ち悪いはずなのに、なぜか、男のそれは気持ち悪いと感じなかった。

まるで、そうあるのが当然のように凛々しく、それでいて神々しかった。



「エリカは、一端、離れて様子を窺ってくれ」

才華はエリカに小声でそう言つと、広場の中心に向かう。  
彼がいる所に。

「なぜ？ 俺を待っていたんだ？」

「良いじゃないか？ そんなことどうでも」

「あんたは良くても少なくとも俺は良くないんだけど」

「なら、答えてあげるよ。まあ、本当は女の子の信者と話す方が僕は好きなんだけどね」

「……俺みたいな奴だな」

才華の言葉に少々、男は眉をひそめる。

「『神殺し』が『神』を同等のように扱うのか、なかなか、君は面白いよ」

「……神に褒められても嬉しくないな。女神様なら嬉しい限りだけど」

「そうかい。まあ、簡単に言えば、旧知の仲の神に頼まれたつて言うのもあるけど、君、本人に興味がある訳じゃないと言えば嘘になるかな？」

「旧知の神？」

「そう、今頃、目的の場所に向かっているんじゃないのかな？」

どこか、遠くの方を見つめて男は言った。その瞬間、才華は魔力を爆発させるように放出させる。

「おっと不意打ちかい？」

男がそう言つたにも関わらず、才華は目をつぶつてしまう。

「おい、おい、不意打ちかとも思ったけど、不意打ちをしてくださいつて言うのかい？」

そんな男を余所に才華は集中する。

そして、ゆっくりと目をつぶる。

「まさか……俺が気づけないなんて……」

「仕方ないさ、彼女は今、神としての力を殆ど、失っているんだ。いくら、優秀な人間でも『神』を探している限り、余程、集中しな

ければ見つかられないさ」

「……あんたが俺をここで足止めって訳か？」

「そつだよ。僕がここにいる限り、君は彼女の元に行けない。それに例え、彼女が『神』の力を殆ど失っていると言っても、たかが、人間程度に負ける程、僕達は弱くないさ」

「どうかな？ 現に俺は一人、殺しているぞ？」

「君が殺したのは、『不完全な』状態の父上だったからね。もし、『完全な』状態で戦っていれば、君など一瞬で消し炭さ」

男の言葉に一瞬、眉をピクツと動かす才華だったが、さらに言葉を続ける。

「負け惜しみにしか聞こえないな」

「そつかもね。現に、あの人は君に負けて、君に力を与えてしまったからね。ああ、人って言ったのは君達の流儀に合わせてあげているだけだからね。本当に僕達自身のことを人だとは思っていないからね」

「そんなことは分かっているさ。それよりも、そろそろ、あんたと戦いたいんだけど」

「あれ？ てつきり、僕と話して僕の情報を僕らか引き出していると思っっていたんだけど」

「あんたは、あんたで俺をここに引き止めておくために話してたんだろ？ わざと俺の気を引くために自分がオリュンポスの神だと教えたんだろ？」

「僕は君の殺した神を知っているのに、君がまるで僕のことを知らないのは不公平だからね」

「……それなら、名を教えて欲しいよ」

「嫌だね、ここまで僕が教えてあげても分からない君が悪い。これだから人間は愚かだ。昔からね。僕の好意を無駄にして、自分勝手に解釈する」

本当に残念そうにする男に才華は

「それが人間だからな」

苦笑する。

「君は人間の中でも、まだ、マシな部類なのかもね」

「いや、俺は人間の中でも最下層にいる程、最悪な人間だよ。勝手な理由で神を殺して、自分の勝手な思いを祐理に押し付けて」

「……そう思っている時点で、君はだいぶ、マシな方だと思っただけだね」

「そう言ってもらえると、ありがたいよ」

「さて、僕は、そろそろ、戦いたくてウズウズしているんだけど、君はどうだい？」

男は、いや、まつろわぬ神は肩をすくめてみせた。

「俺か？ 俺は、おまえみたいな神様と戦わないで女の子と、いやいやしていたい」

まつろわぬ神のしたことをまるで、真似るかのように才華は肩をすくめてみせた。

「そうか……それでも、君は『神殺し』で僕は『まつろわぬ神』戦わずして分かり合うことなんてできやしない」

「俺は男とは別に分かり合いたくないな」

「……君は本当に父さんに似ているな。そんな君だからなのか？」

「まあ、君が何と言おうと、そろそろ、始めたい、僕の勝手に始めさせてもらうよ。『神殺し』」

まつろわぬ神がそう言った瞬間に才華は口を開く。

『我、覇道を進む者なり、我は、我の道を進むための力を求める』

その言葉を遮るかのように、まつろわぬ神は地面を蹴って才華の元まで轟音を立てて走って向かう。

それに呼応するかのように才華はバックステップで距離を少しでも取りながら、言葉を紡ぐ。

『精霊の歌が響く、その音色は優しき加護を、命の息吹が我を包み込む』

「遅い！」

まつろわぬ神の拳が才華の懐に入りそうになった瞬間

『精霊の旋律』

才華は魔法を完成させる。

そして、腹に魔力を集中させて、後ろに大きく飛ぶ。

「っ！？」

まつろわぬ神の拳が才華の腹部に当たったことにより、才華はト  
ラックにはねられたごとく、後ろに吹き飛ばされる。

「見事！」

神は嬉しそうに、そう言う。

「ちっ、何が見事だよ、馬鹿力！ばかしから あばらが二、三本いったぞ」

才華の悲痛の叫びを聞いてなお、まつろわぬ神は嬉しそうに。

「権能を使っていない状態でそれですんだのдар？ 人間にしてみ  
れば、見事としか言いようがない」

『加速アクセル』

才華が呟くのは肉体強化魔法『精霊の旋律』の最大の利点である、  
アビリティーは『始動キー』破棄である。

これは才華が魔法を使う際に必ず必要な魔法を発動させるために  
必要な始動キーである『我、覇道を進む者なり、我は、我の道を進  
むための力を求める』を唱えずに普通に魔法が使えるというものだ。

『荒れ狂う空、降り注ぐ稲妻 吠える剣』

「待たんよ！」

再び、才華に向かう、まつろわぬ神。

『虚空の雷刀きよくう らいとう』

しかし、今度はまつろわぬ神が才華の元に辿り着く前に、才華の  
手元に轟音と共に一振りの刀が現れる。

その刀身は雷で、できている。雷でできているが故に、轟音を周  
りに撒き散らすのである。

「ふん！」

神の右の拳を『虚空の雷刀』で受け止める才華。

それにより、雷によって神の拳が焼かれる。

「な!？」

まつろわぬ神は、それを気にした様子もなく、神は左の拳で才華を殴る。

咄嗟に、右に飛んでいたものの、今度は肩に神の圧倒的な力を持つ拳を受けてしまう。

「くっそ」

そのまま、吹き飛ばされるのではなく、才華は空中で

『アクセル  
加速』

呪文を唱える。

『結束の大地 行く末の地 叫ばれる古の名 』

地面に着地すると同時に  
いにしえかみなり

『古の雷』

才華は紅い雷を神に向かって放つ。

才華の雷は神とその周りの地面に当たると同時に、土煙を立てる。

「取りあえず・・・『癒す（ヒール）』」

自分の左腕の骨を治す。

あくまで略式の呪文なため完全には折れた骨はくっつかないが、

それでも、何もしないよりはマシだった。

「でも……どんな、馬鹿力だよ。あきれちまうぜ……」

「あきれるのではなく信仰して欲しいものだね」

土煙の中から神は首を左右に動かしながら歩いて来る。

『古の雷』で受けた傷はない。

それどころか、『虚空の雷刀』に当たったはずの右の拳にもかすり傷一つない。

「……これは」

才華は、記憶を必死にたどる。オリュンポスの中で防御力の高い神の名を。

しかし、才華が今、相手にしている、神は才華に時間を与える程、優しくはなかった。

また、才華に向かって走って来る。

「くっ、どうする」

才華は、神から離れるように後ろに下がる。

「かかったな、『神殺し』」

「は？」

ここはデイトスポットでも有名な広場である。

もちろん、木は埋められている。花も埋められている。

それは当然であり、普通のことだ。

そして埋められている場所はもちろん『土』である。

「なっ！？」

才華が後ろに下がった場所にも、もちろん。

『土』から蔓が伸びて来て才華を縛る。

それも普通ではない太い蔓だった。

「油断したな、『神殺し』！ 僕をただの『力』の神だと思ったのが甘いんだ」

「最悪だ……………魔眼<sup>ギアス</sup>」

才華の黒い瞳が紅く染まり、その色と同じような色の衝撃派のような光が、まるでドームのように周りに広がる。

その光を浴びた神の瞳は紅くなり、動かなくなる。

「解放<sup>リリース</sup>」

才華がそう呟くと、『虚空の雷刀』が刀の姿から雷の姿になり、才華の右腕に帯電する。その雷の一部を使って体に巻き付いた蔓を焼き払う。

「ジャスト五秒」

そう言った、瞬間に神は動き出した。

神を警戒しながら才華は思い出す。リズに言われたことを。

「才華様」

才華とリズがいるのは、才華が作った通称『別荘』である。別荘は普通のミニチュアフィギアの城が入った、ただの水晶であるが、その実態は違う。

その水晶の中に入ることができるのだ。

もちろん、その中ではミニチュアフィギアの城は普通の大きさである。才華の魔法によって作られたのである。

そこが才華とリズの魔法と魔術の修練場となっていた。

「ん？ なに？」

「魔眼ギアスの使用は『まつろわぬ神』と戦う時は控えてください」

「どうして、なんだ？」

「はい、おそらく、才華様は以前、魔眼ギアスは神に対して聞かないと仰っていました。それは……間違いです。その力は『まつろわぬ神』に通じるでしょう。しかし……おそらく……かなりの魔力を消費しています」

「……どれくらいの魔力を使うと思う？」

才華は、少し複雑そうな顔をする。

それはそうだ、まつろわぬ神に魔眼ギアスが効くということは一撃必殺の矛を得ることであるからだ。

「おそらく、動きを止める魔眼ギアスで『古の雷』を五十回使うのと同じ程……絶対遵守の魔眼ギアスにいたっては……私では想像ができません」  
申し訳なさそうに、そう言うリーゼロッテ。

「……確かに『まつろわぬ神』と戦うには……かなり痛い消費量だな」

「はい……確かに、魔眼ギアスは戦局を左右できる程、強力ですが……魔力の消費量に見合うだけの戦火が得られるかどうか……」

「分かった。できる限り、使わないようにする」

「はい、才華様にとって、魔力は生命線なのでから、お願いしますね」

そう、本当に心配そうに言うリズに才華は笑顔でもう一度、

分かった

と、返事をするのだった。

「正直に言ってまずいな……」

そう、無意識のうちに口走ってしまう才華。小声、だったため、まつろわぬ神には聞こえていないが。

（この後、祐理とリズの方にいる、まつろわぬ神と戦わないといけないはずだから……魔力をできる限り温存していたのが仇になるなんて……痛い魔力の消費量だ）

「驚いたよ。神殺し……何をした？」

本当に驚いたように言う、まつろわぬ神。

そんな、まつろわぬ神に対して才華は不敵に笑って

「俺の切り札だよ、教えると思うか？」

そう言うのだった。

しかし、才華の心の中では

（事実問題……魔眼<sup>キアス</sup>が見破られることは……ほとんではないはずだから……態々教えてやる必要はない……まあ、仮にばれたら権能以外の能力でまつろわぬ神を傷つけることができなくなる可能性があるからな……ばれないでくれよ）

まったく、余裕などなかった。

「まあ、いいか。僕の有利は動かないから」

まつろわぬ神が再び、そう言うとな度は才華の左右から蔓が、襲いかかる。

『<sup>アクセル</sup>加速』

「また、それか？ 人間の言葉では馬鹿の一つ覚えという言葉があるように、まさにそれだね」



『荒れ狂う空、降り注ぐ稲妻 吠える剣』

再び、才華の腕に『虚空の雷刀』が握られるが『虚空の雷刀』は一本に対して、向かってくる蔓は二方向からやってくる。

才華に蔓が襲いかかる寸前に、才華は真上にジャンプする。すると、案の定というべきか、蔓は真上に追ってくる。

「はあああ！」

一方向になった蔓を、上空から真つ二つに斬り裂く。

才華の黒い瞳は、いつの間にか、紅く染まっていた。

「さあ、ここからが、本当の戦いだ」

## Episode 08 王の瞳（後書き）

感想をくださった | s a k i | さん、Tさん、いも犬さん、ありがとうございました。

後、これは宣伝なのですが、前々から考えていたISの二次作を投稿してしまいました（汗

タイトルはIS - unconscious - ある意味、私の話では異端となる原作主人公から女の子を略奪する話になります（汗  
良ければそちらも、この後、読んでいただければです。

では、次回更新は4月3日を予定しています。

そこでお会いしましょう。

## Episode 9 魔女の名

「お姉ちゃん……遅いね……」

あたしは今、先ほど、少し遠めのスーパーに特売の卵とお醤油を買いに行ったお姉ちゃんの心配をしていた。

「うん、静香、リズムちゃんも色々あるんだろう」

あたしの呟きに答えてくれる、おじいちゃん。でも、そういうおじいちゃんも、さつきから、異様にそわそわして見える。

そもそも、お姉ちゃんが、スーパーにお買い物に行つて、遅くなるなんてことは、今までなかった。いつつ、すぐに帰つて来て、おじいちゃんがしている夕飯の用意を手伝つてくれているから。

そんなお姉ちゃんが、今日に限つて、なぜか帰つてこない。

あいにく、お姉ちゃんは携帯電話を持っていない。

別に差別している訳でなくて、ただ、お姉ちゃんがいない、と言つたから。

お姉ちゃんはそれなりに電子機器を使えるけど、どうも電子機器を好きではないみたい。それに対称的に、お兄ちゃんは毎日のようにノートパソコンをかじりついているけど。

いったい……ノートパソコンで何をしているんだか、お兄ちゃん  
は。

「……ねえ、おじいちゃん」

「なんだい？ 静香」

「今度さ、お姉ちゃんに携帯電話を買つてあげられないかな？」

家計簿はおじいちゃんが持つていて見せてくれないけど、一応、草薙家の財政は大丈夫だった、と思つたから。

「もちろんだよ。僕も今、そう思つていた所だよ……それにしても

遅いね」

「うん……お兄ちゃんが遅いのはいつものことだけど……」

「一応、味噌汁を作り終わったら僕が見に行ってくるよ」

「……………まさか!？」

「どうしたんだい？」

「お姉ちゃん……お兄ちゃんが浮気したと思って……………自殺なんてことを考えていたんじゃない……」

「そうだ……昨日……万里谷先輩から電話がかかってきた時から、お姉ちゃんの様子が少しおかしかったような気も……」。

「……僕の経験上、リズちゃんは、そこまで追い詰められていないと思うけど……………。静香、味噌汁を見てくれるかい？　すぐに見に行ってくるよ」

「うん！　お願い。あたしは、馬鹿なお兄ちゃんにも連絡するよ！」

「そうだね。お願い。もしかしたら、才華と一緒にいるかもしれないしね」

「……………それならいいんだけど」

「そうだね。それじゃあ、行ってくるよ」

おじいちゃんは若干、急ぎ足で玄関に向かう。

おじいちゃんにとってお姉ちゃんは、もう、あたしと同じ位、大切な孫なんだろうな。

どうか、何もありませんように。

「まるで、今まで全力で戦っていなかったようだね？」

「そう聞こえなかったか？」

才華の言葉にまつろわぬ神は若干、眉を吊り上げる。

「僕を相手にしながら？ 手を抜いていたのかい？」

「そうだ」

「……人間に馬鹿にされたのは久方ぶりだ。よくも、馬鹿にしてくれたな！」

その声にもはや、先ほどまで、好青年を思わせる喋り方など、微塵もなかった。

それはまるで、激情を現しているかのようだった。

「本気で殺してやるよ！」

そういうと、まつろわぬ神は四方八方から才華に向かって、蔓を向かわせる。

先ほどとは違い、ジャンプするだけで回避するなど不可能だった。しかし、そんな攻撃を目のあたりにしても才華は焦ることなく、冷静に立っていた。

そして、右から来た蔓を右手に持った『虚空の雷刀』で斬り、後ろの蔓を前方に走って避けて、さらに、左から来た蔓対して、

「解放<sup>ヒート</sup>」

先ほど、自分に巻き付いた蔓を焼くのに帯電させた『虚空の雷刀』の残った雷を使い、焼き払う。

「うらあああああ！」

そして左から来た蔓と『虚空の雷刀』の雷を乗り越えてやって来た、まつろわぬ神の拳を才華は右手の『虚空の雷刀』で受ける。

「馬鹿な……先ほど、までとあきらかに、動きが違う！ 本当に手を抜いていたとでもいうのか！？」

「ああ、そうだって言っただろ？」

「なめるな！」

残った左腕で才華を殴ろうとする、まつろわぬ神の拳を才華は『まるで動きが初めから分かっていたかのように』避ける。

そして、当然、後ろから迫って来た蔓を虚空の雷刀で斬り裂いて防ぐ。

「……なんだ……この異様な感覚は……まるで僕の動きが読まれてい  
るような！ 煩わしい！」

「答えるかよ！ 『加速<sup>アクセラ</sup>』」

「それは、もう良い！」

才華に向かって突進してくる、まつろわぬ神。

それに才華は、まるで分かっているかのように『虚空の雷刀』を突きたてて

『<sup>エミット</sup>解放』

という。

すると、才華に向かって突進して来ていた、まつろわぬ神に、雷となった『虚空の雷刀』が襲いかかる。

「うがぁ!？」

さすがに完璧なタイミングで雷を受けたため、体中が焦げていく、まつろわぬ神。

それを才華は距離をとりつつ、観察する。

（『虚空の雷刀』を雷に変換した時の破壊力は『古の雷』より低い。それが効くということは……強力な防御方法があるということじゃないな……不意をつけたってことも考えられるけど……そんな安易に不意がつけたとは考えない方がいいからな、相手は仮にも『神』だから）

そんな才華の考えを肯定させるかのように、まつろわぬ神の体は焦げて焼かれていたのも関わらず……。

「……再生？」

まつろわぬ神の体は、元の綺麗な体に戻り始めた。

「ふう、今のも、なかなか、効いたぞ。さあ、続きを始めようか！」  
才華のとっていた距離を一瞬で詰めて、まつろわぬ神が才華に迫

る。

「……どんなチート使用何だよ！」

まつろわぬ神の拳を才華は避けつつ隙を見て、拳を叩き込もうとするが。

「いい加減あたれよ！ 神殺し！」

それを許さない程、まつろわぬ神の拳が才華の体に降り注ぐ。

「嫌だよ！ それ痛いだろ！？」

（でも、まずいな……今は避けれているが……確実に魔力をかなり消費しているからな……）

そんな才華の想いとは裏腹に、まつろわぬ神の攻撃は、激しさを増す。

（そろそろ……賭けに出るか……）

「はああああ！」

才華は掛け声と共に、まつろわぬ神に拳を叩き込む。

「あがつ！？」

今まで避けてばかりだった才華が捨て身の攻勢に出たことにより、一瞬、虚をつかれてしまったようで、もろに腹部の急所に入る。

そして、そのまま、三メートル程、飛ばされる、まつろわぬ神。

それに対して才華は、さらに追い打ちをかけるかのように、飛ばされているまつろわぬ神に対して、才華は瞬動で近づき、顎にアッパーをいれる。

「うつ！？」

そのまま、今度は上に吹き飛ばされる、まつろわぬ神。

そんな、まつろわぬ神の落下予測地点から、十メートル程の距離をとる才華。

そこで、才華は観察する。

落下した、まつろわぬ神は、『ふらふら』しながら、立ち上がる。その様は、あきらかにダメージを受けている様子だった。『古の雷』と『虚空の雷刀』から解放された雷を受けても、すぐに回復していた、まつろわぬ神が『ダメージを受けている』。

（……再生能力じゃない？ いや、それは、おかしい、確かに体が焦げた状態から、元の元気な状態に戻っていた。それなら……でも、何か引つかかる）

「よくもやってくれたな！」

才華に高速で近づくと、まつろわぬ神。ただし、その速度は先ほどとは、明らかに遅くなっていた。

（もしかして……）

『加速<sup>アクセル</sup>荒れ狂う空、降り注ぐ稲妻 吠える剣 虚空の雷刀』

再び、才華の右手に『虚空の雷刀』が握られる。

先ほどと同じように、まつろわぬ神が拳を放ってくるが、それに対して才華は『避けた』。

体を後方に飛んで。

そして、瞬動を使い一瞬で近付き『虚空の雷刀』で、まつろわぬ神の左手を少しだけ斬ってみる。

それを確認すると、それ以上、攻撃することなく、再び、瞬動を使い、まつろわぬ神から離れる。

まつろわぬ神はその傷を一瞬だけ気にした様子を見せたが、また才華を攻撃するべく蔓を発生させる。

しかし、才華は蔓に目を向けず、まつろわぬ神を観察していた。

（傷が治らない……傷が浅いからか？ 違う、もっと何かある……考える、俺）

目の前まで、やって来た蔓を『虚空の雷刀』で斬り裂き、さらに、『まつろわぬ神』から距離をとる。

（あいつと会話している時、あいつは何て言った？ よく思い出せ）才華は考える。

わずかな情報から、少しでも自分が有利になるために。

リーゼロツテと祐理の所に行きたい衝動を必死に抑えて。

考える。

「そつか……分かったぞ。おまえの名が！」



「あのね、あなたは 甘えているだけ」

「私は！ 甘えてなどいません！」

リーゼロッテの言葉を聞いて祐理は怒りだす。

そんな祐理をリーゼロッテは見下したような瞳で見る。

「どこが甘えていないとも言うの？ あなたは、ただ、才華様に甘えているだけ。昔あったことのある少年である才華様に」

「っ！？」

たじろぐ祐理を瞳の端でとらえつつ、リーゼロッテは、すっかり太陽が沈んでしまったあたりを見回して空を支配する暗闇を見てから言葉を発する。

「あなたは今の才華様を見ていない。昔の才華様を頼り、その残像を追いかけて、無意識のうちに今の才華様に重荷を押し付けようとしている。自分の意思と共に。今の才華様がどれほどの重荷を抱えているかもしれないで」

「え？」

「私も才華様の優しさに甘えているわ。だから、自分が才華様の重荷になっていることも知っている。だけど、才華様の傍にいます。才華様のことを愛しているから。そんな、私を才華様は受け入れてくれた。でも、あなたは違う、才華様が優しいことを知っていて、ただ利用しようとしているだけ、自分の生き方を肯定させるために」

「そんなことはありません！ 私は！」

「はあ、才華様から、昨夜、あなたのことを少しでも聞いていなければ殺していたわ。あなたの名前は万里谷祐理ね。どこか少し昔の私に似ている少女」

「……………え？」

そう言った時にリーゼロッテは立ちあがった。

「待ってください！ 話は終わっていません！」

「あなた、靈視の能力があるのに、気づいていないの？ それほど、余裕がなかったってことかしら？」

リーゼロッテが、そう口にした瞬間、公園の街灯が消える。

「気づいておったのか？ 人間よ」

街灯から光が失われたことによって、祐理は一時的に目が見えなくなる。

「あら、小さなお子様は、もう、寝る時間よ？」

突然、見知らぬ声がしたにも関わらず、祐理と話していた時の余裕さを失わずにリーゼロッテは声のした方に話しかける。

「っ！？ 神である妾<sup>わらわ</sup>を侮辱するか！？ 人間！」

目が暗闇に馴れてきて、相手を確認できるようになった祐理が見たのは、リーゼロッテが言ったように小さな子供だった。

歳の頃は、やっと小学校に上がったくらいの歳だろう。

普段の祐理ならば、早く家に帰るように促し、自宅まで送って行くことだろう。

しかし、今回に限っては祐理はそんなことを言いださない。

いや、言いだせない。

なぜなら、彼女の銀色の髪と赤い瞳から発せられる、それは人間のそれとは、あきらかに違う。

まるで、女王を思わせる。

いや、そんな言葉で表現するのも、傲慢に感じさせる。

もつと高位の存在。

そんな存在を人は女神<sup>めがみ</sup>としか表現する術を知らない。

彼女に比べればリーゼロッテに感じていた支配感など、ないに等しい。

それ程までに、小さな少女が発する気配は強力だった。

「この感覚は……サーシャ・デヤンスタール・ヴォバン……さまが呼び出された……まつろわぬ神に……似ている、でも、あの時のまつろわぬ神よりも……」

祐理の呟きを余所にリーゼロッテは自身の呪力を解放する。

「きゃっ!？」

その呪力を肌で感じて祐理は驚く。

目の前のまつろわぬ神には届かないが、確実に人間にしては異端と呼ばれても、おかしくない程の呪力の量。

むしろ、人の身にして、これほどの呪力を持っている方が、恐ろしく感じる。

その時、祐理の中に先ほど、リーゼロッテのはつした言葉がよみがえる。

彼女はこう言った。

私も才華様の優しさに甘えているわ。だから、自分が才華様の重荷になっていることも知っている。だけど、才華様の傍にいる。才華様のことを愛しているから。

一緒にいることが、他人の重荷になる。

そう思いなおした時に祐理は、何かが自分の中に入ってくるような感覚に見舞われる。

これは、祐理が、信託を授かる時、すなわち、霊視に成功した時に得られる感覚。

「姦淫の魔女………バビロンの魔女………バビロンの大淫婦………炎の魔女………色欲………虚無の………魔石」

次の瞬間、祐理の目の前にいる少女、リーゼロッテの見え方が変わったような気がする。

今まで分からなかった問題が突然、解けたかのように。

「ドイツで討伐されたはずの……世界……最狂……魔女」

リーゼロッテ・ヴェルクマイスター

## **E p i s o d e 0 9    魔女の名（後書き）**

感想をくださった、Tさん、ナッツさん、ありがとうございました。  
次回更新は4月5日を予定しています。

## Episode 10 クテシオスの雨

『お兄ちゃん！ のことなんて全然、好きなんだからね！』

画面から、その音声が流れてくる。

その前に三人の高校生がしがみつくようにして見ている。

もし、彼ら今の状況をクラスメイトの女子が見れば三人のことをゴミクズを見るような目でみていただろう。

それくらい、今の三人の顔は気持ち悪かった。

彼らの名前はテレビ画面の右から順に高木、名波、反町。

草薙才華のクラスメイトにして彼のことを師匠と慕う通称『三バ力』。

「きたきたきたきたあああああ！」

テレビ画面を見ながら、そう叫ぶ、二次元に百八人の妹がいると自分で言っている反町だ。

「反町！ 巫女さんの妹が出てきたら！ 変われよ！」

「俺は剣道をしている、という花井さんになったら変われよ！」

その叫びに、名波、高木が続くように叫ぶ。

「分かったぜえええええつ！」

『おうううううううつ！』

正直に言っただけ反町がこの頃、実の妹に『兄貴、キメエ、いつになったら死んでくれるの？ いや、ごめん、もう、兄貴とも呼びたくないから明日から『きも男』って呼ぶわ。そうそう、死ぬ前に、きちんと『きも男』のこずかいで保険金かけて死んでね』と言われるようになったのは間違いなく、このような奇怪な行動を両親や妹がリビングで食事をとっているというのに行っているからだろう。

近所迷惑になっているのに、両親が注意しにこないのは両親の最

後の優しさだろう。

この時、リビングで反町の妹はもちろん、『はあ、ホント死ねばいいのに。こんなんじゃ、家に友達を呼べないじゃん』と言っているのだが。

それを反町は知る由もない。

いや、ある意味、知らない方が幸せだろう。

ちなみに、そんな妹の言動を聞いた両親は『ごめんね……』と妹に寂しそうに告げたのだった。

もちろん、これも、また反町にとっては知らなくて良い現実だろう。

「うつほ エミちゃああああん、僕ちゃんが、お兄ちゃんですよおおおおおおおつ」

『反町やったな、これで、おまえは二次元に百九人の妹を持つ男に進化したぞ！』

同士の言葉に歓喜して、エンディングを見ようとした時だった。プチンと、いきなり、電気が消える。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ!? エミちゃあああああああああああん!？」

同じように電気が消えたりリビングで『きも男、マジできめえ……』と妹が言ったは言うまでもなかった。

負けるな、きも男。

泣くな、きも男。

死ぬな、きも男。

君を待っている妹が、まだまだこの世界には、いるはずだ。  
負けるな、きも男。

進め、きも男。

同士と共に生きる、きも男。

例え、停電になってセーブデータが消えたとしても。

もはや、君に現実の妹は甘い言葉を言ってくれないとしても！

後に、同土<sup>へんたい</sup>達は語る。

セーブデータが消えたため、二回目のプレイだったというのに彼は一度もスキップボタンを押さなかった、と。

彼は真<sup>ま</sup>の勇者<sup>ばか</sup>だ、と。

また、エンディングに入ろうとした時に停電になることを今の彼らはまだ知らない。

勇者<sup>へんたい</sup>反町の『お兄ちゃん！ のことなんて全然、好きなんだからね！』攻略記は、まだまだ続くのだった。

彼は二次元で『百九人目』の妹をつくることができるのか！？  
続かない。

「そうか……分かったぞ。おまえの名が！」

才華のその言葉に、まつろわぬ神は眉をひそめつつも、冷静な声で「それがどうしたというのだ？」

と、逆に聞き返してくるのだった。

「いや、これで、俺は勝てる」

「はあ？ 神殺しよ、頭がいかれたか？ 僕は神殺しに名を隠すどころかヒントをだしていたんだぞ？ 今更、名が分かったとして、何ができるというのだ？」

「いや、これで、俺の勝ち<sup>勝ち</sup>は決定した。今から、それを証明してや



るよ！」

そう言った途端に才華は、まつろわぬ神に向かって走り出した。

「そんな単調な特攻が通用するとも思っているのか!？」

そんな、まつろわぬ神の言葉を余所に才華は走る。

「通用する! 『古の雷』!」

才華は呪文を一切、唱えずに魔法を発動させた。

これは確かに呪文を唱えない分、遥かに早く、魔法を発動させることができる。

しかし、呪文を唱えた時と同じ量の魔法を使っているというのに、その威力は三分の一位までに落ちてしまう。

もっと才華が魔法を使いこなせていれば威力を落とさずに使うこともできるのだが、あいにく、今の才華にはそれは無理だった。

「ちっ!?! 小賢し!」

才華の雷を、まつろわぬ神は前方に蔓を発生させることによって、防ごうとする。

しかし、蔓を生み出すよりも早く。

「ぐっ!?!」

まつろわぬ神の腹部に何か刺さる。

「神魔剣・ディアボロ・ロッソ（紅の悪魔）」

それは金色の髪で紅いドレスを纏った少女、エリカ・ブランデッリによる奇襲だった。

「俺は大切なモノがかかっている時、正義の味方じゃないし正々堂々の勝負もしない。でも カンヒオーネ それでも、命をかけて大切なモノを

守る。それが俺の詐欺の理由だ! 勝たせてもらうぞ! 豊穰・葡

萄酒・酩酊の神」

## ディオニユース

「ふう、何とか、行き残ったわね。才華。でも、もう少しスマートに避けてくれないかしら。心臓に悪いわ」

才華とディオニユースとの戦闘が始まるとすぐに、エリカは二人から少し離れた場所まで避難した。

例え、才華でも、必ず、まつろわぬ神に勝てる訳じゃない。

だから、エリカは才華が本当に危なくなった時や、勝つための勝機を作る時のために一時、身を隠した。

これは、どれだけ、人間に強力な力があるとも、それより強大な力を持つ、まつろわぬ神の前では一瞬で潰されてしまいかねないからである。

今、エリカの両手には愛剣である紅姫とクレオ・ディ・レオーネが握られている。

それから、ひたすら、エリカは好機を待つ。

例え、才華が怪我をさせられても、唇を嚙んで出て行かずに我慢する。

すると、遠目からでも分かる。

「才華の瞳が紅くなった……………あれが才華の言っていた切り札である『魔眼』……………」  
ギアス

才華は事前にエリカに対して自分の瞳が魔眼であることを告げている。

それも『まつろわぬ』存在にも使える程、強力な力を有していることも。

「今、才華が使ったのは恐らく……………相手の体感時間を止める魔眼。  
ギアス 私には、まだ隠れていて欲しいということね。切り札を使っても

私を隠していたかったんだから」

それから才華の戦闘は圧倒的なモノになった。

「……………あれは、おそらく未来を見る力……………あれだけの魔法を使った後での魔眼ギアスの連続使用……………才華、大丈夫かしら……………ダメね、彼を信じないと」

エリカは、愛剣を握る力を強める。

そんな時だった才華は言った。

まつろわぬ神の名が『ディオニューソス』だと。

「ふふ、これだけエリカ・ブランデッリを待たせた男は才華が始めてね」

エリカは上機嫌で言霊を紡ぐ。

それはエリカの呪力（魔）と才華の神力（神）を合わせるために。

我は『王』に仕える騎士

否、私は『王』の隣に立って『王』を支える『姫』

『王』を愛し『王』から愛される者

我が名、エリカ・ブランデッリの名において命じる

神魔の力を我が手に

言霊が終わる時、エリカ・ブランデッリの右手には大剣が握られていた。

「わたし達の愛の力を思い知るといいわ。デイオニューソス」  
そう言いつつ、エリカはデイオニューソスに向かって大剣を投げる。

「神魔剣・ディアボロ・ロツソ（紅の悪魔）」

エリカのいる方を見てデイオニューソスが叫ぶ。  
「くっそ！ 人間だと！？ 我らの決闘に水をさして！」

「悪いな、元から、俺はおまえと決闘する気なんてないよ。それにディオニューソスも言ってただろ？ 自分は時間稼ぎだ、と」

「っ！？ こんなモノ！」

ディオニューソスの腹を感通して地面に突き刺さっている神魔剣・ディアボロ・ロツソ（紅の悪魔）無理やりぬこうとするも、後ろから突き刺さっているため上手くいかない。

「あんたは、ゼウスとテーバイの王女であるセメレーの子だった。

一見、ゼウスの子供だから祝福されて生まれるかと思われるが、それは大間違いだ。既にゼウスにはヘーラーという妻がいたんだから」

「神殺し！ なぜ、僕の過去を言葉にする！ そんなこと分かりきっている！」

自身の過去を言われて怒りをあらわにするディオニューソス。

「ゼウスの妻だったヘーラーは夫の浮気相手であるセメレーを憎んだ。そして、セメレーをそそのかして、雷電らいでんを持つ、本来の姿のゼウスと会わせ、その光輝で焼死させてしまう」

「そうだ！ それで、臨月が来るまで僕は父さんの腿の中に埋め込まれた！ これ以上、僕を辱めるなら容赦しないぞ！」

ディオニューソスは地面より蔓を発生させ、才華を襲わせる。

「この蔓を操る能力は、ワインに関わっている。おまえはその昔、葡萄ぶどうを使ったワインの製法を人間に教えた。しかし、その教えた人間がワインを作り他人に飲ませると、飲まされた人間はワインを毒だと勘違いして、ワインを作った人間を殺した」

「それを知っているなら、人間がいかに愚かか、貴様も分かっているのではないか！？ 私はあやつらに礼のつもりでワインの製法を教えた。それが……彼らを殺すことになるうとは……」

才華はディオニューソスの言葉を余所に、さらに言葉を続ける。

無情にも。

「なぜ、おまえがワインの製法を人間に教えたかというと、おまえが農耕神だったことに関係する。これは、おまえが俺の攻撃を受けても平気でいられることにも関係する。おまえはかつて農耕神で

あることが反映して、死と再生の神という面をも持つ」「……………それがどうしたっ！」

ディオニューソスの操った蔓が才華の目の前まで染まるが才華はそれを冷静に避ける。

「おまえは俺の魔法で死と再生を繰り返していたんだ」

「分かった所で！」

そこで才華の言葉が変わる。

いや、才華の纏っている雰囲気が変わると言っても過言ではない。

「……………なんだというのだ？」

それが、貴様の来歴

我は神を殺した

我は神を恐れぬ、悪魔を恐れぬ

我の前に立つ何人たりとも我を殺すことはできぬ

我は望みを叶える、そのために力が必要だ、我に力を

神をも悪魔をもうち滅ぼせる最強の力を

我の前に跪け

さすれば我は貴様の願いを叶える

我は財産を守る者

それは我が知恵の力

才華がそれを唱え終わると突然、雨が降る。

それが地面に当たると黄金に輝く木が現れる。

それも一本や二本ではない。

水滴の数と同じだけ。

あたりをあっさりと覆い尽くす程の数の黄金に輝く植物。

「これは……オーク、しかし、本物ではない……」

「俺の権能である『天空の掟』の一つ。『財産の守護者の雨』」

「そうか……道理で……父さんの聖木はオーク……さらにオ

ークは家具や床に使われる木……まさしく財産という訳か……」

「それだけじゃな……だけど、これ以上は時間がない。すまない

一撃で決めさせてもらう」

「世迷言を僕は死なない！」

体に才華が生み出したオークが巻きつき満足に身動きが取れなくなつた状態でもディオニューソスは余裕の表情を見せた。

それは死んでもすぐに蘇るから。

「俺がなんで態々、おまえの来歴を明かしたと思う？」

「え？」



才華は成長し始めたオークの木々を操ってエリカの神魔剣・ディアボロ・ロツソ（紅の悪魔）を手取る。

「終わりにしよう、ディオニューソス。おまえはもう、死と再生の力を持っていない」

「なにっ!？」

エリカの神魔剣・ディアボロ・ロツソ（紅の悪魔）が才華の魔力を得て、木々達と同じように黄金に輝く。

「せめてもの情けだ。一撃で決めてやる」

そう言つてオークに捕えられたディオニューソスの元に飛ぶ才華。  
ライトアンドダークネス  
「神魔混合剣」

## Episode 10 クテシオスの雨（後書き）

感想をくださった、いも犬さん、Ji3、Tさん、ありがとうございました。

次回更新は4月7日の予定です。

「あれ？ どうしたんですか？」

「ああ、明日香ちゃん」

私がファミレスでのバイトを終えて家に帰ろうとしている所で会ったのは小さい時から良く遊んで才華のおじいさんの一郎さんだった。

いつもは、なんというか、余裕を持って行動いる、おじいちゃんだけど、なぜか今日は、余裕がないように見える。

才華のおばあちゃん、つまり、一郎さんの奥さんがなくなった時にもなかった。

必死さだと思う。

たぶん、あの時は私達の知らない所で泣いていたんだと思うけど。

「明日香ちゃん、リズちゃんを見なかった？」

「え？ リーゼロッテさん？」

リーゼロッテさんというのは才華がドイツ旅行の時に連れ帰った少女のことだ。

当時の私は、才華のことでリーゼロッテさんと喧嘩したものだ。

……主に私がリーゼロッテさんに嫉妬して。

でも、今では同じ商店街に住む年頃の女の子では一番仲の良い友人だ。

リーゼロッテさんは昔から才華を神のように崇めているふしがあるから、おそらく、私が才華のハーレムに入っても……って！？ 私、何を考えているのよ。

私は才華のことを何とも思っていないんだからね！

ただ、同じ商店街に住む幼馴染……………で昔から将来の夢はハーレムを作るっていう変な子……………でも、困っている時のフラッて現れて助けてくれる……………し、なんやかんやで優しいし……………と、今はそれよりも。

「リーゼロッテさんが、どうしたんですか？」

「いつもは、寄り道もせずに、すぐに買い物から帰ってくるんだけど、今日に限って……………帰って来ると言っていた時間から一時間経っても帰ってこないんだ……………」

……………一時間って。

普通の高校生なら……………それくらいなら……………

……………でも、リーゼロッテさんなら、ありえないわね。

才華に関係のない事柄には一切、興味を示さない彼女だから。

「それは心配ですね」

「そうなんだ」

「ちよつと待つてくださいね」

私は私の実家と馴染みの魚屋さんの店に入る。

私の実家は寿司屋なんだ。

今度、良かったら来てね。

と、私、何言っているんだろう。

「おじさん」

「おお、明日香ちゃんじゃないか？　お、それに一郎さんも珍しい組み合わせだね」

「ここをリーゼロッテさん通ってない？」

「リズちゃんが？　どうしたんだい？」

「いやね。帰ると言っていた時間から一時間も帰って来ないんだ」

「なんだって！？　一郎さん、一大事じゃないか！？　店なんてしている場合じゃない！　おい、おまえ！」

魚屋のおじさんは奥で休んでいた、おばさん呼びだす。

「どうしたんだい？　あんた、って一郎さんじゃないか、いらっし

「やい」

「それより、一大事なんだ、リズちゃんが家に帰って来ないじゃないらしいんだ」

「なんだって！？ それは一大事じゃないか！？ なんで早く言わないんだよ！ あんた、店番は頼んだよ！ 一郎さん、明日香ちゃん！ 行くよ！」

そう言って店を飛び出すおばさん……………おじさんよりリーゼロッテさんを可愛がっていたからね……………

その後、リーゼロッテさんが良く行く商店街の店に入って行くおばさん。

そして、リーゼロッテさんが行方不明って伝えたと『そりゃあ、たいへんだ！？』とか『探すぞ！』とか言っただけで皆で商店街、総出での大操作が始まる。

正直に言っただけ、もう、警察に届けた方が……………と、思っただけ、

警察よりも真剣に探している。

リーゼロッテさんも愛されているんだな。

ちょっと羨ましいかな。

どうか、無事でいてリーゼロッテさん。

そういえば、こんな時に何で才華がいないの？

リーゼロッテさんがいないって才華が知れば、死んでもリーゼロッテさんを探し周ると思うんだけどな。

「…………その呪力…………確かに人間にしてみれば、最強クラスだろうが、妾<sup>わらわ</sup>に対しては無意味じゃ。おとなしく『蛇』を渡せ」

私の前で冷静にそう言う少女。

それに対してリーゼロッテは相変わらず少女を見下したように「はっ、これは才華様のモノよ。誰があなたのようなクズに渡すものですか？ あなたに渡す位なら捨てた方がマシ」

そう言います。

そんな二人のやりとりを私はリーゼロッテの後方で見ています。正直に言って私は、今、この状況で何をすればいいか分かりません。

逃げて私の足では、逃げ切れませんし、例え、最狂の魔女でも『まつろわぬ』存在である少女に勝てるとは思いません……………ですから、私は自分の直感、すなわち、霊視に頼ることにします。

けれども、私の霊視はそんな都合良く使えるものではありません。

私は『まつろわぬ』存在の遺物である、メダルを胸の所で握って何かみえるのを待ちます。

その間も、少女とリーゼロッテさんは睨み合います。

「やめようか、貴様が待つている神殺しはここにはこないよ。私の古き知り合いが彼を足止めしてくれているから」

「っ！？ 才華様の元にも、まつろわぬ神が！？」

「そう言ったつもりだが？」

何でもないように言う少女だけど、それとは対称的にリーゼロッテはあからさま、動揺した。

おそらく彼女は…………才華君の知り合いなのだろう。

いえ、学校で才華君の隣に立っていた彼女も、先ほど私が話していた彼女も、少女と対峙している彼女も、全て同じ最狂の魔女、リーゼロッテ・ヴェルクマイスターなのですから、当たり前ですが…

……  
「では、あなたにかけている時間はないわね」

「それは強者が弱者に言うことだ。妾を相手によくもぬけぬけと」  
そうです……

いくらなんでも

「ふん、これだから低能な神は。私は才華様に教わりました。人間は『守りたいモノ』がある時、どこまでも強くなれるのですよ」

「そんなモノ、誰でもあるだろう？」

「いえ、違うわ。人は友を守りたい、民を守りたい、場所を守りたい、などと確かに明確なことを言うわ。でも、ね。違うのよ、本当に守りたいものは」

「それは？」

興味深そうに少女はリーゼロッテに聞く少女……私も知りたい。  
「あら、自分で考えられないの？」

……私も知りたい、リーゼロッテの、いえ、才華君の答えを。

「ふん、いいではないか？」

「傲慢ね。でも、そういうのは嫌いじゃないわ。いいわ。私が大切にしているのは『思い』よ」

「………どういうことだ？」

「私は家族を守りたい、才華様を守りたい、支えたい、傍にいて愛してもらいたい。その思いを大切にしているの。その思いを守るために戦っているわ」

「それは、先ほど、貴様が言っただけ、友を守りたい、民を守りたい、場所を守りたいと、どう違うのだ？ 同じでないのか？」

「そうだから、あなたは『まつろわぬ』なのよ。あのね。人間は思いで生きている。その思いがなくなると、すなわち、戦えなくなるわ」

「………そういうことか」

つまり………

「私は才華様と共にいたいと思い、それを守るために思いで戦う。」

私達は思い！ それを実行させるために戦う！ それはつまり、思いの戦い、自分の意思の戦い。それが才華様と共にいて思ったこと、これは私の思いを通すための戦い！ 守れた結果は行動した後についてくる！」

そうか……私にはこれがなかったんだ。

姫巫女に生まれたから、好きな人と一緒になれない。  
勝手にあきらめていた。

多くの民を守るために私は犠牲になる。  
本当は死にたくない。

怖いけど、誰かがやらないといけないから。  
ただ、皆から見捨てられないためにしていた。



ずっと昔から諦めていた

そこに思いなどあるはずがない

わたしはただ、教科書の通りに生きてきた

でも、それじゃあ、ダメだったんだ

彼は変わった

暖かな彼から

優しい彼から

『王』に

自分の思いを貫きとおす

きっと私はそんな彼を見たくなかったんだ

全てを諦めきった私と対極の彼を

まるで……私だけが時間に取り残されているように思えたから

でも、違う、彼は根本的な部分では変わっていない

そう彼は人を導いてくれる

一人でいた私を両親の元に導いてくれた

そして、今

彼はリーゼロッテを導き

その導かれたリーゼロッテが私を導く

そんな彼だから私は

彼を

今なら分かる。私は震えている。  
体もだけど、心も。

私は初めから、でも、今は違う。  
ゆっくりと、ゆっくりと。

前へ。

唇をかみしめる。

雲で覆われた暗い空を遠くに見ながら。  
ゆっくりだけど。

前へ。

私など一瞬で殺せる二人が対峙している元へ。  
瞳にたまる涙など、気にせずに。

私の思いを貫き通すために。

リーゼロッテさんのように。

すぐには、できないけれど。

私は今、逃げたくない。

春先だというのに、体が寒い。

だけど、だけど。

言いたい。

前に進み。

今、今、今。

今、言わないでいつ言うの。

私も彼のように。

私も才華君のように。

前へ。

「何をしているの!？」

リーゼロッテさんよりも前に。

一步、一步、また一步。

「何をしている人間？」

まだ、一步。

昔の私と、今の私を区別するために。

昔の彼に導いてもらった私と。

今、本当の意味で導いてもらった私を区別するために。

ふふ、いつも、私は迷子ですね。

それを救ってくれたのは、いつも、王子様。

物語のよう。

昔、読んでもらった。

「あなたは間違っています！」

「何を言っている？」

「私も間違っています！」

「は？」

少女は首をかしげます。

分かっています。

これは私の自己満足。

「私達は間違っていました」

「あなたは何を……」

背後からリーゼロッテが話しかけてくれます。

ありがとう、あながのおかげで彼に導かれた。

「だから、私は言います！ アテナ、あなたは間違っています！」

あなたがこれを手に入れて、しようとしていることは！」

私の霊視が告げています。

「貴様……いや、人間、貴様の力はまさか………霊視」

「危ないっ!？」

後ろからリーゼロッテが後ろから叫んだ瞬間、アテナは私の目の前にいて……私の心臓にめがけて手を……

「私の目的を知られた以上、死んでもらう」  
「いやっ!？」

咄嗟に目をつむってしまふ。

だけど……後悔はない

だって、初めて本当の意味で自分の思いを守ったんだから

嘘

本当は彼に

もう一度、会いたいな

だけど、わたしは………

もう………

おかしい



いつまで経っても痛みはこない

恐る恐る、目を開けると……………そこには……………

アテナの手で心臓を貫かれた……………才華君が……………

「何で？」

「間に合って良かった。祐理……………」

霊視を持っているから分かる。

確実にアテナの手は才華君の心臓を貫いている。

そして、才華君の心臓から伸びた手で私の手から『まつろわぬ』  
遺物を奪っている。

見たこともない量の紅い液体が彼の体から流れ出る。

彼の顔はとても優しそうで、霊視ができなかったら、私は目の前  
の状況が理解できなかっただろう。

でも、この時、ばかりは私は自分の霊視が外れて欲しいと思った。  
私の霊視が告げる。

それははつきりと。

心臓を貫かれた先に待っているのは……

死

「いやあああああああああああつ!?!?」

**E p i s o d e 1 1    新たな一歩、その先に……（後書き）**

次回更新は4月9日を予定しています。

## Episode 12 王は迷わず（前書き）

いつも皆様にお世話になっている翼です。

この度は、感想の返信に関して少し、お知らせなのですが、申し訳ありませんが今後（約一年くらいの間）返信が必要だ、と判断した感想（この判別は私の独断と偏見で行わせていただきます）以外は申し訳ありませんが返信を控えさせていただきます。

主な理由ですが感想を書いてくださるのは、とても、とても嬉しく、執筆する励みになるのですが、現在、私はリアルで多忙な日々を過ごしております。

執筆にとれる時間が少ないのが現状です。

ですので、苦肉の策としてリアルで多忙が続く今後、約一年くらいは、このスタイルでいかせていただきます。

いつも、感想を書き込んでくださっている皆様には大変失礼なことだと承知の上でさせていただきます。

申し訳ありません。

ご理解の程、よろしくお願いします。

最後になりましたが、今後もよろしくお願いします。

## Episode 12 王は迷わず

「終わった……………」

俺は前のめりに倒れてしまう。

「才華！」

それを跳躍の魔術を使って俺の所まで来てくれたエリカが支えてくれる。

「ふん、僕に勝った癖に情けない」

今、俺の目の前で消えようとしているディオニューソスが忌々しそうに俺に呟く。

「何だ、まだいたのか？」

「……………神殺し、本当の僕を殺したとは思わないことだ」

「は？ ということだ？ 本当にやない？」

「そうだ。僕は『単一』の『まつろわぬ』ディオニューソスだ」

「単一？」

「そんなことも知らないのか？ 僕たち神は色々な神話の集合体とも言える。例えば、僕ならローマ神話のバックスと同一視することがある。しかし、僕にはそれがまったくない。本来なら『単体』になることなどないはずなのに」

「それが、どうしたんだ？」

「ふん、後はその女にでも聞けば良い。僕は消える……………仕方ないから認めてやるよ。オリュンポス、ディオニューソス。ここにかの神殺しを父なる神の神殺しであることを認める」

それだけ言い残して光の粒子にその姿を変えるディオニューソス。  
「エリカ……………どうということだ？」

分からない。

だから、俺はエリカに聞く。

「分からないわ…………でも、本来ありえないことが起こった…………  
考えられるとすれば、才華の権能に惹かれて来たんじゃないかしら  
？」

「俺の権能に？」

「ええ、まだ、推測の域だけど、もしかしたら、才華はオリュンポ  
スの神を呼び寄せてしまうんじゃないかしら？　それで、才華、あ  
なたの中で権能は増えた？」

「いや、増えていない…………俺がエリカに手伝ってもらったからか  
？」

「いえ、違っわ…………おそらく、あのディオニューススが『単一』  
のまつろわぬ神だったから、本来よりも弱い力しかなかったからじ  
やないかしら？」

あくまで推測だけだね、と付け足すエリカ。

「そうだ。リズと祐理の所に行かないと…………すぐに転移を…………  
そう言った俺の頭をエリカが叩く。

威力的には撫でると言った方が正しいのかもしれないけど。

「あのね。才華、自分でも気づいていないの？　今、あなたの中に  
ある魔力、普段の四分の一もないわよ？　そんな状態で転移魔法を  
使ったら、もう一体のまつろわぬ神と戦えないじゃない」

「でも……………」

「アリアナを呼んであるわ。車で行きましょう。もちろん、才華  
に拒否する権利はないわ。それとも、あなたが言うリズさんは信用  
できないのかしら？」

「大丈夫、信用できる」

「それなら少し、アリアナが来るまで休みましょう」

そう言って俺をベンチまで運んでくれるエリカ…………よく生き残  
れたな、このベンチ。

あたりは俺の『財産の守護者の雨』<sup>クテシオス</sup>によって呼びだされたオーク  
とディオニューススが呼びだしたぶどうの蔓で、ぐちゃぐちゃなの  
に…………

「ふふ、こんな時に不謹慎だけど、やっと、わたしが主導権をとれたわ」

「……………弱っている所を狙うなんて卑怯だぞ……………」

「やばい、エリカをからかう気力も残ってない。」

「……『財産の守護者の雨』<sup>クテシオス</sup>を使わなかったら負けてたし……………」

『天空の掟』で今、俺の使える権能が二種類だけなのが痛い……………」

「そう言っても、どうやったら後の二つが使えるようになるか、まったく分からない現状じゃ、どうしようもないけど。」

「まあ、きつと、ピンチになれば主人公補正<sup>しゅせい</sup>で使えるようになると思うけど。」

「できたら、ピンチになる前に勝ちたいよ……………」

「ふふ、いつも、わたしを良くもからかってたわね。今日はいつもの仕返しよ」

「んっ!？」

「エリカが自分から俺の唇を自分の唇で塞ぐ。」

「顔は真っ赤だけど……………」

「ほら、体に力を抜いて」

「俺の手を握ってくるエリカ……………」

「……………エリカ……………今は……………」

「あら？　今は足がないんだから仕方ないじゃない。何もしないで焦っているよりも、こうしていた方が有意義じゃないかしら？」

「むう、確かに……………」

「でも、なんかリズと祐理に悪いような……………」

「ほら」

「エリカの舌がエリカの体液と共に俺の口の中に入ってくる。」

「俺がエリカの喜ぶポイントを知り尽くしているのと同様に……………」

「あ、んっ!？」

「エリカも俺の喜ぶポイントを知り尽くしている。」

「……………ほら、肩の力を抜きなさい。このエリカ・ブランデッリが奉仕してあげる」

やばい、不謹慎だけど、興奮して来た……このまま押し倒したい。

幸いなことに周りに人はいない……

あれ？

周りに人は……

メイド服を着た誰かが……

彼女の顔を見た瞬間に今までの興奮が一気にさめてしまう。

俺はエリカの肩をそつと掴んで俺から離しつつ、エリカの後ろで  
アリアンナ  
鼻息を荒くして撮影している馬鹿な使用人に声をかける。

「仕事しろよ」

「もう、アリアンナ、本当にタイミングが悪いわね、っ!？」

「ほら、何も言うな、ぐっ！？」 舌嚙むぞっ！？」

毒づくエリカを宥めつつ、首都圏に向かって爆走する車の車内でエリカと抱き合いながら衝撃を抑えている。

正直に言って今回はこの爆走のおかげで助かっているんだけど……

今度から絶対にアリアンさんの車を頼るのはやめよう。

そうだ。

転移できる札があれば楽だよな。

陰陽師が使っているような。

これが終わったら絶対に作ろう。

うん。

もう、アリアンさんの運転する車に乗るのはっ！？

キイイイイイイと言つ音を立てながらカーブを曲がるアリアンナさんの車……これってドリフト！？



マリカー以外で初めて見たよ！

てか、現実の普通の道路でして良いのか！？

「エリカ……………」

「言わないで……………それに、アリアンナが車の免許をとったのは日本よ」

……………おそらく、日本の教習所で車を運転している最中、隣に乗っていた教員がアリアンナさんのあまりの激しすぎるドライビングテクニックに気絶してアリアンナの運転が安全で快適なものだったと錯覚したのだろう。

それくらいの拒否反応が起こっても仕方ないくらい、ひどいっ！そんな運転だから、アニメのように人格が変わったりしているのかと思いきや、おもつきりいつもと同じ状態で鼻歌を歌っているんだから、アリアンナさんが大物だと再認識する。

正直に言って、強すぎる……………

絶対、法廷速度を守ってないよ……………と、思いきやギリギリ、本当にギリギリのラインで守っているからな、この仕事しないメイド……………

その上、エリカ曰く今までに車での事故を起こしたことがないのだとか……………

もう、彼女に神様が宿っているとしたか思えない。

メイドをやめてレーサーになることをお勧めするよ。

きつと、あんたなら世界をとれるよ。

仕事しないメイドさん。

「……………才華……………生き残っている？」

「……………ああ、何とか」

ちょうど、首都圏に入ったあたりで、突然、車が止まった。

あたりをしてみると他の車も全て止まっているところか、あたりが真っ暗だ。

「……………大規模な停電？」

「……………そんな訳ないじゃない……………停電なら車のライトが消えるはずないわ。車は別の動力で動いているんだから」

そう、車のライトや信号が消えてしまっているため危なくて走れなくなっただ。

俺的には生きてるって素晴らしいなって実感した所だけど。

「仕方ないわ。ここからは徒歩で行きましょう」

「でも……………」

「大丈夫、私が跳躍の魔術を使って才華を抱えて飛ぶわ。そうすれば、少なくとも才華の魔力は温存できる」

「ありがとう」

「ええ。その代わり、このエリカ・ブランデッリにそこまでさせるんだから、今度デートしてね」

「そんな嬉しいイベントなら喜んで」

「了承したわね。絶対よ。アリアンナは危ないから、安全な所に避難して。くれぐれも私達の後を追わないでね。この暗闇の中心部におそらく、まつろわぬ神がいるわ」

「分かりました。エリカ様」

「じゃあ、捕まって才華」

「ああ」

俺はエリカにおんぶされる。

後ろでまた、仕事をしないメイドが『きゃあああああ』とか叫んでいたけど無視だ。

それにしても……………これ若干恥ずかしい。

それに……………エリカの首元ってなんか、良い匂いがある……………女の子の独特な匂いなのかな？

リズと抱き合った時も、甘い香りがするけど、やっぱり一人、一

人違うんだな。

「ほら、もつと強く抱きついて」

「あ、ああ」

ダメだ！ こんなことで動揺していたら、ハーレムを作ることなんてできない！

とりあえず、今はエリカに言われた通りにしよう！

ぎゅ！ と抱きつくと……………

「いゃん」

うおおおおおおおおおおおおおおおお！

エリカのむ、む、胸をおおおおおおお。

「さ、才華……………こんな所で、やめて……………ほら、行くわよ」

「はい、ごめんなさい。柔らかかったです」

「もう！ 行くわよ！」

そう言って跳躍の魔術を使って走りだすエリカ。

目指すはリスと祐理のいる所を。

でも……………今日は戦いが終わっても興奮して眠れそうにないです。

「危ないっ！？」

リーゼロッテの叫びが公園に響く。

才華とエリカがリーゼロッテと祐理の元に辿り着いた時に目に入

つて来た光景は……リーゼロッテがまつろわぬ神と戦っている風景ではなく、祐理がまつろわぬ神とリーゼロッテとまつろわぬ神の中間の所に立って啖呵をきっている所だった。

「エリカ！」

才華はエリカの背中から飛び降りる。

エリカが『待ちなさい！』と言う制止の言葉を口にするも才華は止まらない。

今までにない程の速度をだして

「私の目的を知られた以上、死んでもらう」

そんな言葉が聞こえてくるが気にしない才華。

（くっそ、俺が……あの時、祐理にメダルがとられた時に無理矢理でもとりかえしていたら……悩むのは後だ……間に合ってくれ）

才華が祐理とまつろわぬ神の間に何とか体を潜り込ませた直後、

彼に待っていたのは……心臓をえぐられる感覚だった。

「いやあああああああああつ！？」

祐理の叫びがあたりに鳴り響く。

あたりに彼らを照らす光は残されていなかった。

## Episode 12 王は迷わず（後書き）

次回更新は4月11日を予定しています。

## Episode 13 再び

人はなぜ、自分を犠牲にしてまで大切なモノを守るのだろうか？

本当に大切なのだろうか？

それとも、偽善で行うのだろうか？

残されたモノがどんな思いになるかも知らないで

自分勝手に

それでも時が来れば人は大切なモノを守るために犠牲になる

己の思いを守るため

空は暗い

どこまでも暗い

星の一つさえも見えない

それでも

人は

否<sup>いな</sup>

生きとし生けるモノは生きなければならない



例え、それが偽善で守られたモノだとしても

なぜなら、守られたモノは生きているから

己から生きることが諦めてはならない

諦めることは死者への冒流<sup>ぼうりゅう</sup>だから

それが生きるモノのたった一つの義務だから

未来を諦めてはならない

例え、どれだけ今に絶望したとしても

空が暗くとも

どれだけ、朝が来なくとも

見えなくとも星は輝いているのだから

生きるモノを見守るために

だから

我々は生きなければならぬ

「いやあああああああああああつ!？」

祐理の叫びがあたりに響く。

一瞬、時が止まったかのような時間が彼女達を襲う。

しかし、次の瞬間。

「消える!」

先ほどまで、アテナがいた場所に向かって特大の緑色の炎が放たれる。

そう、先ほどまで。

アテナは既に祐理の手からメダルを奪い。

一度、後退していた。

そして、遅れて来たエリカ・ブランデッリは草薙才華を抱きかかえると後ろに下がる。

「あなたが、リズさんね！ 才華から聞いているわ！ あなた、回

復の術に心得は！？」

「ないわ！　お願い」

「分かりました！　わたしが回復の術をかけている間に、あれを足止めしてください！」

「分かっているわ！」

未だに覚醒しきっていないアテナに向かってリーゼロッテはもう一度、両手に特大の緑色の炎を作りだすと

だんざい　ほむら  
「断罪の焰」

アテナに向かって放つ。

それと同時にエリカは声をあげる。呆然と立っている祐理に向かつて。

「その、あなた！　こっちに来て！　少しでも光を生み出す魔術を使ってこのあたりを、照らして！」

それは才華の状況を詳しく調べるために

「む、無理です！　あそこにいるのは、強力な闇の属性をも持つ、最強クラスのまつろわぬ神、アテナです！　私程度の術が……」

「できるかできないかを聞いていないわ！　しなさい！」

エリカの顔に余裕はない。

正直に言つて才華の使える権能をエリカは把握している。

『一族の守護者』と『財産の守護者』のみである。

それも、どちらも強力な攻撃の権能。

死の定めから逃れるための権能ではない。

必死な思いでエリカは才華の唇に自分の唇をあてる。

それは、別にやましい気持ちがあるわけではない。

魔術に強い耐性があるカンピオーネには魔術は効かない。

それは治療のための魔術とて例外ではない。

ただ唯一、体内に直接送り込んだ場合のみ、少しだが効力を発揮する。

しかし……

「ダメ……わたしの治療がまるで効いていない……」

才華の傷は一向に塞がろうとしない。

「……………才華、ごめんなさい。わたしはあなたを救えない。だけど……………」

エリカは、一筋の涙を流した後、覚醒しようとしているアテナに對して炎を放ち続けるリーゼロツテの元に愛剣を持ち向かった。

「神魔劍・ディアボロ・ロツソ（紅の悪魔）」

そつとリーゼロツテの隣に立つエリカ。

それを見たリーゼロツテは何も言わずに、天を仰いだ。

そこには、いつもなら輝いているはずの星の光すらない、暗闇だった。

「……………ごめんなさい」

そつと呟くリーゼロツテに對してアテナは

「これこそ、古の『蛇』！ ついに妾は過去を取り戻した」  
微笑んでいる。

それを紅の姫と魔女は不快そうに見る。

さらに女神は天に向けて、高らかに謡い出した。

妾は謡おう、三位一体を成す女神の唄を

天と地と闇をつなぐ、輪廻の知恵を。妾は謡おう、貶められた女神の唄を

忌むべき蛇として討たれた女王の嘆きを

妾は謡おう、引き裂かれた女神の詩を

至高の父に凌辱された慈母の屈辱を

我が名はアテナ

ゼウスの娘にしてアテナイの守護者、永遠の処女

されど、かつては命育む地の大母なり

かつては闇を束ねし冥府の主なり

かつては天の叡智を知る女王なり

ここに誓う、アテナは再び古きアテナとならん

朗々と言霊が紡ぎ出される。

歌う様に、祈るように、讃えるように。

この詠唱が進むにつれて、アテナの姿が変わっていった。背が伸び、すっきりとした手足も伸び切り可憐な少女の背格好から端麗な乙女の形へ。

面差しから幼さも消えていく。

外見だけ言えば、十七、八歳ほどに見える。

着衣も現代の衣装から、古風な白い長衣となっていた。

しかし、彼女達にとってはそれはどうでも良い。

例え、目の前にいるのが例え、大いなる地母の末裔であろうとも、死と闇を従える暗黒の女王だとしても、天と地と闇を統べた落魄せし女王だったとしても。

紅の姫と魔女にとつては。

彼女達の体温は奪われている。

ゴルゴネイオンを取り戻したアテナの間近にいたせいだ。女神が放つ冥府の冷気を浴び彼女達の身体の『火』つまり『魂』が消失しようとしているのだ。

「古き力を取り戻したはいいが、まだ上手く御せぬようだ」  
笑みを含んだアテナの声が響く。

そこに宿る言霊はリーゼロッテと祐理が遭遇した時よりも比較にならないほど重厚だった。

「ねえ、リーゼロッテさん。あなたってあのリーゼロッテよね」

「そうよ。それで何かしら？ 目狐」

「わたし、あなたと今なら、親友になれる気がするの」

「……………そうね。おそらく、私達の考えていることは同じよ」

二人して微笑む。

その微笑みはアテナが頬笑みとは比べモノにならない。  
それほど、怖い。

「なんだ？ 人間よ、今、妾は気分が良い。見逃してやる。消えろ」  
エリカが地面を蹴るようにして、アテナに向かって走り出す。  
しかし、今までのエリカとは明らかに違う。

なぜなら、エリカが蹴った地面がひび割れているから。



「人間、命を無駄に」

「断罪の焰」  
だんざい ほむら

リーゼロッテが放った緑色の炎も先ほどまでとは明らかに違う。

あの、アテナが自身の武器である鎌を振るってリーゼロッテが放った『断罪の焰』防いだのだから。

彼女の緑色の炎には今、神をも殺す力が宿っていた。

「小賢しい……………」

「余所見をしている暇はないわよ！」

アテナに向かってエリカはディアボロ・ロッソを振るう。

それをアテナは忌々しそうに鎌で受け止めるが……………

アテナが受け止めた鎌が真つ二つに切り裂かれ、アテナの頬に斬り傷が生まれた。

「なんとということか……………人間に傷をつけられ　　っ!？」

「あら、気づいたの?　じゃあ、死んでちょうだい」

彼女の頬を何時の間にか来ていたリーゼロッテが優しくさわる。

「湖の毒」

それはリーゼロッテが持つ魔術の中でも、かなり悪質な部類に入る魔術。

その名は『湖の毒』、傷口からリーゼロッテが放った毒が体内に侵入し、体内から対象者を溶かす魔術。

それも、相手の呪力を吸収して、毒は増え続けるため、相手は戦闘中に呪力を使えば使う程、毒は力を発揮する。

「わたしのことも忘れてもらってわ。困るわ、女神様」

啞然としてしまっているアテナにエリカが斬りかかる。

隙をつかれてしまったアテナは左腕を……………

「妾が……………ただの人間に毒を盛られ……………左腕を切り裂かれるなど……………なんたることか……………」

斬り落とされた。

「ふん、あなた、目狐の癖にやるじゃない」

「何百年も生きる魔女であるリーゼロッテさんに褒められるなんて

光荣ですわ」

軽口で、そう言い合う、二人に対して、アテナは

「おのれ……おのれ……このまま、生かしておかん」

アテナから、これまでとは比べ物にならない量の呪力が放出される。

「あら？ そんなに死期を早めたいの？」

軽口に言うフリーゼロットだが

「あの程度の毒、進行を遅らせるなどメデューサの力も持つ妾にとつては、容易いこと」

「そう、進行を遅らせることで精一杯なのね」

「妾を愚弄するか！？」

怒りに身を震わせるアテナとは対称的に魔女は不敵に笑う。

「これだから子供は」

そう口を挟んだのは紅の姫だった。

彼女も魔女と同様に不敵に笑っている。

「そうね。わたしも交渉できない子供は嫌いだわ」

「貴様ら……妾を誰と心得る……」

アテナはどこからか、大きな白銀の『蛇』を召喚する。

その大きさは、三階建てのビルにも匹敵する程、大きな蛇だった。もはや、自然界に存在するそれではない。

いや、もし、自然界にいたとしても、それは竜ドラゴンあるいは龍と呼ばれるだろう。

「目狐、アテナの来歴は知っているわね」

「ええ、もちろん。アテナはメデューサと同一視されているわね」

「才華様にこの間、お教えしたのが懐かしいわ」

「そう、あなたが教えたから……才華はディオニューソスの来歴を知っていたのね」

「そうよ。なに？ あなた目狐の癖にあらうことか、才華様にお教えしたかったの？ 残念ね。あなたの出番は一生ないわ」

「……妾を無視するか……このような狼藉をされたのは初めて

だ」

暗闇が支配する世界で一筋の白銀が魔女と紅の姫に襲いかかる。しかし、二人は一步も動かない。

まるで何かを信賴するかのように。

白銀は魔女と紅の姫に届く寸前で動きを止める。

何かに遮られて。

「申し訳ありません。私がついていながら才華様の手を煩わせてしまいました。どのような仕置きでも私は受ける覚悟です」

魔女に続いて

「ごめなさい、才華、わたしではあなたを救えなかった」

紅の姫も続く。

「いや、ありがとう。時間を稼いであただけで十分だよ。おかげで魔力も多少は回復できた」

そこには白銀を輝く一本の雷刀で受け止めている少年の姿があった。

「なぜ、生きている神殺し……」

「残念、俺はまだ、あの退屈な世界に戻る気はさらさらないんでね。少なくともハーレムを作るまでは」

そう、微笑む少年の笑みに、思わず見とれてしまふ、魔女と紅の姫だった。

わたしは呆然と立ち尽くしてしまう。

先ほど、甘粕さんから渡された資料で見たことのある女性、エリカ・ブランデッリさんが才華君に回復の魔術をかけていたけれど……今はまつるわぬアテナの元に向かわれた。

残っているのは無造作に横に寝かされた少年だった。

彼の心臓は貫かれている。

正直に言って即死。

それなのに、激痛があつたはずなのに……私に『間に合つて良かった。祐理……』と声をかけてくださった。

わたしのせいなのに……わたしがあの時、自己満足で進んでいなければ、後、一步、いえ、後、半歩後ろに下がっていたら、才華君は死ぬことはなかった。

わたしの霊視がそう教えてくれる。

まるで、体がばらばらに碎けたみたいだ。

先ほど、前に進む時、あれほど楽だったというのに今は一步も進めない。

彼の元に行きたいのに。

暗闇に対して目が馴れてきているはずだったのに、また目の前が暗くなる思いだった。

それでも、進まないといけない。

わたしが起こしてしまった現実だから。

一步。

また一步進む。

後、二歩、進めば、才華君まで辿り着けると言うのに、未だに、わたしは才華君の元に辿り着けない。

まるで、かなしばりの術にかけられたみたいだ。

それでも一步。

「はあ、はあ、はあ」

呼吸が荒くなる。

彼に拒絶された、違う、彼に拒絶された、と勘違いした時と同じような感覚に見舞われる。

いえ、その時、以上に。

最後の一步を踏み出す。

そして、安らかそうに、まるで眠っている少年に近づく。

エリカさんがダメだったのだ。

わたしのような者が回復の術をかけても、効果はないだろう。でも、私は頬に冷たい滴を感じながらも、かける。

「……………お願い」

呪詛のように。

まるで、誰か、恨みがある方に呪いをかけるように。

彼を思いながら、必死に。

先ほどから、感じていた頬を伝う滴が多くなるのを感じる。

空に星は見えないけれど、雨は降っていないのに。

わたしの頬を伝う滴は何なんだろう？

自然と彼との顔の距離が縮まる。

彼の顔を見ていると今でもときどきする。

今なら、この気持ちの意味も理解できる。

わたしは彼を

だけど、わたしはいつも気づくのが遅すぎる。

遅すぎて後悔する。

なんでだろう？

なんで、神様はいつも、こんなにも理不尽なんだろう？

分かっています。

これは、私の愚かさが招いた結果。けれど。

わたしは彼との距離を縮める。

こんなことは許されない。

だけど……………

ごめんなさい。

リーゼロッテさん。

エリカさん。

わたしと彼との距離がなくなる。

ああ、こんなにも暖かくて。

嬉しさに包まれるのに。

彼は……

ゆっくり、ゆっくりと、わたしは彼から離れる。

これは、わたしのけじめ。

わたしは、彼に救ってもらった命を。

わたしは震える足を使って立つ。

リーゼロッテさんとエリカさんは相手が神だというのに懸命に闘っている。

わたしも、わたしも、分かっています。

復讐が何も生まないことを。

だけど。

それでも。

「わたしは」

そつと体を抱き寄せられる。

え？

わたしは咄嗟に抱きよせてくれた人の顔を見る。

「そんな悲しい顔をしないで祐理。祐理は笑っている方が可愛いから」

「ああ」

わたしは今まで流していた滴の正体に気づく。

だけど。

今、瞳から溢れ出るものは先ほど、流していた滴とは明らかに違う。

だってこれは。

「ただいま」

黄金に輝く、彼の体を見て。

わたしは

## **E p i s o d e 1 3   再 び ( 後 書 き )**

次の更新は4月13日になる予定です。



## Episode 14 雷と夜

死

それは生きとし生けるモノ全てが生まれた時より科せられた義務  
であり宿命

それから逃れる術は存在しない<sup>すべ</sup>

それが例え、神であろうと

それが例え、全てを手に入れた王であろうと

生きている限り、待っているのは死

人は死を怖れる

それが未知の体験だから

だから人は死を嫌う

生を受けてから、たった一度しか体験できないことだから

しかし、彼、魔法の王は違う

一度、それを体験している

だから、彼はそれがどういうものか知っている

それは世界の真理

だから彼は不当な真理に逆らう

それは前世の体験がそうさせるのか？

それとも、別の理由なのか？

それは分からない

しかし

彼は誰よりも生きることには貪欲だ

守りたい心があるから

愛する心があるから

俺は、ゆつくりと目を開ける。

何か、誰かと話をしていたような気がするけど、思いだせない。

……俺の目の前で祐理が立っている。

ここから見える祐理の顔は……泣いている。

何で泣いているかは分からないけど。

女の子が泣いているのに何もしないのは男じゃない。

俺は痛む体に鞭をうって立ち上がると。

俺はそっと、祐理を後ろから抱きしめた。

セクハラじゃない。

うん、きっと。

そして

「そんな悲しい顔をしないで祐理。祐理は笑っている方が可愛いから」

と祐理の耳元で呟く。

「ああ」

祐理は俺の顔を見ると、流していた涙をさらに増やす。  
ちよっ!?

俺が抱きしめたのがそんなに嫌だったのかな!?

「ただいま」

俺が声を絞り出して言えたのは、そんな気のきいた言葉じゃなかった。

……俺って最悪だな。

「ありがとうございます」

祐理は俺の体に抱きつく。

その体は冷たい。

俺はそれを割れモノを扱うように、優しく抱きしめる。

そんな俺の胸に祐理は顔を鎮める。

まるで、子供が親に甘えるかのように、祐理は俺の体を握る力を強める。

それに俺は応えるかのように、少しだけ、ほんの少しだけ、力を強める。

祐理もそれに応えるかのように俺にしがみつく力を強める。

それがたまらなく嬉しかった。

人と繋がっていると言う感覚がたまらなくて。

俺の中から力が溢れてくるようで。

今なら何でもできる。

そう、錯覚してしまう位に。

「……ありがとうございます」

そっと祐理は俺から離れる。

しかし、祐理の手は名残惜しそうだった。

たぶん、俺の錯覚ではないと思う。

俺もこんなに名残惜しいから。

「わたしはもう、大丈夫ですから行ってあげてください」

祐理は俺とは反対の方を向いてから指さす。

そこには……リズ、エリカがいた。

二人の前に立ちはだかるのは白銀に輝く蛇と淡く輝く一人の少女。  
いや、少女というのは失礼かもしれない。

そこに立っていたのは俺達と同じ位の歳の女の子だったから。

だけど、彼女が人間ではないことは直感的に分かる。

何でだろうな？

「分かった。祐理は危ないから遠くに避難していて」

「いえ！ わたしがここで待たせていただきます！」

俺の言葉に祐理は何かを決意したまなざしで応える。

「え？」

「わたしはここで待たせていただきます！」

俺の呟きにも真剣に応えてくれる。

「でも……」

「それでも、待たせていただきます！」

祐理の決意は確かなものだ。

だから、俺はそれを否定しない。

俺が

「分かった。祐理の方に攻撃が……いや、女神様を瞬殺してくる

よ」

女神あいつに何もさせなければいいんだから。

「はい、お願いします！ ……それで、この戦いが終わったら…

……お話したいことがあります」

まるで何かにすぎるような祐理の視線。

俺はそれに応える。

「そうなんだ。俺も、ちょうどもう一度、祐理と話がしたいと思  
っていたんだ」

祐理を不安にさせないために。

俺を信じてここにいてくれる祐理のために。

「だから……だから、負けないでください」

祐理の懇願するかのような瞳に俺は

「瞬殺するって言っただろ？」

笑って返す。

女の子に頼まれたら断る訳にはいかないだろ？

白銀は魔女と紅の姫に届く寸前で動きを止める。

何かに遮られて。

「申し訳ありません。私がついていながら才華様の手を煩わせてしまいました。どのような仕置きでも私は受ける覚悟です」

魔女に続いて

「ごめなさい、才華、わたしではあなたを救えなかった」

紅の姫も続く。

「いや、ありがとう。時間を稼いであただけで十分だよ。おかげで魔力を回復できた」

そこには白銀を輝く一本の雷刀で受け止めている少年の姿があった。

「なぜ、生きている神殺し……」



「残念、俺はまだ、あの退屈な世界に戻る気はさらさらないんでね。少なくともハーレムを作るまでは」

「たわごとを！ 貴様が篡奪した権能は父であるゼウスに権能！確かに生と死を司るものでもおかしくはない！しかし、貴様の権能は別だと妾は判断していたのだぞ！」

「誰が教えるか、知りたければ、俺を倒してみろ！」

才華は白銀に輝く蛇を抑えつつもアテナと喋り続ける。

「……………その女どもといい、神殺しといい……………どこまで妾を愚弄すれば気が済む……………」

「俺達はおまえを侮辱している、つもりはないさ。おまえが勝手に勘違いしているだけだ」

「何を言うか！ おまえ達と妾とでは感じ方が違うのだ！」

「そうか、なら」

「来るが良い！ 神殺し！」

「リズ、エリカ、下がっている。後は俺がやる」

そこには、いつもの軽いノリの才華はいない。

本当の意味での『王』がそこにはいた。

「……………でも、才華、あなた権能が……………」

エリカの心配そうな声に

「大丈夫、使えるような気がする」

「条件が変わったということなのですか？ 才華様」

「分からない。だけど、いける気がする」

「……………分かりました。下がるわよ、目狐」

「ええ」

そつと二人は下がる。

『王』と『神』の戦いを邪魔しないために。

「二人が下がるまで待っていてくれたのか？」

「ふん、そのようなものではない。妾とて、神殺しとの戦いは特別なもの。ゆえに簡単に終わってしまつては面白くない」

「その余裕、撃ち砕いてやるぜ？ 人間は羊の皮をかぶった狼だぜ」

？」

「面白い、その牙をみせてみよ！」

アテナの顔に笑みがこぼれる。

先ほどまで怒っていたのが嘘のようだ。

「ああ、そのつもりだ。初めから本気で行く。出し惜しみなしだ！」  
才華の周りに淡い光が集まる。

それはディオニューソスとの戦闘のため消耗している才華が発することができない量の魔力。

それを才華は今、笑顔でやってのけた。

限界突破。

言葉にしてみれば簡単な言葉。

しかし、実際は違う。

人間の脳は力を無意識のうちにセーブしている。

それは、別に人間の体が欠陥品な訳ではない。

単純に、筋肉やその他の部位に必要な以上の負担をかけないためである。

その枷が外れた状態のことを日本の言葉で火事場の馬鹿力という。それは筋肉に負荷をかけつつも、本来の力かそれ以上の力を発揮する。例え、老人であったとしても車を持ちあげられる程の力を。

しかし、その力を発揮した時に体にかかる負担は計り知れない。

防衛本能による枷がはずれているのだから。

今の才華の状態はそれに近かった。

カンピオーネの本能である、戦うために体を万全の状態にもっていく。

今、それが才華の体の中で行われているのだ。

「……………神殺しよ。それほどまでの力を温存していたとは、未恐ろしい」

アテナは感心したように言う。

何も知らずに。

「だから、言っただろ？」

才華は分かっていた。

自分の体がどういう状況なのかを。

だから、長期戦などできない。

一瞬に全てをかける。

本当に一瞬に。

だから、そのために今できることは。

「行くぞ！」

肉体強化魔法『精霊の旋律』を使っていない状態で走りだす才華。

それは普通の高校生のそれだ。

お世辞にも早いとはいえない。

「ふん！」

アテナは蛇を操り、才華を薙ぎ払おうとする。

強大な体格の蛇に才華はなす術なく、吹き飛ばされる才華。

「っ!？」

ただの高校生の体の才華は簡単に吹き飛ばされる。

そして、木に叩きつけられる。

「……………これは……………痛いのは苦手なんだけどな」

「ふん、威勢の良いことを言ったわりに、だらしないではないか、神殺し、よもや、それが貴様の全力ではあるまいな？」

あきれた様子でそう言うアテナに何も言わずに才華はゆっくりと立ち上がる。

「こつちも、色々と事情があるんだよ……………あんたみたいに、力が有り余っている訳じゃないしな」

「妾で、さえも、欺く秘術で仮死状態であつた訳ではないのだな。

『本当に』死んでいたのだな、神殺し。本来なら、あなたの万全の刻に戦いたかつたものだ」

「猶予なら、欲しいな」

「先程の威勢の良さはどうした？」

「……………だから、言つたろ？ 人間は『羊の皮をかぶった狼』だつてな」

次の瞬間、才華の体から、先ほどよりも、多量の魔力が放出される。

「そうか……神殺し、時間稼ぎが、狙いか……」

「そうだ。俺の権能は俺の魔力に依存する傾向があるみたいだね。俺の中に宿る魔力が少なければ、少ない程、威力が落ちてしまう。だから」

時間稼ぎだよ。

「妾を騙すか？」

「ああ、知恵の女神である、おまえを」

「ははは、面白い神殺しだ。神殺し、貴様、世が世なら『王』ではなく、もっと別のものになっていたかもしれぬな」

「何になっていたかは聞かなくておくよ。俺の誘いに乗らないか？ アテナ。俺には放てば絶対に負けないと自負している『槍』がある」

「ほう」

「知恵の女神なら、分かるだろう？ 勝負しようぜ。それとも、真正面からの勝負は『臆病な』女神様にはできないか？」

才華の言葉に激昂するアテナ。

「妾を侮辱するか！ どこまで愚かな神殺しなのか……あなたは程の『馬鹿』を妾は今まで見たことがないぞ！」

「ありがとつ、最高の褒め言葉だよ」

我のモノを汝は傷つける

我は神を殺した

我は神を恐れぬ、悪魔を恐れぬ

我の前に立つ何人たりとも我を殺すことはできぬ

我は望みを叶える、そのために力が必要だ、我に力を

神をも悪魔をもうち滅ぼせる最強の力を

我の前に跪け

さすれば我は貴様の願いを叶える

我は一族を守る者

それは、我が心の力

才華の周りに大量の雷が現れて彼を守るように纏われる。

「ほう、それが貴様の『槍』か？ 神殺し、いや、それほど力を有している、あなただ。神殺しなどと呼ぶのは不敬であろう。名は？」

「草薙才華」

「草薙の王、才華か、覚えてぞ。アテナの名にかけて、あなたの名は忘れない」

妾は夜の女王

神殺しは妾に求めた

古き世から、あなたが望むのは

常に戦

それに応えずして、誰が夜の女王か？

妾は夜の女王

名はアテナ

闇よ、妾に力を

光が世界に戻る。  
なぜなら、世界を支配していた『闇』が一つに集まったから。  
彼女の名の元に。  
それは、決まっていたこと。  
王と神との間に。



二人の顔は笑顔だった。

何が愉快なのか分からない。

ただの殺し合いなのに。

あるいは、彼らが持つ『不死』の属性が、その笑みを作りだしているのかもしれない。

不死の属性を持つ神、アテナ。

『財産の守護者クテシオスの雨』により、ディオニューソスの不死の権能を篡奪した才華。

二人は共通している。

不死という点で。

例え、属性は違っても。

彼らは『死』というモノを理解している点でも。

だから

『守護者の咆哮』

『女王の闇』

二つは激突する。

笑顔で

殺し合う

願わくば

争うの必要のない世界

笑顔（泣きながら）

殺し合うモノがいなくならんことを

だが、神殺しは進む

そこに貫きたい意思おもいがあるのだから

「俺の勝ちだ」

夜の女神のおもい体を越えて

## **E p i s o d e 1 4   雷と夜（後書き）**

次回更新は4月15日を予定しています。

## Episode 15

「もう、意味が分からないわ。生きかえるなら先に生きかえるって言うってから死んでくれないかしら？」

エリカは不機嫌そうに、そう呟く。

そんなエリカの呟きに才華はボロボロの状態だったが、苦笑いを返しながら、リーゼロッテに支えられて何とか立っていた。

要件が終わった、と言わんばかりにリーゼロッテと共に公園の外に出ようとする。

「……………待て、神殺し……………なぜ、倒れた妾を置いて行く？」

外に出ようとしていた才華達に対して地面に横たわっているアテナは才華に話しかける。横たわっているにも関わらず、その尊大な態度は変わっていないが。

「はあ？ 俺がそうしたいからに決まっているだろ？」

「……………妾に情けをかけるとでも言うのか？」

才華の言葉を聞いたアテナは眉を吊り上げながら、再び、質問する。

「違う、違う、俺は美少女を殺したくないだけだ」

「っ！？ 神殺し……………そのような理由で妾を見逃すのか？」

「ああ」

リーゼロッテは微笑ましそうに才華を見て、エリカは、呆れたような視線を才華に向ける。

「まあ、その理由が嫌なら、借りだ」

「……………借り？」

「ああ、俺が困っていたら助ける。それで今回は終わり、また、機

会があつたら戦おうぜ。俺も今日みたいな状態じゃなければ、受けるからさ。美少女の願いなら聞くぜ」

「……………今日の屈辱はいつか、果たすぞ『草薙才華』」

「ああ、またな。アテナ」

そう言つてリーゼロッテに支えられながら、エリカ、祐理を伴つて公園を出る才華達、一同。

一応、この公園の周りには民家はなく公共施設だけなので、認識障害の魔法とアテナの人払いの結果によつて、先ほどの戦闘は周りに気づかれなかったはずなのだが、周りの被害が尋常ではない。

公共の施設は半壊。

公園の遊具は見るも無残な姿になっている。

おそらく、この後、日本の呪術協会は大変だろうと思いつつも、才華やリーゼロッテ、エリカは、あえて口にしない。

そして、公園を出た所でエリカは口を開く。

「それで、何で、才華は生きかえたの？」

「才華様、大丈夫です、周りに目はありません。というより、才華様を見ていた輩の意識は刈り取りました」

……………その刈り取られた人物が甘粕であることは言わずとも分かるだろう。

顔には出していないがリーゼロッテも、実はかなり気になっている様子である。

「ああ、俺の権能の力だよ」

「え？ 才華の権能？ 生きかえるたぐいの力に目覚めたの？」

「『財産の守護者の雨』これは、相手の権能を無効化する能力っていうのは知っているよな？」

「ええ、以前に聞いたわ」

エリカの眩きと同時にリーゼロッテも頷いている。

「だけど、実際に使ってみると、どうやら、それだけじゃなかったらしいんだ。その真の力は相手の権能を奪うことだったんだ」

「は？」

エリカどころか、リーゼロッテでさえも、口を開けて驚いている。  
「……………はあ、カンピオーネの規格外にはいつも呆れさせられるわ……………」

「才華様、それによるリスクは？」

心配したように聞くリーゼロッテ。

「ああ、ない。だけど、奪った権能を使えるのは一度だけみたいなんだ。だから、俺の中にもう、『財産の守護者の雨』の気配はない……………では、今回だけなのですね？」

「ああ」

リーゼロッテは才華の言葉を聞き、真面目な顔をする。

「では、これから無茶をしないでくださいね！ 私は許しませんよ、才華様が死ぬなんて！」

才華は若干、困った顔をした後

「……………分かりました」

了承した。

「さあ、帰りましょう。仕方ありませんね。今日の所は、目狐。あなたも来なさい。それから、あなたも。一緒に食事をしましょう」

「あら、良いの？ わたしのことをリズさんは嫌っていると思ったのだけど」

「ふふつ、『正妻』の余裕というものよ。目狐」

「……………才華……………」

エリカの顔は微笑んでいるが一切、笑っていない。

そして才華は、今まで感じたことのないほどの悪寒がはしる。

「……………はい……………何でしょうか……………」

「あ、あの！」

そこで才華は思った。

助かった、と。

しかし、事態は才華が考えているよりも、悪かった。

突然、祐理は涙を流し始めたのだ。声を出さずに。

「ど、どうしたんだよ」



慌てる才華。

才華とは対称的にリーゼロッテとエリカは落ち着いていた。リーゼロッテは全て知っているし、エリカはこういう事に強いので、何も聞かずにだいたい分かる。

ある意味、似ている二人だった。

「な……………なぜ、怒ってくだらないのですか？」

「え？」

「わたしが、何もしなければ、才華君は危ない目に合わずに済みした……………わたしのせいで……………わたしのせいで」

リーゼロッテから、離れて自力で立った才華はゆっくりと祐理の元まで歩いてく。

一步、また、一步、進む度に祐理の顔には恐怖が浮かぶ。

拒絶と言う名の恐怖を。

そして、祐理の目の前まで来た所で、才華は指で祐理の頬を伝う、滴をすくいあげて

「祐理は自分の思いを通したんだろ？」

微笑みかける。

「……………はい」

「それなら、いいよ」

「え？」

「俺が許す。なんたつて俺は『魔法の王』だからな」

「……………ですが……………」

「俺達はずつと、前から『友達』だろ？ それに、これは魔王様の命令。だから拒否することなんて許さない」

才華は優しく祐理を抱きしめる。

「……………ありがとうございます」

また祐理の瞳から零れおちた落ちた滴に恐怖の色は浮かんていなかった。

例え、明けない夜があっても

見守ってくれている星はある

その夜、少女の涙が少年の温もりの中で溢れるのだった

「お兄ちゃん！ こんな時間までお姉ちゃんを引っ張り回して！」  
あれから、つまり、アテナとの戦いを終えた俺とリスは取りあえず、家に戻って来た。

エリカと祐理は色々することがあるらしいから、リズに誘われていたにも関わらず、一度、家に帰った。

エリカはともかく、祐理は日本の呪術協会に所属しているから、色々と報告しないといけないことがあるんだろう。

そして、俺は絶賛、静香に……… だけではなく、商店街の皆にも怒られている。

傷が痛いのに………

頼みの綱のリズはと言うと、静香の後ろでおろおろしている。

何でも、リズの帰りが遅いことを心配して……… 商店街、総出で探してくれていたらしい。

それでやっと帰って来たと思ったたら俺と一緒にだったので俺が絶賛、お説教中だ。

曰く、『リズちゃんみたいな良い子をこんな遅くまで連れ回すな！』

曰く、『私達のアイドルのリズちゃんを一人占めするな！』

曰く、『もっと健全なお付き合いをしなさい！』

曰く、『リズちゃんといちゃいちゃしたい！』

最後の言葉を言った魚屋のおっちゃんは俺が手を出す前に、商店街の皆に袋だ叩きにあつた……… 怖い………

皆、魚屋のおっちゃんを殴る時の目がすわってたよ………

さっきまで戦っていたアテナより怖いよ……… いや、むしろ、まつろわぬゼウスと戦った時にも、ここまで恐怖はなかったよ………

「あ、あの……… 才華様を……… 叱らないであげてください………」

リズがおれのために、おろおろしつつもやっと助け舟をだいでくれる。

『うわああああん、何て良い子なんだ、リズちゃん。馬鹿な才華君にはもったいない』

皆、泣きだした………

おい！ 俺は馬鹿じゃない！ 馬鹿って言った奴が馬鹿なんだぞ！  
しかし、一向に皆、泣きやむ気配はない……… こんな時はじいち

やんに頼るのが一番だ！ そう思った俺はじいちゃんの方を見る。

.....結論から言います。

じいちゃん、メツチャ怒ってた。

じいちゃんが怒ってることなんて滅多にないのに.....

「才華.....」

「何でしょうか.....じいちゃん」

「この後、少し、話をしようか」

「.....」

その日、俺は久しぶりに地獄をみることになった。

「ふお、ふお、ふお。アテナ、酷くやられたの」

神殺しを認めなかった女神の傍で笑い声が響く。

その笑い声を聞いた女神は顔をひきつらせながら、笑い声のした方を見る。

そこには真つ白な髭を胸のあたりまで伸ばした老人は愉快そうに

笑っている。

「っ！？ あなたは……………なぜ、ここに……………あなたは既に……生と死の狭間に隠居していたはずだ……………」

女神は神殺しに見せた驚きの比でない程の驚愕をその身に宿す。

「あの馬鹿を殺した人間のおかげじゃよ。あやつのおかげでわたしにも役割ができた、ちとめんどろじやったが、こちらに来る事ができたのじゃよ」

また、老人は愉快そうに笑う。

「……………まさか、あなたがこの段階で現れるのは……………」

驚愕の次に、悔しさを宿す女神の体を老人は少しだけ目を細めて見る。

「分かっておるよ。しかし、アテナよ、なぜ、あやつを認めなかったのじゃ？」

「……………妾は知恵の神……………あのような馬鹿を簡単に認められるはずがない」

「そうか、そうか、あやつを気にいったのじゃな？ まあ、よからう」

再び、笑う老人に女神は

「妾を侮辱する気か！？」

「ふお、ふお、ふお、そんな気はないのじゃがの。安心せい、あやつには時がある。それに、こちらに来て気づいたのじゃが、少々、厄介な事になってきておるな。今はまだ、大丈夫じゃが、下手をすると、ちと困った事になる」

「……………何かあるのだ？」

「さあ、の。まあ、もし、何かあっても我等に認められた魔王なら何とかするじやろう」

「……………あなたが認めるのか？」

「分からぬ、の。あやつの成長しだいじゃ。それにあやつはあの馬鹿と似ている所があるようじゃし」

老人は面白そうにそう言う。まるで、今の魔王は話しにならない、

と言った風に。

そして老人はもう一度、笑った後に女神の前から姿を消した。  
消えたというのに女神、その老人がいた方をずっと見続ける。  
「…………… いったい何があるというのだ……………」

そして夜の星は再び光を取り戻していた

五つの星の光が女神を祝福する

## Episode 15 (後書き)

急ピッチで、思い出しながら、書いたので、描写などを追加する可能性もあります。

ご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2123r/>

---

Absolute Desire

2011年4月18日09時40分発行